人魚「姫」と私

墺離

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人魚「姫」と私

【Ｎコード】
Ｎ４５３０Ｍ

【作者名】
墺離

【あらすじ】
一・・ある日私は拾いモノをした。
でもいまになってつくづく思う、そう安易にモノを拾っちゃいけないのだということに。

拾いモノ

ある日私は拾い”モノ”をした。
……後に色々と迷惑を被(こうむ)られる訳だが、そのときはそんなことも露ほども思いもしなかったわけで。

結論を言えば、無暗に落ちているものを拾ってはいけないということだろうか。

＊

草木も目覚めぬ早朝。
うっすらと朝焼けの光が差し込む度合いの薄暗さの中、私は籐の籠を抱えて家を出た。
山々に囲まれ海に面した村の更に外れ、小高い山の中腹にひっそりと立つ私の家から目的の場所までは少し歩かねばならない。
薄闇の中ほとんど整備されていない山道を降りていくのは危なかしくもあるが、さすがに通い慣れたもので足をとられることもなく村へと続く山道を進んでいく。
やがて村の手前までくれば三叉路に行き当たるのでそれを右に入り込み―：やがて聞こえてくるのは激しい水の音。
村を抜けた向こう側にある海へと続く川はここ数日続いた雨のせいか弱冠水嵩(みずかさ)を増やしていたもののわりと穏やかな流れを見せている。

そのすぐ横には川から水をひき人工的に形を整え作られた簡素な洗い場がある。
少し窪んだ場所に籠と腰を降すと、籠のなかに山のように溜まっている洗濯物を取り出しそれを黙々と洗い始めた。

この時間外を出歩く村人はまだいない―：村のご婦人たちが一日の仕事を始めるのはあと一刻といったところだろうか。
ご近所付き合いというものが極端に苦手な私にとって、ご婦人たちの集団というものは是が非でも避けて通りたいものだ。
そのためならば早起きなど苦にもならない。

雨のせいで溜まってしまった洗濯物は一人分とはいえそれなりに量があったため全て洗い上げるのにいつもの倍の時間を要してしまったが、黙々と洗い続けたおかげか半刻ほどで終えることが出来た。
水に手を入れっぱなしだったためか掌の皮はすっかりふやけてしまっている。

さぁ、用は済んだ。さっさと家に戻るとしよう―：

と、洗い終えた衣服をしぼっては籠の中へと放り込んでいく…そこでふと、違和感に気づいた。
水の中に残った衣服を掴んだはずの片手が引き上げたもの、その感触は水をすった布とはまた明らかに違っていたのだ。

ぐにゅっと弾力があって、ぬめっとしている。

「？」

引き上げてみてみればどうやら私が今掴んでいるものは”尾ひれ”のようだ。

逆さづりにされた”ソレ”は気絶しているのか、はたまた死んでいるのかぐでっとして動かない。

……見様によっては秋口に海から上ってくる魚に似ているかもしれない。

しかし魚というには少し難がある、蜥蜴のようにも見えてしまうのはその体を覆う表皮が緑色の鱗で覆われているからだろうか。

背びれから尾びれにかけては薄い膜の様な銀色の鰭（ひれ）がついており…

それのエラがひくりと動いた。どうやら生きてはいるようだ。

「ふむ」

このまま見ぬ振りをしてもいいが、絶対にこの後来るであろうご婦人たちが絶叫間違い無しのこの見た目では、置いていくのも後々面倒くさいことになりそうだ。それに―：

「……」

何よりもこれが何なのかが気になってしようがない。

…とりあえず持って帰ることにしよう。

＊

家に戻る頃にはすっかり朝日もその顔を半分以上山向こうから覗かせており、家の中を明るく照らしている。
明るい場所で見れば見るほど”それ”のグロテスクさ加減に拍車がかかる。
小さいが手足もついているようだ―・・こうしていみるとおたまじゃくしにも見えないこともないがやはり”魚”っぽい。

「・・しかし該当するものがないな」

帰宅して早々に爬虫類系の図鑑を開いて見比べてみたがコレと該当するようなものは載ってはいなかった。
かといって魚というわけでもないだろう、何せ目の前のコレは気絶していてその目がしっかり閉じられているのだ―・・そうこれにはしっかり瞼(まぶた)が存在している、故にこれは魚類ではない。

「新種か？」

コレの正体が掴めない事に多少の苛立ちも覚えたが、それ以上に私の中の知的好奇心が疼きはじめた。

気になる、知りたい。

その体を持ち上げ上下左右にふったりゆらしてみたりとしてみるがいっこうにコレは目を覚まさない。
どうやら衰弱してしまっているようだ、このまま放っておいたら死んでしまうかもしれない。

（ならばいっそのこと死んでから体を開いてみるのも・・・）

いやいや、と首を振る。
中身にも興味はあるがまずはしっかり生きている状態での観察がしたい。

では何故衰弱してしまっているのか？と考察をしてみよう。

川や山の生き物とは考えにくい。
では海からあがってきたのではないだろうか？
考えられなくはない。雨が降り始めた最初の頃はちょっとした嵐のようだったし海のほうも相当荒れていたようだ、それによって川上まで流されてきたのかもしれない。
では海の生き物だと仮定して次に衰弱にいたる要因は何か？

海と川とでは何が違うか―・・水、そう水だ。

海水で生きてきたのならば真水にはその身が適応していないのかもしれない。
そう結論付けた私は早速、桶に溜めておいた雨水とその量に対比した塩を入れ混ぜ、海水もどきをつくった。
その中にソレをいれてみる。

はじめはどうかとも思ったがそのまま様子を見ること半刻、ソレに変化が起きてくる。
ぴくりぴくりと体のところどころが動きはじめている、当たりのようだ。

「あっ」

だがそこで私はふいにコレの正体に思い当たってしまった。

昔、読んだ事がある本にのっていた気がするー・・ここいらの海域では観察された事例がなかったためすっかり失念していた。
あぁ・・と落胆する、もしコレがそうならば研究なんて論外じゃないか。

「何て残念だー・・半魚人だなんて」

「違います！！！」

子供のようにカン高い声の盛大な突っ込みは下の一・・つまり桶の中から。
驚きに視線をむければソレが瞼をあけてこちらを見上げていた。

「喋った……やっぱり半魚じ」

「人魚です」

グロテスクな見た目の中、意外にもその開かれた瞳だけはつぶらで唯一”かわいらしい”と表現できるものだろうか。
アクアマリンの色をした瞳は美しさも感じさせられる。
私からの反応がないためかその瞳がこちらをじっと見上げ

「人・魚・です」

と念を押すように二度主張した。

「……いやいやいや人魚って」

過去に読んだ同じ本にも人魚の記述はあったー・・あったがしかしこんなのではなかった筈だ。

私の記憶違いでなければ人魚というものは上半身が麗しい人の姿で、下半身は大きな魚の尾を持ち合わせていたはず。

「人魚です」

…三度いいはなちやがった。

そこまで主張してくるということは本当に…いや、まぁいい。
人魚だろうが半魚人だろうがそういう類の種ならばコレはもう私の関心外の存在でしかない。

「とにもかくにも親切なお方、此度は助けていただき―…」

「あー、はいはい」

一気に気分が急降下だ。
途端面倒くさくなった私はお礼を言い連ね、そしてその身におこった事の顛末をせつせつと語り始めた自称人魚の話を話半分で聞いていた。

曰く、嵐によって荒れた突発的な海流に巻き込まれ気づけば川を上ってしまっていた。
曰く、自称人魚はまだ幼体のため真水では力がそがれてしまった。

「あぁそうそれはそれは実に災難だ」

棒読みで返せば自称人魚は

「そうなのです！あなたに拾っていただかなければ私の命は今頃尽きてしまっていたことでしょう」

感無量といわんばかりに（表情筋が発達していないようでよくわからないが）涙を流し始める始末。

…あーそこの自称人魚。泣くのは構わないがその涙の代わりに落ちてくる多量の結晶、あとで誰が片付けると思ってるんだ？

これ以上コレに時間を割かれるのはごめんだ。

…かといって見捨てるわけにもいかない、コレは自称とはいえ”人魚”なのだから。

ならばさっさと海へ返してしまおう。うん、面倒くさいがそれがいい。

「まぁ元気になったようだし海まで連れて行けば―・・ん？」

いまだに涙を流し感謝の言葉を並び立てる自称人魚の腹部に目がとまる、と考えるよりも先に体が動いてしまった。

「―…っ」

「わわっ！？大丈夫ですか！？」

その腹部に触れた指先からじわりと血が滲む。

「そこ…剥がれていないか？」

「え？え？」

日が昇り更に明るくなったきた室内でよくよく見ればその腹の一部の色が変わっている―・どうやら鱗がはがれてしまっているらし

い。
そしてその周囲の剥がれかけている鱗で手を切ってしまったようだ…意外に硬くて鋭いんだな。
だが自称人魚は自分の腹部の怪我よりも私の指先を見てあたふたとしている。

「血！！血が出てますよ恩人さん！！」

「このぐらいなら大丈夫だ。指先だから余計に出血して見えるだけ―・・それよりもソレのほうが痛くないのか？」

一部だけ色が変わってしまっているためハゲているようにもみえるそこは滑稽にも見えるが、なんとも痛々しい。

「こんなの力がなくてちょっと肌があれてるぐらいのことなのでご心配には及びません！！ほら！！はがしたって平気です！！」

はがれかかっている鱗をぶちっと抜いて見せた自称人魚は落ち着きなく騒ぎ立てる。

「そーれーよーりーもー！！」

「五月蝿い」

頭を押さえつけ無理矢理その口を閉じさせると私はすぐ傍の棚から薬草瓶を二本取り出す。
一本は自分の指につける止血用―・・もう一本はこの自称人魚用。

いくら平気だとはいえ、新しく広がったハゲてしまった肌は薄皮だけが残り非常に痛んでいる。

耐水性のその塗り薬をその腹に塗りこんだ。

「ぎゅっ！？」

「染みるだろうけど我慢しなさい。人魚の生態なんて詳しく知らないけどこれは良くない」

塗り終わると別の桶にその体を移して塩水をたしてやる。

「あっ…ありがとうございます！一度ならず二度までも！私、言葉に尽くせぬ感謝で胸がいっぱいです」

「礼はいい…但し、治療の対価はもらうよ？」

「はい！それはもちろん！！私にさし上げれるものでしたらなんでも仰ってください！！」

「あの剥がれた鱗、あれを頂戴」

「えっ…？あっはい、どうぞ」

そんなものでいいのか？と顔に書いてある自称人魚は曖昧に頷いた。

「じゃ、いくわよ」

交渉成立。後は動くだけー・・と桶に布をかぶせ家を出る。

村人に会わないよう黙々と山を降り村のはずれを歩き海岸へと一直線に進む。

いまだかつてないほどの競歩で海までたどり着いた私はそのまま手にした桶をひっくり返した。

被せていた布と共に水音を立てて海面に吸い込まれる塩水と自称人魚。

「あぁ！海だ！！」

本物の海水に触れたことで自称人魚は一段と元気を取り戻したようだ。

「ここまでくれば後は自分で帰れるでしょう？」

「はっはい！！」

「そう、じゃこれで」

「あっあの！！」

そそくさときびすを返そうとする私を自称人魚が呼び止めた。

「何？」

「何から何までありがとうございます！！このお礼はいつか必ず！！」

「……治療代はもらったから、別にいい。面倒くさいし」

そこからは振り返ることもなく来たときと同じ速度で私は家路につく。

私が豆粒ほどの大きさになってもその後姿を自称人魚が海の中か

ら寂しげに見ていたことなんて露知らずに。

帰宅

ふふふ、と思わず緩む口元を押さえられない。
顔が自然とにやけてしまう―・・だがいた仕方ないことだろうと思う。
王都(カマンサ・レール)からの帰りの馬車の中、私はいつにもない上機嫌で2ヶ月ぶりの我が家への帰路についていた。

あの人魚（後で詳しく調べてみたら確かに人魚の幼体はあの姿だった）を海に返してから2ヵ月半が経過していた。
人魚だといわれたときには心底面倒くさいものを拾ってしまったと一瞬後悔したものだが、いまとなっては思わぬ幸運に巡り合えたといってもいいだろうか。
あの鱗―・・ふふふと再び笑みがこぼれる。

この世界には海には人魚や半魚人、陸には竜(ドラゴン)や天馬といった人間とも動物とも違う”幻想種(レジンヴァアラ)”と呼ばれる生き物が存在する。
それらは神が創られた”神の御使い”と呼ばれるものもあれば、人に害をなす”魔物”といったものも一括りにした総称だ。
そしてその幻想種(彼ら)のなかでも特に種としての総大数が少ないものに関しては大陸連合議会(ギアマリージュ)で決められた希少幻想種特別保護法というものが適応されていることになっている。
幻想種(レジンヴァアラ)は総じて不可思議な力をもつ種が多く、その彼等の体や体の一部は人間の使用する魔具や高価な薬の材料として重宝されているものがあった。
―・・結果、そういったものを目的とした者が後を絶たず彼らは乱獲され数を減らされつつあった。
そして当然のごとく人間(わたしたち)と幻想種(かれら)の間で戦争が起こりそれは５０年ほど続いた、やがて一部の良識ある人間と幻想種(レジンヴァアラ)の間で協定が結ば

れ戦争(それ)が終結したのがいまから２００年ほど前のこと。
だがそれでも密猟者はあとを絶たない―・・それを取り締まるために創られたのが希少幻想種特別保護法なのだ。

現在そういった”もの”が全く市場に出回らない、といえばそうでもない―・・”表側”でも”裏側”でも。
しかしやはりその数は極端に少ない上に、たとえ運良くお目当てのものに巡り合えたとしてもその額は半端ない。
そしてあの自称人魚が剥がした鱗―・・それは私が過去、材料を手に入れることができなかったために作成を諦めた薬剤をつくるのに必要不可欠なもの。

目の前に長年探していた物があったら何としても手にいれたいと思うのは人として当然の性だろう。

”獲る”ことは禁じられていても”拾ったり”、”譲り受ける”のは法の適用外だ。
・・・・・・手当てなどしなくても海へ返した後にそのままこっそりもらってしまえばよかったのかもしれない、がそれでは何となく後味が悪い。
治療をする代わりに鱗という報酬をもらったのだと思えば、後ろめたさもない。正当な取引で手に入れたものだ、誰にも文句は言わせない。
なんという僥倖(ぎょうこう)！！棚からぼた餅とはこのことを言うのだろう。

それだけではない、あの人魚はさらに”置き土産”を残して行ってくれたのだ。
あの涙の代わりに多量に流された結晶だが―・・人魚を放流して帰宅した後、よくよく観察してみればそれはかなり上質な”真珠”であることがわかった。

この国でも装飾用として貴族の女性たちを中心に大変価値のあるものだが―・・幸い私はそういったものに全くといっていいほど関心はなかったので快く売り払わせてもらうことにした。

しかしこんな片田舎の村では換金するにも無理な話なので、私は早速荷物をまとめて馬車を乗り継ぎ2週間ほどかけて王都(カマンサ・レール)へと足を運んだのだ。

かき集めた真珠は小袋2袋分―・・怪しまれては後が厄介なので何箇所か場所を変えて売り払えばそれは10年は遊んで暮らせるほどの金貨へと変わった。

折角王都(カマンサ・レール)まで出てきたのだ、早速その金で新しい研究書や機材などを端から買いそろえる―・・久しぶりに充実しすぎた買い物だった、少々買いすぎてしまった感があるがまぁたまにはいいだろう。自分でもって帰ることは物理的に不可能な量だったのでまとめて家へと送らせる。

その後は久しぶりに再開した友人と話が弾み、そのまま一ヶ月ほど王都(カマンサ・レール)に滞在し、漸く私は帰路へとついたのだ。

半分も使い切っていない金貨のおかげで暫くは研究費用にも頭を悩ませる必要もないだろう―・・いっそのこともう1棟研究室を増やしてみるのもありだろうか。

とにかく今は一刻も早く帰宅して大量に買い付けた研究書を読み漁りたい。

わくわくとした気持ちでそんなことを考えていればいつの間にか馬車は村へと着いていたようだ。

時刻は昼前―・・村の真ん中に馬車の停泊所があるため必然的に馬車から降りれば村人に出くわしてしまうのだが、今はそんなことす

ら気にならないぐらいにとても気分がいい。

「あら、セリレイネウスさん」

降りた私を目ざとく見つけ、声をかけてきたのはこのコーディル村の村長の奥方だった。

他のご婦人たちに比べれば幾分か話しやすいのが幸いだろうか。

「最近見ないと思ったら、旅行でも？」

「えぇ、カマンサ・レールまで少し」

気分がいいから自然と笑みまでこぼれてくる。

「まぁまぁ、あんな遠いところに？大変だったでしょう」

「そうですね、馬車に揺られすぎて少し腰が痛いです」

「あら！セリレイネウスさんじゃないの！！」

小さな村だ、奥方と話をしていれば次々にご婦人たちが家事の手を止めて集まって来た。

あまり村へと降りてこない私が珍しいのか見つかればあっという間に囲まれてしまうのはいつものことだ。

「王都までいっていたんですって？」

「あらすごい」

「あっちはどうだったの？混んでなかった？」

「セリレイネウスさん！お久しぶりねぇ！」

しまった、いつもならもっと上手く逃げるのだが油断していたためか突破口が見出せないほど囲まれてしまっている。

ー・・だがしかし、こういうときの切り抜け方はすでに研究済みだ。

「皆さん」

私は馬車から降ろした手荷物の中で行きよりも増えたものの一つー・・大きめのトランクをその場で開けた。

「これ、お土産です。気に入っていただければ嬉しいのですが・・・」

「まぁ！」「すごい！！」「いいの！？」

トランクの中に詰められているのは、王都（カマンサ・レール）で流行の女性ものの髪飾りやブローチー・・勿論村のご婦人たちの大体の嗜好を考慮したうえで人数分取り揃えてある。

小さな村ゆえにそれぐらいのことはたやすいものだ。男衆や子供たちにも忘れず酒や甘い菓子などもとりそろえているのもぬかりない。

ざわめく中で婦人たちの代表格でもある奥方にトランクを渡せば彼女は困ったように笑った。

「本当にセリレイネウスさんはまめな方ねぇ、無理しなくてもいいのよ？旅行に行くたびにこんなに・・・私たちは土産話だけでも充分なのよ？」

「いえ、お気になさらないでください」

むしろそれこそ勘弁してほしいものだ。

「皆さんには日頃からよくしていただいてますから、お礼も兼ねてなんですよ」

よくしてもらっているのは本当だ。

村のはずれに住み着いてかれこれ6年・・・あまり接触を持たないよそ者の私を煙たがることもなく彼らは村の一員として受け入れてくれている。

たまに玄関先に野菜などがおいてあるときなど本当にありがたい。

普段コミュニケーションが取れない分こういったときにその分の補填をしておけば彼らも変わらず私を受け入れてくれる。

「そう―・・じゃあありがたくいただくわね」

「はい」

それでは、とご婦人たちが王都のみやげ物（カマンサ・レール）に目を取られているうちにその場を後にしようとする。

―・・と、再び奥方に呼び止められた。

「そうだわセリレイネウスさん、ここ最近貴女の家の周りを怪しげな男がうろついてるんですって」

「男？」

「えぇ、ここ一ヶ月ぐらいのことかしらね。真っ黒なマントを頭からすっぽりかぶっててね。怪しいから旦那が声をかけたりもしたみ

たいなんだけど何も言わずに立ち去るんですって。それでも何度か貴女の家を訪れているみたい」

あきらかによそ者だったわ、と奥方は嘆息する。

「もしかしたら今日も来てるかも知れないわ。もしあれなら男衆に声をかけて戻ったほうが―・・いいえそれよりもうちでしばらく泊まっていったほうがよくないかしら？」

少し逡巡して―・・私は首を横にふった。

「いいえ、大丈夫です。知り合いかもしれません、カマンサ・レールにいる友人が古い知人が近々私の元を訪れる予定だといっていたので」

「あら、そうなの？」

「えぇ、いつも黒いマントを着ていた男でしたので多分そいつでしょう。ご迷惑をおかけしまして」

「いいのよ、それなら。よかったわ、不審者じゃなくて」

「えぇ、本当に。それでは」

「えぇ、ゆっくり休んで頂戴。またゆっくりお話しましょうね」

会釈をして私はその場を後にする。

進むは我が家へと続く道。

・・・さて、どうしたものか。

帰宅（後書き）

やっと主人公の名前が出てきましたー。

訪問者（前書き）

少し短いですが。

訪問者

村から自宅までの道は途中まで整備された一本道で繋がっており、そこから先は山肌のむき出しの山道へと変わっていく。
だが私はいつものその道を行かずに山道へと入る手前で、あえて草木生い茂る獣道へと踏み入った。
ただでさえ荷物が増えた中で歩きにくいことこの上ないが仕方がない。
自宅に近づくにつれ極力物音をたてないようにと進めば自然と歩みが遅くなり、結果いつもの倍の時間をかけて自宅目前までたどり着く。

（あー、いるな）

悪い予感ほど的中するというものだ。
木陰から自宅の周囲をうかがえば家の前に佇む黒い影が見えるー・・奥方がいっていた黒ずくめのマントの男だ。
長躯を頭の先から足の先まですっぽりと覆う黒いマント、今時の魔法師でさえそんな格好はしない。
さも”怪しい”といわんばかり…いっておくがあんな知り合いは私の周りにはいない。
当然、奥方に話したことは嘘だ。下手に不安を煽らせるのも得策とはいいがたい。

周囲に目をやり暫くその男を観察してみるがー・・どうやら他に仲間はいないようだ。
留守宅に侵入しようという素振りも見せないのを見ると物取りやらの輩ではないことは確かだ。

ではなにが目的か。

素早く動けるようにと荷物を全てその場に置く。

殺される可能性は低いだろう―・・もし私の命を狙ってのことならあんな目立つ真似はしない。私ならもっとこっそりと、それこそ家の中で潜み待つ。

だが害されないとは限らない、念のためにと小太刀を裾の中に忍ばせると私は木影から出た。

「そこの方、我が家に何か？」

そろりと近づき後ろから声をかければ男が振り返った。

物陰から観察していたときから長身だとは思ってはいたが近づいてみると更に背が高く見える。

私も女の中では背が高いほうではあるがそれでも目の前の男を見上げる形となってしまっている。

…しかしこれでもかというぐらいにすっぽりマンドと被っているためか、近づいても見えるのは口元だけだったが。

「―・・」

その口元が動き何かを喋った―・・が、あまりにも微かな動きすぎたため何を言っているのかが聞こえない。

「何か用かと聞いているのだが？」

「……」

男は応えない。応えないかわりに一歩こちらへと近づいてきた。

「おい」

私も距離をとるように一歩後ずさる。

危険か、と隠してあった小太刀をそっととりだすー・・そこで距離が更に縮まったことによって男の声が聞こえてきた。

「…た」

「ん？ー・・っ」

それに気をとられてか少し反応が遅れてしまった。

予想以上に機敏な動きで近づいてきた男に両肩をがっしりと掴まれてしまったのだー・・

（しまっー・・）

「やっと会えた」

「は？…って！」

万事休すかと思われた矢先、そう呟いた男の体が大きく揺らめいた。

明らかにその軌道はこちら側へー・・このままいけば下敷きになるのは目に見えていたので私は肩を握る手が緩んだその隙にさっと横にずれた。

結果、男は顔面から地面と接触。鈍い音と土煙があがる。

「おい」

その頭を足先でつついてみるが返事はない。気絶してしまっているようだ。
私は思わず天を仰ぐ。
勘弁してくれ、と大声で叫びだしたい気分だった。

＊

置きっ放しにしていた荷物を家の中に運びいれ家の中の空気の入れ替えをする。
それから外に倒れたままの男をどうしようかと考えあぐねー・・・
「全く、私の気分が良かったことに感謝するんだな」
男をひきずり家の中へと運び入れ、そのまま半分物置と化していた客間の寝台へと放り込む。
拾いグセはなかったつもりなんだがな、と思いつつも用心のために男の衣服を探る。
まずはこの邪魔なマントからだと砂埃にまみれた黒のマントを剥ぎ取ってしまうと、
「……」
怪しげなマントの下から出てきた色彩と容姿に私は一瞬目を奪われた。

程よく引き締まった体躯は近隣国では見たことがない白一色の裾の長い服に包まれている。
その白に映えるように流れる髪は青銀で、都の貴族の女たちよりも長く足元まであるのではないだろうか。

そして何よりも目をひいたのはその顔立ち。
整っているというにも程があるー・・左右対称すぎるのだ。
世に言う美男美女というやつはその顔の造形もさながらその左右の対称性も高いといわれている、が、やはりどこかがズレているもだ。
この世に完璧な左右対称な顔をもつ人間など、生まれた直後の赤子ぐらいなものだろう。

しかしこの男の顔は異常なまでに左右対称だ、ここに詩人がいたならば”神のつくりたもうし造形美”とでもいい放つではないのだろうか。
きっとこの容姿は老若男女を虜にするー・・だが私は”見惚れる”よりも不自然なまでの美しさに違和感を覚えた。

（この男、一体何者だ？）

…全く、あぁ全くもって嫌な予感しかしない。
厄介なものを拾ってしまったものだ。

訪問者（後書き）

謎男の服のイメージとしては漢服の深衣っぽいので、主人公たちの服は中世ヨーロッパ的な感じですかね。

人間の顔は脳の成長と共に左右非対称になるらしいですよ。

人魚姫

荷を解き終わると早速持ち帰っていた新しい本を開け一気に読み進める。

字を追い始めるとそればかりに集中しすぎて周囲に気を配らなくなるのが私の悪い癖だー・・何冊目かの本を読み終えたときふとあたりが薄暗くなっていることに気づいた。

窓の外を見れば日がすでに沈みかけている。

またやってしまったと灯りを求めて席を立とうとすると隣の部屋から物音がした。

…あぁそういえばすっかり忘れていた。

厄介ごとの匂いがぷんぷんする男の事を無意識のうちに頭の中から追い出していたのかもしれない。

水差しと灯りをもって隣へと入れば寝台の上で動いてー・・あぁいやこの場合はもがくと表現したほうが正しいのかー・・いた男が気配に気付いたのかこちらを見ている。

「起きたか、気分は？」

「……」

その口はぱくぱくと動いてはいるがやはり声がでていない。

ふむ、と私は手に持っていた水差しを男の目の前に差し出した。

「飲むか？」

すると男の顔が勢いよく縦に振られた。
頭の下に手をいれ少し浮かしそっとその口元に水差しを近づければ、乾いた土のように水をぐいぐいと呑みほしていった。
あっという間に水差しの中は空っぽだ。

「あり…がとう、ございます」

かすれてはいるが男の口からは声が出るようになった。
これでやっとまともな会話が出来そうだ。

「あの…」

水を得て落ち着いた男はおずおずと目を泳がせた。

「何だ？」

「何故…私は縛られているのでしょうか？」

寝台に横たわる男の体は両手両足共に寝台へとしっかり括り付けられている。
決してそういう趣味だとかいうわけではなく私の安全性を考慮した結果故、のことだと理解いただきたい。

「怪しいからだ」

「怪しい…ですか？」

緊張感もなくきょとんと首を傾げる男に私は弱冠の虚脱を覚える。
自覚がなかったのか…

「自宅の前で黒ずくめの男がウロウロしてたら怪しいに決まっているだろう」

「そうなのですか！？…それは申し訳ございません」

何故そこで驚く。それでもって何故落ち込む。

大の男が体を縛られたまましゅんとなる姿はどうにも様にならない。

と、いけない。これでは全く話が進まないではないか。

「とにかく…名前、何処から来たのか、何が目的かを応えれば解いてやる」

すると項垂れていた男は満面の笑顔で顔を上げると元気な声でこうのたまいやがったのだ。

「はい！私は”人魚姫”、あなたにどうしてもお礼がしたくて海からやってまいりました！！」

「…ふざけているのか？」

その頭を寝台に張り倒さなかった私を誰か褒めて欲しいものだ。

「そんな！滅相もない！！」

「なら本当のことを」

「本当です！！お忘れですか？――・・あぁこの姿では無理もないの

かもしれませんが…私はあなたに命を救っていただいたあの”人魚”なのです！！」

力説する男に頭痛がしてきた。

王都（カマンサ・レール）へ行ったとき人魚のことはしっかり調べつくしてきた。

幼体の姿形もしっかり図鑑で確認してきたし、ついでに成体も確認済みだ。

確かに上半身は見目麗しい人間の姿をしているとあった、しかし下半身はしっかり魚の尾がついているはずだ。

「私の目にはお前の足は”尾”には見えないんだが？」

「はい、”海の魔女”に人間になる薬をいただきました！」

「そんな阿呆な話があるか」

意気揚々と応える男に私は冷静に突っ込む。

人魚を人間に変える薬？

成長の過程ではない生物の他生物への変体を促す薬など聞いたこともない。

それが本当なら一度じっくり調べー・・いやいやまた話が脱線してしまった。

「そんなぁ！信じてくださいよぉ！恩人さん！！」

男の悲痛な声が部屋に響く…って

（”恩人さん”？）

何やら聞いたことのあるフレーズだ。

「……私が怪我をしたのはどこの指だ？」

「左手の中指です。あぁ！！そうだ傷は！？大丈夫ですか！？直りましたか！？」

「治療の対価でもらったのは？」

「え？うっ鱗ですか？」

「枚数」

「あっ…えっと5枚？いえ6枚です」

「なぁ半魚人」

「人魚です！！」

むむむ、と私は考えこむ。

寝台横に置かれた灯りによって照らされるその顔ー・・その瞳はアクアマリンの色彩。

「…まぁ仮にお前があの時の人魚だとして」

「えぇっ！？まだ信じていただけないんですか！？」

男の嘆く声はさらりと無視し

「お前の何処をどうみたら”姫”になる？」

と、続ければ男は「何だぁ」と嬉々としてこう語った。

「はい、実は私、幼体の時は未分化で”姫”として育てられていたのですが」

「ふむ」

「貴女に恩返しをしたいと思う内にこう、気持ちが昂ぶってきまして」

「ほぅ」

「ちょうど成体になる時期だったので男性体に分化したんです」

「…で？」

「恩返しついでに貴女のお嫁ー・・いえお婿さんにしてください！！」

「そう」

顔を赤らめ真摯な目で訴えかけてくる人魚”姫”。

私は空になった水差しを手に取り立ち上がると笑顔を浮かべて彼にこういってあげた。

「帰れ、この魚類」

そのまま部屋を出、扉の鍵を外から閉めると私は再び読書へと身を投じた。

その後一晩客間からはすすり泣き声が聞こえたとか聞こえなかったとか。

人魚姫（後書き）

やっと絡まったー！
でもまとまんないですＯＴＬ

世間体（前書き）

人魚とはじまる同棲生活一日目。

あのまま放置すること一晩とちょっと。
翌朝目覚めれば客間からは尚も聞こえるすすり泣き声ー・・本当に微かに聞こえてくるものだから不気味加減に拍車がかかる。
このまま放置し続けてしまうのも色々と宜しくないので、私は実力行使に出ることにした。
扉を開け（私が部屋に入った瞬間泣き止み顔を明るくした奴は完璧無視だ）素早く人魚の縄を解く。

「あぁ恩人さんっ漸くー・・」

なにやら嬉々として呟くそれの襟首を掴みそのまま引きずっていく。
人魚は文句もいいもせずただにこにことされるがままについてきたー・・どうやら私に構ってもらえているのが嬉しいらしい。
が、玄関を開け

「さっさと海に帰れ」

外へぺいっと放り出されと途端その顔は悲嘆に染まった。

「そんなぁっ」

「恩返しも何もいらない。しいていうならお前が帰ってくれるのが私にとっての恩返しだ」

冷たく言い放ち、じゃあなと家の中へ戻ろうとすればー・・がっち

りと人魚が足にしがみついてきた。

「放せ！」

「お願いです！見捨てないでください！！」

「人聞きの悪いことを言うなっ！！」

無事な片足でその頭を踏み閉める。
水分を消耗して体力が弱まっているはずなのに中々離れないー・・
人魚じゃなくて蛸じゃないのかっ！？

この上なく面倒くさいー・・いっそのこと薬で眠らせて強制的に海に還してしまおうか、と考え始めたときだ。

「あら、まぁ」

・・・

「ー・・私にはもう貴女しかいないんですっ！！」

・・・足元の空気の読めない阿呆の存在を忘れていた。

「お前はもう喋るな！！」

「ぎゃっ」

渾身の一撃を食らわせ何とかその束縛から脱出する。

「あらあら」

「ちょっ奥方、違うんですこれは」

「あらいいのよ若いうちは色々あるものよね、はいコレ村の皆から昨日のお礼にって」

問答無用、聞く耳持たずでカゴを渡された。

にこにことまぶしいほどの奥方の笑顔が痛い。

「疲れてるとつい苛々しちゃうのよね、わかるわよ。でもねあまり冷たくしちゃ駄目よ？セリレイネウスさん」

「だから奥方！！」

そのままふふふふと、笑いながらすすすっと去っていく奥方。

・・・所在無さげに宙に浮いたままの私のこの右手はどうしたらいいのだろう。

「恩人さん？」

ただでさえ小さい村だ、噂なんてものはあっという間に広まってしまう。

「恩人さ～ん？」

あの様子から察するにー・・奥方の脳内でほどよくいい感じに捏造された”噂”はきっと昼をまわる頃には村中が知ることとなっていることだろう。

「もしも～し」

何てことだ。もしこのまま人魚（コレ）を無理矢理海にでも帰そうものなら間違いなく私に貼られるレッテルは男を捨てた”悪女”ー・・もしくは”遊び女”

「あぁ、いい匂」

「暑苦しいっ」

「ぐっ！？」

いつの間にか復活して背後から勝手に抱きついていた人魚の鳩尾に肘鉄をくらわせる。

元々人付き合いは苦手だ。悪い噂が広まったのなら引っ越してしまえばいいー・・のだが、生憎と私は今のこの生活と環境がとても気に入っている。

人魚を海に帰して不名誉な噂にまみれ住み心地が悪くなる前に引っ越してしまいたい！！・・・そういしたいのは山々だが、中々ないこの高物件！！みすみす手放すには惜しいっ

つまりー・・私はほとぼりが覚めるまでこの人魚を家に置いておかなければいけないということ。

「最悪だ！！」

そう空に向かって声高に叫ぶ。
久々に腹の底から声を出したきがする、がすっきりするはずもない。

（厄日か・・・）

腹を押さえ悶絶する人魚は無視して私は家の中へ戻ったー・・とにかくどこにもぶつけようがないこの苛立ちをどうにかしたかった。

名前（前書き）

早くも同居３日目。

名前

とても、とっても、とーーーーーーーーーーーーっても不本意ではあるが、人魚との同居生活がはじまったわけだが・・・

考えてみれば、相手は大まかに分類してしまえば所詮魚類（王都の友人（あいつ）が聞いたら絶対に否定されるだろうな）、ペットを飼う（ん、何か違うな）ー・・もといあずかったとでも思えばいい。

うん、それはいい考えだ。

（・・・しかし）

ぷすりと皿の上に盛り付けられたサラダにフォークを突き刺すともしゃもしゃとそれを咀嚼する。

上にかけられたお手製ドレッシングの甘辛い風味が絶妙だ。

最初は人間の暮らしなどコレに出来るものかと危惧したものだったが中々にこの人魚ー・・使える。

ただで置いてやるわけには行かないと一通りの家事をやらせてみたのが一昨日のことだ。

最初のうちこそ手間取りはしたが、あっという間にそれらをものにしてみせた。

当人曰く、この二ヶ月みっちりと人間の生活を予習してきたそうだ

が・・・なるほど、人魚は知的能力が高い生き物らしい。
それに加えて身体能力も（見た目を裏切ることなく）非常に高いと評価していいものだろうー・・昨日、配送を頼んでいた荷物（宝の山）一式が届いたわけだがその時も人魚は荷物運びという点で、とても役に立ってくれた。相当に重い機材もあったのだー・・きっと私一人では片付けに一週間は要したことだろう。

そして何よりもー・・

「はい、パンが焼けましたよ」

「・・・・・・・・・・・・おいしい」

飯がうまい。
出来立てほっかほかのパンなど一人暮らしをはじめてこの方、片手で数えるほどしかつくった記憶がない。
パンは作るのではなく買ってくることが多いのだが食べ忘れていたりすることが多いためか基本はカチカチが当たり前・・・野菜中心の食卓に炭水化物がまともな形をとって並ぶことなど年に何度あることか。
ここ一ヶ月ほどは王都（カマンサ・レール）でまともな食事を楽しんでいたものだが、人魚が作る飯はそれに引けをとらないほどのおいしさがある。

「本当ですか？恩人さんのお口にあうみたいで良かったです」

照れた様子でそのまま昼食の下ごしらえをはじめる人魚ー・・まな板の上には一匹の生魚。
それを慣れた手さばきで3枚に下ろしていく姿というのはなんとも

シュールだ。

炊事洗濯掃除・・・不得意ではない（筈だ）が好きか嫌いかと問われれば間違いなく後者。

しかしそれら一切を完璧に人魚がやってくれることによって確実に私には”研究に没頭できる”時間というものが増えていっているわけで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・正直同居(これ)もありなんじゃないか、と

（いやいやいやいやいやいやいや、まて私）

危ない危ない、たった二日だというのにどこまで感化されているんだ私は。

確かに人魚(これ)がいれば私の生活は今までよりも更に研究中心の非常に充実したものになるだろうー・・だが考えてみろ、この先ずっとこの人魚を置いておけばどうなることか。

（絶対に厄介ごとに巻き込まれるに決まっている）

”幻想種(レジンヴァラ)”の中でも”人魚”は特に大陸連合議会(ギアマリージュ)の定めた希少幻想種特別保護法の上位に位置する。

大陸連合議会(ギアマリージュ)は各種のその数さえ管理・把握していると聞くー・・つまりあまり人魚(これ)がここに居座り続ければそう遠くない未来に大陸(ギア)連合議会(マリージュ)の手のものがここを訪れる可能性が高いということだ。

（面倒くさい、絶対絶対面倒くさい！！）

「恩人さん？どうかしましたか？」

突如ぶんぶんと頭を振った私に人魚がいぶかしげに尋ねてきたが「

なんでもない」と返す。

・・・・しかしまぁあれだ、確かに”面倒くさいこと”が起こりうる可能性が高い原因の人魚（かれ）ではあるが仮にも同居人。その上、客観的に観れば今の私は”世話をする”ほうではなく”世話をされる”立場になっているのは間違いないのだ。

つまりー・・うまい飯を作ってくれる人間（？）に礼節をわきまえないほど私は愚かではない。

「なぁ人魚」

「はい、恩人さん」

「その”恩人さん”だが、私にはセリレイネウスという名がある。今後はそう呼ぶように」

途端、包丁を握る手を止めた人魚（かれ）はこちらを振り返ると嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

「本当ですか！？」

「そこまで喜ぶことか？いつまでも”恩人さん”では呼ばれるこちらも困る」

「はい、わかりました。ではセリさん！！」

「・・・・・・・・・・・いきなり略してきたな」

軽く脱力して突っ込めば人魚（かれ）はしゅんとうなだれる。

「だっ駄目でしたか？人間は親愛の意味を込めて愛称で呼び合うと聞いたことがあるのですが・・・」

「・・・いや、いいよ」

感情表現の激しい人魚だ。
うなだれていたと思えばすぐにその顔を嬉しそうに綻ばせる。

「あのセリさん！」

「なに？」

「できれば私のことも”人魚”ではなく・・・」

「あぁ」

そういえば、そうだ。
私も人魚も互いの名前を名乗ることなく二日過ごしてきた。
当然人魚（かれ）にも名があるのだろ・・・

「”姫”と呼んでくだ」

「却下」

「えぇ！？」

「お前の何処をどう見たら”姫”に見える！！」

目の前の”人魚”は人間の美意識の最長点に達するほど美しいー・・・

だがそれは女性的ではなく、”美丈夫”という言葉がぴったりと当てはまる種類で、だ。
うっかりそとで目の前のこの男を”姫”とでも呼んでみればそっち系の人か、そういうプレイなのかと思われてもしょうがないじゃないか―・・そんなのは御免だ。

「うぅっ・・そんなことといわれましても生まれてずっと”姫”と呼ばれてましたし、元々成体したら女体になる予定でしたので」

・・・

ちなみに”ディオン”は子供の頃に買っていた犬の名前だ。
他にも思いついたものはあったが・・・・どれもこれも薬品や薬草の名前をもじったものばかりしか浮かんでこなかった。

「嫌なら別のものにするぞ？サンディー（草）とかロォディールーン（毒薬）とか・・・・」

「いえ最初のっ・・・・”ディオン”が！！ディオンがいいです！！」

こちらに身を乗り出した人魚ー・・ディオンはきらきらと瞳を輝かせて新しい名前をその身の内に浸透させるように何度も呟いた。
その様は”魚類”というよりはどことなく大型犬を思わせる・・・・
犬のディオンは小型犬だったが。

しかし他人につけられた名前一つでここまで喜べるものか・・・・

「おかしな奴・・・・ー・・・わっ！？」

「セリさん！！」

思考を飛ばしていたため回避するのが一瞬遅れたー・・ガバリと抱きつかれる。

「放せっ暑苦しい！！」

必死でその拘束を解こうともがいてみるがびくともしない。畜生。

「セリさんに一生ついていきます！！」

「結構だ！！」

訳がわからないほど感無量といった様で抱きついてくるディオンと格闘すること半刻ー・・漸く脱出することに成功した私は尚も縋り付いてこようとする奴を実力行使で止めるとその夜まで部屋にこもることにした。

扉の向こう側では「すいませんもうしませんからー！！」とか涙声で訴えかけてくる声が何度も響いたがそれすらも無視して本へと意識を向ける。

そんなこんなしていたためだろうか・・・”姫と呼ばれていたってことはそれなりの地位もしくは王族だったのではないか？”とか、新たな厄介ごとを秘めた可能性を含む疑問に考え付くまでにそこから二日ほど要した。

・・・・・・・・・・・・そして、人魚に”名前を与える”行為について思い知らされることになるのはそれから更に一週間ほど経過してからのことだった。

買い物

同居人の服装が全く変わっていないことに気付いたのは四日目の朝のことだった。

＊

「買い物に行く」

早、四日目にして恒例となってしまった朝の光景。
台所に立つディオンの後姿なんてすっかり板についていてー・・・あぁ日に日に”慣れ”ていっているな。
人間とは実に不思議な生き物だ。

・・・おっと、話がそれてしまった。

そう、買い物に行くと宣言したのだった。
今朝台所に立つ同居人の後姿を見てふと、私は気付いたー・・・４日前と服が変わっていないということに。
幸い夏季は過ぎ、今は涼しい秋季の半ば。
汗をかくこともないからこの季節は軽く体を拭くぐらいで、王族や大貴族ではないのだから風呂は１週間に一度でも焚けば充分だ。

だがそれでも（最低でも）二日に一度は服を変える。

彼が匂うわけではないが（さっき少し嗅いでみたけどまだ大丈夫だ

った・・・異様にじゃれついてきたので鳩尾に一発くれてやったが）
ようは気分の問題だ。
男物の着替えなど我が家にはないし、彼の持ち物といえばあの怪しげなマントと今来ている白い異国風の服のみだー・・いずれは必要になる、買っておくに越したことはないだろう。

そうとなれば即行動。さっさとすませて研究書の続きを読み漁ろう。

「というわけだから私がいない間誰かが尋ねてきても扉をー・・何をしている？」

いそいそと片づけをはじめる彼に首を傾げれば、

「え？だって買い物にいくんでしょう？」

と嬉々とした返事がかえってきた。

「・・・・・・。私一人でな」

「そうセリさん一人で・・・・・・・・・・・・・・・・・・ってえええええ！？私は！？」

「留守番」

「そんなぁっ！」

「阿呆、お前みたいに無駄に目立つ奴連れて歩けるか」

食材だけなら村でまかなえるが服となれば山二つ越えたところにある港町まで行かなければいけない。

必然、人の数も多くなるー・・そんな中これをつれて歩くなど見世物もいいところだ。

「でもっでもセリさん！！セリさん一人じゃ危ないですし」

「私がそこいらの山賊やチンピラに負けるとでも？」

私の言葉にディオンの手が自然に自分の鳩尾へと当てられた。

「うっ・・・いや万が一ってこともありますよ！それに荷物だって」

「馬を借りていくから大丈夫だ」

「うぅっ」

言い返す言葉が見つからないのか項垂れるディオン。

「折角セリさんと初でーとだと思ったのに・・」とかなんとかぶつくさ聞こえるがまぁすっぱり無視の方向でいいだろう。

時間がもったいない、とさっさと一人で準備を整え村まで降りて村長の家へ馬を借りに行き（応対してくれた奥方が相変わらず含みをもった笑顔で”あれからどうなの？”と尋ねられた時には非常に困った・・・）一度家へと戻れば玄関先であのマントを羽織って仁王立ちする麗人。

「・・・・・・・・留守番だといったはずだが？」

「セリさん！セリさんは大事なことをお忘れです！！」

「何だ？」

問えば自信満々に彼は返した。

「セリさんは私の服のサイズを知りません！！」

「・・・・・・・・・・・・・」

「私の服を買いに行くなら私も同行したほうが宜」

「・・・・・・・・・・・・・・・そのマントを借りていけば大体の大きさはわかるんじゃないか？」

「あ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

暫しの沈黙。

・・・・・・・の、後にあたりに響き渡るのは絶叫にも近い咽び声。

「セリさんセリさんセリさんセリさんんんんんっっっっっお願いですから置いてかないでくださいーーーーーーー！！セリさんがいなかったら私寂しくて死んじゃいますよぉおおおおおお！！！！！！！！！」

「だぁぁ！！わめくな泣くな叫ぶなひっつくな！！こら何処触ってる！！そんなに一人になるのが嫌ならさっさと海に帰れ！！」

「嫌ですー！！お願いですからー連れて行ってくださいー！！」

「このっ」

まるでお菓子買ってもらえなくて駄々をこねる子供だ。
泣いて縋り付く・・・幼い子供がやれば（やかましいが）多少なりとも微笑ましいものだが大の男がやっても何ら効果はない。ただ鬱陶しいだけだ。

「顔が見えないようにしっかりマント被りますから！！なるべく目立たないようにしますし、お金も自分で出しますから！！」

後生です、と尚も泣きつくディオン。
私はそこでふと気になった単語に動きを止める。

「・・・・・・・・・お金もってたっけ？」

「ぐすっ・・はい、硬貨ではないですけど・・・」

とディオンが差し出したのはー・・今しがた多量に流した涙がいつの間にか結晶化しできた”真珠”

「これって人間の間ではとても高値で取引されるって聞きました。これで”お買い物”できますよね？」

・・・あたりに散らばった真珠をせっせとかき集める彼の姿に既視感を覚えた。

「セリさん・・」

うるっと彼の瞳が再び潤みだす。

ぐっと自分の喉元からうなり声に似た音が出る。

「わかった。わかったからそれ以上泣くな増やすな」

あたりを見渡せば（体の比率が違うせいだろうか）こないだの比ではないほどの真珠がごろごろと散乱している。

それら全てを拾い集めるのも大変そうだが、何よりもあまりそれらを増やされるのも困ものだ。

真珠が増える＝お金も増える、が傍から見れば＝それ目的の”密猟者”とみなされてもおかしくはない。

人魚を住まわせているという時点で今後何があるかわからないのだ、出来うる限り自分の立場が不利になるような状況だけは避けたい。

「あぁっセリさん！！」

「だから泣くなといっているだろう！！でもって離れろ！！」

今度は感動の涙を流しはじめた人魚の頭に拳骨が落とされた。

＊

「すごい！すごいですね、セリさん！」

「あまりキョロキョロするな、目立つだろう」

「はいすいませー・・あっセリさんあれ！あれなんですか！！」

「・・・・・・・・・・・・・・」

行った側から聞こうとはしない彼に怒りを通り越して呆れしか出てこない。

彼を後ろに乗せ馬を走らせ二刻、山を二つ程超えた場所に王都（カマンサ・レール）に比べれば小さいがここいら一帯ではそれなりに活気のある、クエフ領港町ヴィスオラはある。

町のはずれの馬舎に馬を預け通りを行くー・・行き交う沢山の人間が珍しいのか隣を行く同居人はさっきからずっとこんな調子だ。

離れるな、というのに辺りをせわしなく見て回るものだからふらふらといつの間にか距離が開いていたりするー・・しようがなくその手をとればとったでへらへらと笑い出すものだから苛立ちが募った。

「何がおかしい？」

「おかしいんじゃないんです、嬉しいんですよ」

だって恋人みたいじゃないですかー、とのたまいやがったのでぎりっと握る手にありったけの力とひねりを加える。

「いたたたっいたいいたいいたいいぃぃぃ！！セリさん痛いです！！」

「じゃあ、静かに歩くことだ」

「うぅっ」

やっと静かになった彼を黙々と引っ張り目的の店へとたどり着いたのはそれから5分後。

ヴィスオラの大通りに面した場所にある立派な店構えの仕立て屋だ。
最初は（人目も気にしていたので）裏通りに何件かある古着屋を巡っていたのだが、何分ディオンは無駄に体躯がいいー・・そんじょそこらの一般成人男性と比べれば頭一個半ぐらい飛びぬけているのだ。
肩幅はあうが丈がたりないものばかり・・・本人は特に気にはしていないようだったが、いかんせん家主として世間体というものがあるし、体に見合っていない服など着せてしまえばそれそれで逆に悪目立ちしてしまうものだ。
結果、フルオーダーが可能な仕立て屋へと足を運ぶこととなった。
この際だから大通りに居並ぶ仕立て屋の中でも高そうな店を選んでみるー・・港町であるヴィスオラは貿易などの要所としても重宝されているが、観光名所としてもそこそこ人気が高い。隣接するラディフォール領には王族御用達の避暑地があるし、ここら辺の海域には小島が多くそのあちらこちらに貴族たちの別荘が建っていたりもする、そのためヴィスオラは貴族や騎士たちにも頻繁に利用されることが多い。

貴族や騎士などは庶民に比べれば体格（だけ）がいいのが多いー・・そのため彼らが利用しそうな仕立て屋ならば見本用のそのぐらいのサイズのストックが何着かあるだろう。
目下、生活していく上で必要な数だけあればいいのだから大体のサイズと見栄えさえ整っていれば十分だろう。

「ようこそ、いらっしゃいませー・・」

身なりのいい、とはいいがたい客に応対した主人の顔がわずかだが曇る。
それもそうだ、全身を覆うマントの男と庶民丸出しの女ー・・私がこの店の主人でも同じような、もしくはそれ以上の不快を表すだろ

う。
露骨に嫌悪せず、曇った顔も一瞬のうちに営業スマイルに変えていたのは、さすがその道のプロというべきか。

「すまないが連れに合うサイズの服を3着ほど見繕っていただけるだろうか？もし合うものがないようならオーダーしていきたいのだが、なるべく早めに欲しいものでね」

主人の不振を取り除くために財布から金貨を数枚取り出して見せればそこは商売人、すぐに営業スマイルが2割増しになった。

「かしこまりました。お好みなどはございますでしょうか？」

「見苦しくない程度に着れるものなら何でもいいのだがー・・あぁあまり華美にならないように頼みたい」

ここで一つ魔法の言葉を主人の耳元でこっそりと囁く

「お忍び故」

「はい、承知いたしました」

よし、完璧。
きっと彼の頭の中では”避暑地に遊びに来た世間知らずのお貴族様とその従者（もしくはメイド）”という図が出来たに違いない。
こういっておけば（そこそこ上質のものはもってくるだろうが）金貨を飾りにつけているような馬鹿高いうえに目に痛い服を持ってくることはないはずだし、採寸のときに顔を見られても”顔のいい貴族”で済ませられそうだ。

「それでは採寸をいたしますのでどうぞこちらへ」
主人に促されたので隣のディオンをそっとつつけば彼は不安そうな目でこちらを見ている。
「セリさん・・」
「大丈夫だすぐそこで計られるだけだろう。いいな、何も喋るな。余計なことは絶対に、だ。服を選べとか何とか、とにかくわからないことを聞かれたり何かあったらすぐ私を呼べ、わかったか？」
「はい、セリさん」
主人と共に奥の部屋へと消えたディオンの背を見送った私はそのまま待合用の椅子へと腰掛ける。
すぐにお茶が出され、置いてあった書物を手にとりそのまま暫く時間を潰すが・・・
「・・・

か何かだろう）続く扉があった。

「主人、あまり時間がないので早くお願いしたいのだがー・・？」

ギッとドアノブをまわし押せば扉が何かにつっかえた。
ぐっと力をいれればドサリと何かが崩れる音と共に扉が開く。

「！！主人！」

部屋の中には横たわる店の主人と二人のお針子ー・・ディオンの姿はない。
首の脈を計ればしっかりと動いている、どうやら気絶しているだけのようだ。
主人の上半身を抱き上げその頬を軽く打つ。

「おいっしっかりしろ」

「うっ・・・」

「大丈夫か？どこか痛むところは？吐き気や頭痛はあるか？」

「あ・・いえ・・・大丈夫です・・・」

まだ意識がはっきりしていないのか視界が定まっていない主人ー・・・
くん、とその身体から漏れる嗅ぎ慣れた匂いに気付く。

「シュトレーゼの葉匂いがする・・・眠り香？」

「あぁ！！そうです！！そうなのですお連れ様がー・・・！！」

私の言葉にはっと気付いたように主人が叫ぶ。

「彼がどうした？」

「実は・・・採寸の際お隣で先にお越しいただいていたお客様がいたのですが、その」

・・・

「ヴィレルって・・・・・・・・・・・ヴィレル・セド・クィル・ラディフォール？ヴィレル・セド・ヴァンス・ラディフォールとかペリグド・セド・ファリウス・ラディフォールとかではなくて？」

「はい、ラディフォール公の末子のヴィレル・セド・クィル・ラディフォール様でございます」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あっあの、確かにヴィレル様は多少無茶が過ぎるところもございますがきっと話せばわかっていただけるはずですし、あの、お兄様方にお願いすればきっとあなたのご主人様も返していただけるはずで」

「ふふふふふふふ」

「！？」

突如、肩を揺らし不気味に笑い出したセリレイネウスに主人が青ざめる。

流石に相手が悪いー・・ゆえに絶望のあまりに壊れてしまったか、と危惧したのもつかの間

「帰ってきてたのかあのド変態三男坊っ！！ー・・今度こそぶっ潰す！！」

と、ラディフォールの名に臆することもなく怒りをあらわに拳を固めるセリレイネウスを、主人はただただポカンと見上げるしかできなかった。

買い物（後書き）

次回やっと新キャラ登場。
今後セリさんたちに絡んできたりこなかったり（笑

続・買い物

目を開けたら知らない場所だった。

「あれ？セリさん？」

辺りを見渡せど何処にも求める人の姿はない。
あるのは所狭しと並べられた美しい調度品や貴金属ばかりだろうか、
中には動物の剥製などもあった。

どこにいるのだろう、と立ち上がって探そうとするが体は意思とは
反して動こうとはしなかった。
いや、正しくは動けなかった。
よくよく自分の体を見下ろせば豪奢な椅子にしっかりと縛り付けら
れているー・・これでは身動きが取れないではないか。

「困ったなぁ」

町についてから迷子になるな、離れるなと散々忠告を受けていたに
も関わらず側を離れてしまった。
ましてや何かあったらすぐに呼べといわれていたのに・・・

「絶対怒られる・・・」

がくりと項垂れた。
セリさんに怒られるー・・のは実を言えばそう怖くはない。
ー・・恐いのは見放されること

呆れられて、見捨てられて、興味を持ってもらえなくなる。
それなら怒られてでも構われたい、こっちをみて欲しい。
ソレが叶わないというなら私はきっとー・・・

「おや、起きたようだね」

声に俯いていた顔を上げれば扉の前に見覚えのある人間の男が一人。
どこでみたかな、と首を傾げ思い出す。
あの服を作るところでたまたま同じ部屋に居合わせ話しかけてきた人間だ。

「いや、手荒なまねをしてすまなかった。あそこではゆっくりと話が出来ないと思ったからね、つい屋敷(うち)へ連れ帰ってきてしまった」

悪びれもせず男は笑う。

「ここは？」

「僕の持っている屋敷の一つさ、本邸に比べれば少しこじんまりとはしているが中々気に入っていてね、こちらへ戻ってくる時はいつもここを使っている。あぁ後で屋敷を案内しようか、きっと君も気に入ると思うよ」

「あなたは？」

「僕かい？僕はヴィレル・セド・クィル・ラディフォール、ヴィレルと呼んでくれ一・・おや、名前を聞いても僕のことを知らないと見える、やはり君はよそ者だね、どこからきたんだい？いやそれよりも・・・」

ぐいっとヴィレルと名乗った男の顔が近づいてきた。

「やはり美しいね、君は。特にその瞳、そこらの宝石など目じゃないぐらいだ」

「どうして私をここに連れてきたのですか？」

「ふっ、君は質問ばかりするな」

「私の愛しい人が”いついかなるときも冷静に情報をかき集め判断を下す”ことを信条にしているので」

「成る程、実に合理的な女性のようだ」

「はい、とても素敵な方です」

「いいね、僕もそういう女性は大好きだよ。僕の古くからの知人にも似たような性格の女性がいるんだけどね、中々想いに応えてもらえないでいてー・・と話がそれてしまったな」

では君の質問に答えてあげよう、とヴィレルはその両の手を広げた。

「ゆっくり話がしたいといったのも事実だけどね。見てご覧、僕のコレクションを！」

私の視線を促すように両の手を広げたまま彼はくるりくるりと回ってみせる。

「僕は美しいものが大好きなんだ！世界中を渡り歩いては美しいも

のを収集する収集家(コレクター)なのさー・・そしてそんな僕の目に見事とまったのが君だ！！」

「はぁ」

「感動が薄いぞ、君！世界中のありとあらゆる芸術品や美術品、人は勿論、詞や歴史にだって目を通してきた僕の鍛えられたこの審美眼に見事とまったんだ！もっと感動したまえよ！」

ヴィレルは部屋の中の収集品を一つ一つ手にとって見せ始める。

「これはかつてネイリーア王朝期に失われたとされる『黒貴婦人(シレーズィレィ)の涙(ディ)』の片割れ、これは彼の有名な画家オスマンノフが死の間際に描いた『簒奪者たちの黄昏』、あそこに飾ってあるのは絶滅したとされる『シンヤヤペスタ鷲』の剥製、あの壁にあるのは英雄王レマゾコーランのー・・」

熱く語り始める彼を止めるものをとめられるものは残念ながらこの部屋にはいなかった。

椅子に縛られただただ彼の話を聞かされるしかないディオンはといえば、彼の話など右から左・・・ただいつ終わっていつ帰れるのかと考えているだけだ。

だがヴィレルが走り回り部屋中の収集品(コレクション)を見せびらかす中、ふとディオンはあるものに目を奪われた。

数々の収集品(コレクション)に比べれば輝きは色あせて見えてしまうかもしれない、そんな一つの小さな肖像画。

それは収集品(コレクション)の中でも更に特別に扱われているのだ、とわかるように大事に大事に飾られていた。

まだ年端も行かない少女の肖像画ー・・髪はまっすぐ長く、雲のように白い。

決して美しいとはいえないが凛とした大人びた表情が彼女の内面の美しさを物語っている。

そして何よりもその中で一番目をひかれるのが白い肌の上、白い睫毛に縁取られた紅い瞳ー・・

ディオンの視線がそれにとまったのをみたヴィレルはとても嬉しそうに微笑んだ。

「美しいだろう？雪のように真白な髪に、薔薇のような瞳ー・・両親から受け継いだ色らしいんだけどね、彼女は自分の容姿にそぐわない色だと随分と嫌っていたよ」

ヴィレルはその肖像画の縁をそっと愛しげに撫でた。

「私の想い人だ」

よくよく見れば凛としたその中に少し垣間見える憂いたようなその表情、それは少女を儚げにも見えさせるー・・その中でも特に目立つその瞳。

幼いが、私はこの瞳を、この”女の子”を知っている。

だが私の知る人とは色彩が違った。

私の愛する彼女は、肩ほどで切りそろえた茶色の髪と、こげ茶の瞳

で・・・

「セリさん？」

「呼んだか、この大馬鹿が」

こうして扉を突き破ってくるたくましい人だったはずだ。

＊

「セリさん！！」

屋敷に乗り込んだままの勢いでドアを蹴破れば案の定そこには誘拐された同居人。

ご丁寧にも椅子にしっかりと縛り付けられていて、第一声で罵声を浴びせられたというのになんだかキラキラした瞳でこちらを見ている。

・・・・・・・・・とりあえずは無事なようだ。

目の端でそれだけ確認してから私はもう一人、突然の闖入者に呆然と立ち尽くす男に向き直った。

目が合う、男が驚いたように目を見開き何かを口にしようとする―・・前に、

飛び蹴りをその顔面に叩き込んだ。

「ぐふぅっ」

バランスを崩した男は後頭部からそのまま床をズシャァァァと、なんともいい感じの音をたてて滑っていく。

「・・・さっさと帰るわよ」

それを最後まで見届けないまま私はディオンのほうへ体をむけ、その拘束を解きにかかった。

「セリさん、私のこと、迎えに来てくれたんですか？」

「それ以外の何に見えるって？ー・・くそっ固いな」

どうやって結んであるのは皆目見当がつかないほどに結び目が複雑だ。

いっそのことぎってしまおうかと小刀を取り出しきり始めるー・・・がこれまた以上に丈夫だ。

「あのセリさん本当にすいませ」

「謝罪は後で聞く、今は時間が惜し・・・何がおかしい？」

「へ？」

「気持ち悪いぐらいに顔がにやけているぞ、お前」

にこにこと顔がしまりがないほどに崩れているのは家に着てからずっとそうだが、今は特にそれが酷い。

指摘すればディオンは慌てたように言い繕った。

「あっ・・・すすすいませんっ！！別におかしいわけじゃ！！その・・・」

「何？」

「嬉しいんです、セリさんが迎えに来てくれて」

しまりのないほどににやついた顔はー・・頬を紅く染めてとても幸せそうに微笑んだ。

「来てくれないかもと思ってました。セリさんの言いつけをしっかり守らなかった私なんかセリさんに捨てられてしまうのかと・・だから、嬉しいんです」

へへ、と照れたように笑うディオンに私はー・・一体どんな表情をしていたのだろうか。

多分とても複雑な顔をしていたと思う、苦虫を潰したような、とでもいうのだろうか。

「ふんっ、馬鹿馬鹿しい。本当におかしな奴だ、お前は」

彼のまっすぐな瞳に見つめられて・・・・・・・・少し背中がこそばゆい気がするのはきっと気のせいだ。

「へへへ」

「笑うな。さっさとこんなところとはおさらばしたいんだ、いいなじっとし」

「何たることだっっっっっ！！！」

突如響き渡った絶叫にも近い男の声。

「うわっ！？」

「ちっ、早いな」

それに対する二人の反応は正反対だ。

声に驚くディオンと、これでもかというほど冷たい視線を投げつけるセリレイネウスー・・そんな二人の目の前で起き上がったヴィレルは目にもとまらぬ速さでこちらへと近づいてくるではないか。

「ティティ！！あぁティティ！！コレは一体どうしたことだ！？私は夢でも見ているのだろうかっ！！あぁ君にもう一度会えるなんて、神よっ！！感謝します！！これもきっと私たちの運命なんだねっ！あぁしかしそれよりも！！一体どうしたんだいティティ！！その髪！その瞳は！！あぁなんたること！！君のあの麗しい色彩が一欠けらも見えないじゃないか！！ティティ、私のティティ一体何がっー・・げはぁつ！！！！！！！！」

「誰がお前のだ！！」

だが彼の特攻も虚しくー・・セリレイネウスに手が届く寸前で再びそのその顔面に彼女の足裏がめり込んだ。

「ティ」

「その名で私を呼ぶなこの変態！！」

次いで体を反転させて勢いをつけた彼女の回し蹴りがヴィレルの鳩尾に深く入る。

「ぎゃっ」

彼の体は再び後ろへと吹き飛び調度品をひっくり返しながらその崩れた山の中へと消えていった。
完全に沈黙したことを確認したセリレイネウスは「よし」と満足げに頷くとディオンの方へと向き直る。

「余計な時間をとってしまったな、さぁさっさと・・・・？」

振り返れば先ほど度変わらず未だ椅子に縛り付けられたままのディオンの姿。
・・・だが何か様子がおかしい。

「？ディオ・・」

「セリさん」

いつもと変わらず聞こえるはずのディオンの声。
でも何故だろう？何故こんなに背筋が冷やりとするのか。

「ど、どうした？」

私は何も悪いことはしていないのに・・・はじめてみせる彼のその感情に少しびびって口調がどもってしまう。

ー・・そう、彼から感じるこの冷やりとした感情は間違いなく”怒

気”だ。

「・・・その男、セリさんのお知り合いですか？」

「あっあぁ・・・」

まぁあまり深く関わりたくない相手ではあるが一応知り合いだ。

「そう、ですか」

先ほどまでのへにゃりとした顔は一体何処へ行ったというのか、無表情にも程がある。

また少し周りの温度が下がった気がしたー・・その時だ。

ぶちぃっ、と大きな音がした。

「！？」

音の元をたどればー・・なんとあの固く結ばれていた太縄が引きちぎられているではないか。

小刀でさえ切るのが難しかったのに・・・いとも簡単にそれを引きちぎって見せたディオンに、そんなことができるのなら何故もっと早いうちにそうしなかったのかなどと思いもしたものの・・・残念ながらそんなこと口に出来るような空気ではない。

「ディ、ディオン・・・？」

無言のまま立ち上がったディオンがそのままこちらへ近づいてくるー・・ひょい、と視界が高くなった。

「!?ちょっ、お前」

突然抱きかかえ上げられたことに抗議の声を上げようとする、が

「セリさん」

密着しているためかすぐ耳元で低く囁かれる声がそれを許さない。

「ここは嫌です、帰りましょう」

にこりと笑うディオンー・・顔は笑っているが目が笑っていない彼に私はこくこくと頷くしかなかった。

続・買い物（後書き）

変態とのバトル（？）

さてセリさん、この後どうなっちゃうんでしょうか？

話し合い。（前書き）

さぁセリさんの運命はっ・・・

話し合い。

それからどうしたかといえば無論、我が家に帰宅した。

行きと同じで一頭の馬に二人で相乗り、私が前でディオンは後ろー・・但し行きと違うのは手綱を握るのがディオンだったということ。片手を私の腰に回し残りの手で上手に馬を操っている。

確か乗るのは初めてだといてはいなかっただろうか？だから行きは後ろに乗せていったというのに・・・

嘘をついていたとか？・・いや違うだろう、海の中に馬はいないし、何せほんの少し前まで彼は幼体だったのだ繰るべき手足はおろか、その必要もない。

では行きのあの短時間の間に見て覚えたとでも言うのだろうか？

しかし聞いてみたくてもできやしない。

家に着くまで互いに終始無言・・・否、どちらかといえば言葉を発する空気ではなかったというべきだろうか。

やがて我が家に到着したのを機に「馬を帰しに行ってくるから」と彼から離れようとしたがー・・残念ながらそれは不実行に終わってしまった。

素早く馬を外に括り付けた彼に問答無用で再び抱き上げられ家の中へと入る。

さて、どうしたものかと成り行きを見守っていれば彼は私を抱きか

かえたまま居間の隅に座り込んでしまった。
どうせ座るならすぐそこにある揺り椅子にでも座ればいいじゃないかとも思ったが合えて口にするのはやめた。
向き合って抱きかかえられているものの俯いているためかディオンの顔を見ることは出来ない。
彼が何を考えているのかは知れないがいずれにしろ、今の彼には離せといっても聞く耳も持ちやしないだろうし、まぁこれ以上何かするわけでもなさそうなのでとりあえず暫くこのままでもいいかと諦めにも近い心境でその現状を受け入れる。
沈黙だけが支配する室内で二人、そのままの体勢で半刻、一刻・・・・どれほどの時間が経過したのだろう。
窓の向こうから差し込む光が段々と赤くなってきているということはもう夕方か・・
体のあちらこちらも痺れてきたし、何よりも腹がへった。

「ディオン」

「・・・・・・・・」

呼びかけるが返事はない。
だが屋敷を出るときよりも感じる怒気は明らかに収まっているようだった。

「なぁディオン、腹が減ったんだが。そろそろ夕飯にしないか？」

「・・・・・・・・」

反応はない。
時折腕に力が篭もるから起きてはいるようだから聞こえてはいるのだろうけれど・・・
駄目かと嘆息するー・・が、ディオンが身動(みじろ)いだ。
やっと解放されるのかと思ったのもつかの間、その身は再び宙へと浮き上がった。
「うわっ」
体勢が変わったことにより長時間動いていなかった体のいたるところから関節の鳴る音が響く。
それからどう動くのかと彼の行動を見ていればそのまま台所へと移動し、左手で私を抱えなおすと右手のみで器用に食事を作り始めたではないか。
どれだけ吃驚人間・・・じゃない吃驚人魚なんだと突っ込みつつもその動きをつぶさに観察しているとあっという間に料理が出来上がってしまった。
出来上がった料理を手に椅子に座ったディオンー・・当然、私の位置はといえばその膝の上だ。
「ディオン、食べにくい・・・」
無駄だとわかっていながらも抗議の声をあげてはみるがやはり返事はなく、膝から降りようにも腰に回された腕がそれを許さない。
（ともかく腹ごなしか）
凄まじい怒気と空腹にあてられ、精神も身体も疲弊してしまってい

る。
コレを回復させないことにはまともな思考などありもしないのだからと、黙々と料理を口に運ぶ。
「ご馳走様でした」
食事を終えると体を横抱きに抱き直されるが、それ以上その場を動こうとはしなかった。
変わらず彼の口から語られる言葉はない。
・・・さてさて困ったものだ。
これ以上の実害はないとしても現状見る限りではこのまま一晩明かしかねない。
とんとん、と彼の肩をたたく。
「ディオン、用を足しに行きたいのだが」
直球だ。
面と向かって女性から男性に対していうような言葉ではないだろうが、恥じらう年頃などとうに過ぎた。それに相手は人魚（ディオン）だ、何を恥らう必要があるか。
のそり、とディオンが動くがそれを強く制した。
「まて、まさかついてくる気じゃないだろうな？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「駄目に決まっているだろう！」

……そこまでの恥は捨ててはいない。むしろ何処の変態だ。

「だって…」

ぽそりと呟かれる声。

何刻ぶりかに聞く彼の声だ。

「私のことを、置いていってしまうのでしょう？」

「はぁ？」

「放したらセリさんは私から離れていってしまうんだ…きっとあの屋敷の人間のところへいってしまうんだ…」

独り言のように呟かれる言葉に私はただただー・・理解不能だ。

「待て待て待て、何をどうしたらお前を置いて出て行くことになる？そもそもここは私の家だ」

「でも」

「でもじゃない。それになんだ？あの屋敷のって…まさかあの変態（ヴィレル）のことをいっているんじゃないだろうな」

「だって！」

がばりとディオンが俯かせていた顔を上げた。

「あの人間っセリさんのことをよく知ってるみたいでした！！セリさんだってあの人間と仲が良さそうだったじゃないですか！！」

「どこかだ！！」

あのやり取りをどう見たら”仲が良さそう”に見えるというのか。

「アレがどう思ってるかは知らないがとにもかくにもこちらとしては迷惑なだけだ！」

「”アレ”！？”アレ”って何か親密な響きじゃないですかぁ！？」

「だから違うといっているだろう！！お前はどうしてそう歪曲的なものの見方しかしないんだ！」

「じゃあどうしてあの男は貴女の肖像画を持っていたんです！？」

「肖像画？」

「今よりちょっと小さかったですし色も違いましたけどあれは間違いなくセリさんでした！」

少し考えて・・・過去そんなものを描かされたことに思い当たり思わず舌打ちが漏れる。

「ちっ、あれか」

まだ持って嫌がったのか、あの変態野郎。

当時のものは全部処分していたと思ったのに・・・やはり屋敷ごと燃やすべきだったか？

「・・・おい、何故そこで泣く？」

「うっ・・やっぱりセリさんなんだ・・・」

「まてまて、お前も自分で断定してただろう」

わけがわからない、というか本当によく泣く人魚だ。
人魚というのは泣き上戸な生き物なのだろうか？

ディオンはめそめそしくしくと泣きはらし、嗚咽に混じって「何であの男……私は…ないのに……」とかなんか良くわからない独り言をぶつぶつと呟いている。

見てくれがいいだけにその様ははっきり言って不気味以外の何者でもない。

前髪を垂らし顔を両手で覆い泣きはらして時折聞こえる独り言…どこの怪談話だ、洒落にもならない。

しかし…今なら膝の上から逃げれそうだ。

あぁもういっそのことこのまま放って部屋にでも篭もってしまおうか、面倒くさいし。

ならば、と思い立ったら吉日。
テーブルに体重をかけそろりと腰を浮かし、脚が床を踏みしめたー・・所で、

「何処へ行くのですか？」

バレたーーー！！

「いやだからトイレにー・・うわっ！！」

くるりと視界が反転する。

カシャンと音を立てたのはテーブルの上に置かれたままの食器類。

「やっぱり私を置いて行くのですね」

さらりと顔に触れるのは青銀の髪。

「おい、ディオー・・」

「貴女の伴侶になれなくてもいい、好いてくれなくてもいい」

その長い睫毛が触れそうになるほどに近いー・・だからか、いつもより大きく鮮やかに見えるアクアマリンの瞳。

「ただ貴女の側にいれるならそれだけでいい」

吐息が近い。ともすれば唇が触れ合ってしまいそうだ。

「でも」

動けない。

何故私の体は動かない？

腕をとられているから？テーブルに圧し掛かる様に縫いとめられえているから？

だけじゃないー・・

「私を置いて他の男の元へ行くなんて」

すっと細められる瞳にひゅっと息を呑んだ。
腹の底が凍てつくほど冷えきっている。

「駄目です」

両手を縫いとめていた拘束が解かれる、だが私は動かなかった。

動けなかった。

ひやりとした感触が私の頬を包む。

「嫉妬で狂ってしまいそうです。私の知らない貴女を知っている人間を全て消してしまったらこの気持ちもおさまるのでしょうか？」

ねぇセリさん、と優しく頬を撫でる手にはやはり体温がない。
何処までも冷たいその感触はただただ、虚しさと悲しさしか感じることが出来ない。

「いっそのこと貴女を閉じ込めてしまいましょうか？貴女に触れることが出来るのは私だけー・・」

「なに・・を・・・」

”何を言っているんだ”と続けたい言葉は喉がカラカラに乾いてしまっていて続けることが出来ない。

「あぁそれよりもやはりあの男を先に殺してしまいましょうかー・・・」

冷えた目でにこりと笑う。
嫌な汗がつたりと額を滑った。

こいつはこんな表情をする奴だったろうか？
出会って幾日もしていないが決してこんな顔をする奴ではなかった筈だ。

ー・・それともコレが人魚（かれ）の本質なのだろうか？

澄んでいるはずのアクアマリンの瞳は狂気に満ち、それを覗き込むものを凍てつかせる光をちらつかせ、
細められた瞳からは潤んだー・・ん？

……潤んだ？

「……ちょっとまて」

さっきから顔に当たってくるコレは地味に痛い。

「何でそこでお前が泣く！！」

先ほどまでの冷たい空気は何処へやら。
再びその目からは大粒の涙が流れはじめているではないか。
（やっぱり人魚って泣き上戸！？）
……違う、今考えるはそんなことじゃない。
「うっ・・うぅっ・・・だってセリさんに嫌われちゃうと思って・・」
「はぁ！？」
「それにあんな怖いことといっぱい言ってたら段々怖くなって…ぐすっ」
怖いことー・・”消す”とか”殺す”とか”閉じ込める”・・・・・・・とかだろうか？
「”他者に労わる心を持ち得ない者は愛を得ない”って大爺様がいってたのを思い出してしまって・・・こんな怖いことばかりいったら嫌われちゃうっておもったら・・・・うぅっ」
ガバリとそのままの体勢で首元に抱きつかれた。
・・・・・・・苦しい。
「ごめんなさい、セリさん！もう言わないから嫌いにならないで！！」
「わかった！！わかったからとりあえず離せ！！」

「それは嫌ーーーーーー・・っぎゃっ！！」

ゴンッと骨と骨とがぶつかりあういい音がした。

「埒が明かないだろう！！」

「うぅっ・・・舌噛んだ・・っ」

額と口元を押さえながらその場に蹲るディオン。

私だって多少なりとも痛いが、伊達に友人たちから”石頭”の異名をつけられているだけではない。

「とにかく、お前が危惧しているようなことはまず絶対ありえないから安心しろ。それだけは天地神明にかけて誓うぞ」

あの変態（ヴィレル）と恋仲などどんな悪夢だ。おぞましい。

話し合い。（後書き）

すいません。。長くなりそうだったのでとりあえずここで切ったのですが・・・切りどころがわからなくて中途半端な感じになってしまいましたね。。

ちなみにセリさんの”石頭”は性格的な意味も含めて、のようです。

話し合い２（前書き）

続きです。

話し合い２

何処まで願っていいのだろう？

何処まで思ってもいいのだろう？

何処までが許されて許されない？

この想いは貴女にとっては重荷にしかならないのだろうか？

でも

それでも

それでも私は

ー・・貴女を想わずにはいられない

＊

眉間にぎゅっと皺が寄る。
あまり笑顔を見せず、いつも無表情に近いー・・どちらかといえば仏頂面の彼女の眉間に皺が寄るのは本当に嫌なことがあったりしたときだ、例えば昨日の夕飯に出したサンポェーナ（＊1）を出したときとか。

「とにかく、お前が危惧しているようなことはまず絶対ありえないから安心しろ。それだけは天地神明にかけて誓うぞ」

げんなりとそういう彼女の言葉を信用していないわけではないー・・ではないが、まだ私の胸の奥に残ったしこりはとれたわけではない。

確かに彼は言っていたのだ、あの絵を愛でながら「私の思い人だ」と。

・・・その言葉を頭の中で反芻するたびにざわりとした感情が腹の底を撫でる。

「じゃっじゃあ、あの人間はどうしてセリさんの絵を？」

「知るか」

心底嫌そうに一言で片付けられてしまった。
しかも彼女もその絵のことを思い出したのかそのまま考え込むように少し俯いたかと思えば、ぽつりと聞こえてくる独り言。

「・・・あぁやっぱり不快だ、燃やしてくるか」

「駄目！いっちゃ駄目です！！」

放火魔になることを止めるというよりは、あの屋敷に戻って欲しくなかったので彼女を引きとめようとその腰にがしっとしがみついた。

「どうしてお前はそう一々引っ付いてくる！！」

「うぅっ」

離れろといわんばかりにぐいぐいと顔を両手で押されるがそれに反発するように力を込めた。
ここで離すわけにはいかないのだ。

「だって離したら行っちゃうじゃないですかー！！捨てないでください！！」

「人聞きの悪いことを言うなと何度言えばー・・あぁっくそっ！！・・・お前と話してるといつまでたっても堂々巡りだ」

重く深い溜息を吐いた彼女。
上から聞こえてくるその音に大げさだが思わずびくりと反応してしまった。

・・・・・・・呆れられてしまった？

気付けば引き剥がそうとしていた腕の抵抗もなくなっていた。
不安になって見上げればいつもの仏頂面に、少し困ったような感情を乗せた彼女の顔。

「あっ・・・・」

どうしよう、困らせてしまった。

きっと私がどうしようもなく我儘ばかり言うから怒ってしまったんだ。
どうしよう、どうしよう。
はぁ、とまた一つ溜息。
それに再びビクリと反応してしまい項垂れた。
「どうしてそんな顔をする。・・まるで私が虐めているみたいじゃないか」
「すいません・・・」
「全く・・・私にはお前が理解できない」
その言葉がズンと心の奥底に突き刺さる。
あぁやっぱり駄目だった。嫌われてしまった。
頭の中が真っ白だ。ぐちゃぐちゃといろんなものが混ざり合いすぎて思考がまとまらない。
どうしよう。どうしよう。どうしようどうしようどうしようどうしようー・・
彼女の口が動くー・・お願いだから、時間よ止まってしまえと節に願うがそうはいかない。
「お前は」
きっとその口から次に出される言葉を聴いてしまったら私は絶望で死んでしまうー・・

「お前は、どうすれば納得するんだ？」

「えっ・・・？」

だが、彼女の口から紡がれた言葉は予想していたものとは違っていて・・思わず聞き返してしまった。

「どうして欲しい？」

怒るでもなく、拒絶するでもなくー・・彼女は聞いたのだった。

＊

泣いたかと思えば怒りを顕にしたり、また泣いたかと思えば豹変し・・・そしてまた泣く。

今なんて捨てられた子犬のような目でこちらを見上げてくる。

「どうしてそんな顔をする」

全く

「・・・まるで私が虐めているみたいじゃないか」

「すいません・・・」

幼子のようにふざけているかと思えば急に大人びる。
背筋を凍らせるほどの殺気にも近い怒気をその身からたぎらせて見せる。
・・・かと思えば自分で言った言葉に傷つき、泣き始める。
感情の起伏が激しいというか・・・これではまるで子供のようではないか。

「全く・・・私にはお前が理解できないよ」

だが、そこでふと気付いた。
子供の様でないー・・”子供”なのだ。

人魚は総じて自由奔放で穏やかな一族だという。
それは人の何倍も違う長寿故だとも言われている。

彼等の時間は海の底を緩やかに流れる海流のようにゆっくりと進む。
肉体もー・・そして精神も。

見た目はどれだけ成人したように見えても中身は子供のままだ。

・・・そう考えるのであれば、私は彼を理解するためにどうすればいいのか考えることが出来る。

「お前はどうすれば納得するんだ?」

「えっ・・・?」

昔、少しの間だけだが知人の子供をあずかったことがある。
物心もつくかつかないかの年頃で、よくよく癇癪をおこしては泣く子だった。

しかもそれがよくわからないような事で突然泣き出すものだからほとほと困り果てたものだ。
どうしたものかと友人に助けを求めれば”何、簡単なことだよ”と笑われた。
ー・・その子の真実望むことをゆっくり聞いてあげればいいんだ。

「どうして欲しい？」

ー・・子供というのは感情をすぐ表に出すくせにそれを伝えるのはあまり上手じゃないんだよ
　私たち大人はそれを上手に引き出してやってあげなくちゃいけない

表に出た感情だけを見て頭ごなしに押さえつけるのではなく、それをしっかりと言葉に置き換えて伝わせるようにしなくてはいけない。
人は大人になるに連れ子供の時の”感情”を忘れる―・・”理性”ばかりが頭でっかちに育っていってしまって言葉を巧みに操る変わりに感情に蓋をしていく術を覚えるのだ。
だがそれを知らない子供は感情ばかりを表にだす。
それを私たちが理解するにはそれを”言葉”に置き換えさせるしかないのだ。

ー・・つまるところ師に教えを乞う弟子のようにその思いに辛抱強く耳を傾けなければいけないのさ

と、友人は笑っていっていた。

今、私は彼（ディオン）のことが理解できない。
だから理解しようと耳を傾けることにした。彼の表ばかりの”感情

”にではなく内にあるであろう”言葉”に。

「言葉にしてくれなければわからないこともある。私には今のお前が理解できない。お前は何を望み、何を知れば納得する？」

促すように続ければ、ディオンの瞳が揺れた。

考えるように、心の内に溜っているであろう言葉を探している。

「私・・・は・・・」

ぎゅっと服を掴む手に力がこめられた。

「私は、セリさんと、一緒にいたい、です。でもセリさんのことを何も知らない、何も知らないのが凄く寂しくて悲しい・・・今セリさんといるのは私なのに・・・私はセリさんを知らない」

だから、とゆっくりと彼は言葉を紡ぐ。

「セリさんのことが知りたいです」

しぼりだすように口にされたその言葉に知らず内に苦笑が漏れる。

「わかった」

ポンとその頭に手を置く。

最初からそう言えば良かったのにー・・全く、全く馬鹿な奴。

話し合い２（後書き）

＊１　サンポェーナ＝酢の物のようなもの。

最初はセリさん視点で書いていたのですがディオン視点もありかな？と思い至り急遽書き直し。
とりあえずはこれで一段落？
セリさんのことについては次回、閑話休題的な感じで書きます。
その次からまた新たな展開へ・・・

閑話休題ーセリさん（前書き）

セリさんのことについて。
なのでちょっと説明くさいかも。

閑話休題ーセリさん

とりあえず放れないと教えてやらん、といえば渋々ディオンがその身を離した。
…服の裾は掴まれたままだったが。

（まぁいいか）

互いに椅子に座り直したのを見計らいさて、と話を切り出した。

「まず何が知りたい？」

「えっ！？あ…うー・・」

途端頭を抱えるディオン。

……考えていなかったのか。

「悩むな」

「うぅっ、聞きたいことが多すぎて…」

ー・・この調子では夜が更けきってしまうのではないだろうか。
思わず溜息が漏れてしまったことはいたし方がないだろう。

「…わかった、じゃあまずお前が一番気になっているところからにしなさい」

つい出来の悪い教え子を諭すような口調になってしまう。

「はっはい…では、セリさんとあの人…ヴィレルさんとの関係を教えてください」

関係も何もないただの赤の他人ー・・では納得しないだろうな、こいつは。

出来れば本当に同じ空気すら吸っていたくないほどのいわば害虫、なのだが…仕方ない。

「彼(アレ)とは学院(インシティット)時代同期だった」

「学院(インシティット)？」

「王都(カマンサ・レール)にある貴族の子息女が集まる哲学(インシティット・ムドゥルスティイルソニア)する英知の学院のことさ」

ご大層な名前がつけられているものだが、そこで学ぶ生徒の半数以上は箔付けのために金と地位にモノを言わせて入学したに過ぎないボンクラ集団の塊ばかりだ。

「ではセリさんも”貴族”なのですか？」

…ぼぉっとしてるようで以外に目ざとく拾う奴だな。

「そうだー・・私の貴族としての名は、コールディーン・ユグラ・ティティール・ファンフォーン」

最初に来るのは姓、ユグラは貴族の女だという意味で（男だとセド）、三番目に名がきて、最後に家名が入る。

つまり私の場合、ファンフォーン家の娘コールディン・ティティールである、ということ。
これが当主などになればさらにその後に爵位やら職名やらついたりするが、まぁそこは割愛だ。

人魚の世界とは違う名前の作りを説明すればディオンは「長いですね」と感心したように息を洩らした。
そこで「人魚はどうなんだ？」と聞き返せばこれまた妙なもので、成人してから個人としての名をつけるのだがそれまでは”珊瑚礁の近くの子”やら”誰々の息子”などと呼ばれるらしい。

「それではセリさんのその名前は”嘘”なのですか？」

少し悲しそうに聞いてくるディオンに、いや、と肩をすくめて見せた。

「これは間違いなく私の名だよ」

”セリレイネウス”は私が”コールディーン・ユグラ・ティティール・ファンフォーン”と決別するために私自身でつけた名だ。

「今の私は貴族ではない、ただのセリレイネウスだー・・間違えてもあのド変態みたいに貴族名で呼ぼうなんて思うなよ、わかったか？」

「はい！」

「よろしい。あ～・・何処まで話したんだったか…あぁあいつとの関係だったな。そう、あいつとは学院の同期で…」

ここで一端言葉を切る。ふむ、どう説明するのが一番いいのだろうか。

「…一方的に好意を寄せられてはいたがまさに害虫以外の何者でもな」

「好意！？ー・・ぐぅっ」

「人の話を最後まで聞けないのかお前は」

相変わらず人の話の腰を折るのが好きらしい。

ぐにっとその両頬をつまみあげれば折角の美形が見るも無残に面白い顔になっていく。

「うぅっ…すいません」

「大体好意といってもだな、アレが興味があったのは私の髪と瞳の色だけだよ」

両親から受け継いだこの色ー・・滅多にない組み合わせに（迷惑なことこの上ないが）自称美しいもの収集家（コレクター）としてのあれの目に止まってしまった。

元々苦手だった自分の色彩に輪をかけて嫌いになったのもアレのせいだと言っても過言ではない。

「アレが私に寄せる好意は普通の男女のものとは言い難いなー・・例えて言うならば私は求める芸術品（コレクション）の一つでしかない、ということだ。無論そんなのに言い寄られても気持ちのいいものではないし、元々興味がない。私にとって”ヴィレル・セド・クィル・ラディフォール”という人間は興味の範囲外、むしろ敵だ！天敵、害虫、蛆

虫以下のド変態っー・・わかったか？」

話しているうちにだんだんとムカムカしてきて、自然語尾が強くなっていく。

「はっはい…あの人がセリさんにとって物凄く嫌な人ってことはわかりました」

私が目に見えて苛々しているのが怖いのか頷いたディオンは、恐る恐るといった様で片手を挙げた。

「じゃあ次の質問してもいいですか？…何でセリさんは昔と今は色が」

「……」

やっぱり話の流れ的にはそう来るよな。

むむっと思わず眉間に皺がよるのを感じる。

そんな私の様子にディオンはかくりとうなだれた。

「すいません…やっぱりいいです」

「ん？あぁ、いや別にいいさ。一言で言えば”嫌い”だから、かな。学院（インシティット）をでてからは魔法でずっとこの色に変えている」

「嫌い…ですか？確かセリさんのお父様とお母様から頂いた色なんですよね？」

「あぁー・・あの人たちにはよく似合う色だろうが、私みたいな平々凡々な顔には到底不釣合いな色さ」

「そんな！そんなことないです！セリさんにだって絶対似合います！」

拳を握って否定するディオンに思わず苦笑が漏れた。

宥める言葉の変わりにその頭をぽんぽんと軽くなでつければ（まだ何か言いたげではあったが）彼はおとなしく元の姿勢に戻る。

「他には？」

「う…うーんと…ではセリさんのお仕事を教えてください！」

「ん？」

あれ？言ってなかったか？

出会ってからここ数日の会話を思い浮かべてみるが…そういえば言っていないな。

しかし何の仕事をしているかもしれない他人のうちに転がり込んで生活できるのも常識はずれ…まぁ人魚だし仕方がないといえばそれで終いか。

やはり今回の件といい、こいつには一から常識というものを叩き込んだほうがいいのだろう。

「…ちなみに何の仕事をしていると思う？」

「えぇっと……本を読む人？」

「そんな仕事があるか」

確かに本ばかり読んでいるからそう思われても仕方がないか。しかし本を読むだけで仕事になるなら楽なことこの上ないな。

「私は学者だ。生態錬術師（エルヒミーク）の称号を持っている」

「生態錬術師（エルヒミーク）…？」

「動植物の生態系を分析し探求しそこから得られるあらゆるものを生み出す学者たちのことさ」

この世にある全ての動植物が私の研究対象ー・・無論、幻想種（レジンヴァラ）は除くが。

幻想種はそれ専門の幻想精錬師（ファーフユドピレ）という学者がいる。

余談ではあるが、王都の友人はこの幻想精錬師（ファーフユドピレ）として城勤（カマンサ・レール）めをしている。

６年前までは私も生態錬術師（エルヒミーク）として登城していたものだったが…

「論文や研究成果を出して生活費や研究費を稼ぐのが主な仕事だが、まぁ今は半隠居の身だからな。もっぱら研究だけが今の私の仕事だ」

「成る程！」

そう深く頷いたディオンは、では次の質問を！と再びうんうんと考え込みはじめたが…

「どうした？」

「…うぅっ……セリさんのことといっぱい知りたいのに知りたいことが多すぎて頭がこんがらがっちゃってます…」

と、頭を抱え始めた。
そんなに難しく考えることもないだろうに、と思いはしたもののそれを口にはせずに私は席を立つ。
「無理をするな。もう夜も遅い、とにかく今日はもう寝るとしよう」
「ええっでもっ…！」
「焦る必要はないだろう？また聞きたくなったら聞けばいい」
「！！…はい！」
落ち込んだかと思えばそのたった一言で嬉々とした顔を見せるディオンに肩を竦めて見せる。
何はともあれとにかくこれで今回のことは片付いたか、ようやく一息つける。
しかし本当に疲れた一日だった…今日はもうおとなしく寝るとしようか、と部屋に戻りかけ
「あぁ、そういえば」
一つ気になることを思い出した。
「ディオン」
「何ですか？セリさん」
「私も一つ聞きたいことがあるんだが…いいか？」

「はい！何でも仰って下さい！！」

ばーんと胸を張って何でもこいの姿勢のディオンに私は疑問をぶつける。

「あんな言葉何処で覚えてきた？」

「あんな言葉？」

「ほら、自分で言って怖いっていってただろう、あれだ」

「あぁ」

思い返すだけで少しぞくりとする今のディオンとは到底かけ離れたあの時のディオン。

しかし彼は自分で言った筈のあの言葉を”怖い”と表現したー・・そしてその後の彼の言動とこの性格から推測するに元々彼の今までの生活の中でああいった”言葉”に触れる機会は皆無といっていいほど無かったのではないだろうか。

では何故彼はあそこまでの変貌を遂げたのか？

それとも人魚というものは成人すれば性格も変わってしまうものだろうか？あぁしかしそれでは穏やかな性格多いという定説が崩れて…

「あれはマリーシカさんが」

「マリーシカさん？…奥方か？」

「はい！マリーシカさんが”押して駄目なら引いてみなさい。引い

ても駄目ならいっそのこと引きずり込んじゃいなさい”って本を貸してくれて」

「まてまてまてまて、話が見えない。本？」

「はいー・・あっちょっと待っててくださいね」

ぱたぱたと小走りで自分の部屋に戻ったディオンが持ってきたのは少し古びた書物を3冊持ってきて見せた。

「これです！”参考にしなさい”っていただいたんですが」

その外装に書かれた文字には見覚えがある。

確か何年か前に王都の女性たち（カマンサ・レール）の間で流行ったー・・恋愛小説と同じ表題だ。

全3部作で構成されており、城を攻め落とされた亡国の王女がその征服者によって奪われ、王女の恋人が彼女を助けに行くも王女の心は征服者に傾いてて…いい感じのドロドロした三角関係なのよー！征服王の鬼畜ッぷりがたまらないのよー！！とか友人が言っていた気がする。よくわからないが。

「結構面白いんですよ！セリさんも読んでみます？」

「…いや、それよりも何故お前が奥方からそれを受け取れる？いつあった？」

「え？いつって昨日も一昨日もお会いしましたよ？お野菜とか沢山いただけるし色々相談聞いてくれるんです。本当に良い方たちですよね」

「…たち？」

「はい。マリーシカさんに、メリィさん、ロザさん、マァラさん、それに…」

次々とあげられていく村のご婦人たちの名前。

…つまりあれか、私が部屋で研究に没頭している間に村のご婦人たちと井戸端会議をしていたということか。

しかも相談……何の相談かは聞かなくても察しはつく。

＝筒抜（イコール）けということで。

「…迂闊」

迂闊以外なんだというのか。

全く私としたことがとんでもない失態をしてしまったようだ。

「セリさんの好きな野菜とか魚とかも教えてもらったりしてるんです！あっそうだ！今度マイリーノの漬け方を教えてもらうことになってるので楽しみに」

「…ディオン」

「って…あれ？セリ…さん？」

一晩外に放置した。

閑話休題ーセリさん（後書き）

ちなみに色を変える魔法をかけているのは王都の友人です。
セリさんは魔法は使えません。

井戸端会議で内情喋りまくりのディオンは一晩ほされました。
そろそろセリさんの特技に「放置プレイ」が追加されそうです。

訪問者二人目。1

白波が立つ海面には青白い月の光が煌々と反射している。

荒れることもなく穏やかな波の音がこのまま一晩中続くと思われたが、中天に月が差し掛かった頃、それは微かな変化を見せる事となった。

水面に浮き出る一つの塊。

それは沖合いから顔を覗かせると陸のほうへと近づいていく。

すいすいと動くそれは大きな魚のようにも見えなくはないが、やがて切り立った岩肌に囲まれた小さな入り江の浅瀬へと入り込んだそれはゆっくりと海面からその見える面積を増やしていったー・・その様を見るからにそれは魚とは違うと十中八九いいきれるだろう。

海から出たそれはざらりとした砂浜を何度か踏みしめその今までにない感触を確かめると、くんー・・と鼻を鳴らす。

「ふんっ…実に獣くさい」

不快気に呟かれたその言葉を聴くものはおらず…それは暫くその場で立ち尽くしていたと思えばいつの間にやら姿を森の中へと消していったのだった。

＊

人魚と出会って2ヶ月と二日。＋同居して丁度一週間目。
私の目覚めは香ばしいパンの匂いで始まるようになっていた。

「おはようございます、セリさん」

「んっ…おはよう…」

眠い目をこすり匂いにつられ起きてみれば台所には既にディオンの姿。
同居を始めてからというもののすっかり今までの朝の習慣が変わってしまった。

「まだ寝ててもいいんですよ？夕べも遅くまで起きていらっしゃったでしょう？」

まるで母親のような物言いだ。
まぁ確かに昨日は夜更かしをしすぎてしまったか…いやだってマルギリーノの研究書は読み出すととまらないんだ。

「いや…大丈夫だ」

家事全般をディオンに任せたことにより私は必然と早起きすることをやめた。
ほんの少し前までは日の出の前に目覚め健康的な一日を始めてい

たのに、たった一週間！一週間たらずで私の生活は実に堕落しきったものとなっていた。
朝寝坊は当たり前、研究書を読み明かしての夜更かし上等。
昼間は昼間でほとんど動くことなく部屋に篭もって研究しているか居間で本を読み漁っているかのどちらかー・・たまーにディオンが鬱陶しいぐらいに絡んでくるときに体を動かすくらいだろうか。

椅子にすわりふと目線が自分の下腹部へと下る。

ー・・さすがにまずいか？

連日まともにありつける飯はこの上なく上手い。
この一週間その上手い飯を三食しっかり食しているときたら…まぁ結果は目に見えてわかるところに出てくるものだ。

「セリさんお待たせしました」

コトリと置かれる焼き立てのパンとスープと、魚の煮物。

「いただきます」

（今日は研究はやめて外にでも出るか…）

そう決意をする。が、とりあえずは目の前の朝食を胃袋に収めることからはじめよう。

＊

「と、いうことでちょっと行ってくる」といえば「どういうことですかぁ！？」とついてきたがるディオンを殴ー・・いや宥めて（一緒に村へ降りたら何を言われるかわかったもんじゃない）山道を下る。

そろそろつきかけそうな消耗品も買いたしたかったし、頼まれていた薬も卸しに行かねばならなかったので丁度いい。

そういえば先のヴィスオラで手に入れ損ねたディオンの服がそろそろ届く頃合だろう（暫くあちらに行くのは面倒なので結局何着か頼んで送ってもらうことにした）帰りに便屋に顔を出してみようか。

まばらに通る村人に声をかけられては無愛想にならない程度に軽く会釈を返しながら村の中心に近い場所に建っている民家を訪れた。

古びてはいるが手入れが行き届いているその民家の玄関のすぐ横には、揺り椅子で煙草をふかしながらまどろむ一人の老人の姿が見える。

近づいてくるセリに気付いたのか、日よけのために被っていた麦わら帽をほんの少し上げ顔を見せた老人は日に焼けた顔をにまっとくしゃませた。

「やぁセリレイネウスさん、旦那は元気かい？」

「……彼はただの知り合いですよ」

「おや、ワシがエマから聞いた話じゃー・・・」

「そんな話さっさと頭の中からたたき出して結構です」

どんな話しだ全く。

是が非でも抹消していただくか正しい情報で上塗りしていただくしかない。

「ところでシュレイルさん、先日頼まれていた薬ですが」

「おぉっさすがセリレイネウスさん！仕事が早い！」

両手に持っていた木箱の蓋を開けて見せればシュレイルは目を輝かせ喜んだ。

「中に運びますよ？」

「あぁすまないね、お茶でも入れよう」

「いえ、おかまいなく」

村の中ではもっとも頻繁に訪れるのがこのシュレイルの家、勝手知ったる他人の家とはよく言ったものだ。部屋の隅に置かれた大きめの戸棚を開けてその中へと薬をしまっていく。

家の中は薬品と少しばかりのアルコール臭が漂う。

続きになっているすぐ隣の部屋には清潔なベッドが一つと、医療用の機材ー・・シュレイルはこの村唯一の医者である。

若い頃はそこそこ名の知れた医者として各地を転々としていたそうだが、産婆師である妻が体調を崩したのをきっかけに前線から身を引き妻の療養もかねてこの田舎へと腰を落ち着けたそうだ。

医者としての腕はまだまだ衰えていないものの、自分で薬草を摘みにいったりすることが辛いそうでセリがこの村に住み着いてからは何かと薬の調合や何やらを頼まれている。

「ワシがいれた茶だから上手くはないがまぁ一杯ぐらい飲んでいきなさい」

「今日はエマさんは？」

「昨日から少し体調を崩していてね、２階で寝ておるよ」

「最近は朝晩が冷えますからね。今度ソレィ茸でも採ってきましょう」

「あぁそれは助かる、あれは温まるからなぁ…おぉ、そうだった、それでついでといっては申し訳ないのだが一つ頼みごとを引き受けてはくれないかい？」

「私に出来ることであれば」

「セリレイネウスさんにしか頼めないことなんじゃよ。ほれ、エヴァンのところの上さんが妊娠してるのは知ってるかね？」

「えぇ、マリーネさんですね。確か初子だったかと」

「産み月が今月での、そろそろなんじゃが…」

そこまで聞いて、あぁ、と納得した私は先を聞かずに頷いた。

「そういうことでしたら引き受けましょう」

「話が早くて助かるよセリレイネウスさん、エマも喜ぶ」

エマさんには劣るが、何度かその手伝いをさせてもらったことも

あるし知識としては頭の中に十二分に入っているから問題はないだろう。

何より人体の最大の神秘とも言える瞬間に立ち会うことができるのだ。

魔術師たちが作るような人造生命体（ホムンクルス）や合成獣（キメラ）などとは違う、人が人を”創る”瞬間ー・・それに立ち会わないなど生態錬術（エルヒミーク）師としての名が廃る。

「きっとそういってくれるだろうと思ってエヴァンたちには前もってセリレイネウスさんに産婆を頼むというのは話してあるよ」

「…お早いことで」

「ほっほっ、セリレイネウスさんの腕は確かだと皆知っているからの。セリレイネウスさんがとりあげた子供たちは皆利発に育つと評判じゃて、エヴァンたちも喜んでおったよー・・あぁそうだ、村の女連中で改めて頼みに行くといっていたからもしかしたら今日当たりに家にお邪魔するかもしれんよ」

「それは…」

ならば早々に用を済まして帰ったほうがいいだろう。

行き違いになるのはしょうがないとして、私が留守の間にあの馬鹿が余計な戯言でも洩らそうものなら今の非ではない噂話が一夜で村に浸透してしまう。

「また来ます。ではそろそろ」

「シュレイル先生、いるかい？」

お暇しよう、と腰を浮かせたところで新たな訪問者のようだ。
顔を覗かせたのはこの村の村長でもあるゼバッシュ・フィードルー・・漁師をしているだけに体つきはごつく、日に焼けた肌に年相応の皺を刻ませている。
彼の目がシュレイルを捉え、そのまま私に気付くとおや、と言った顔になった。

「よぉ！セイレイネウスさん、来てたのか。どうだい？最近旦ー・・」

「ただの知り合いで居候です」

全く、顔をあわせるたびにこれではキリがない。

「どうしたい、村長。誰か怪我でもしたかね？」

「あぁっそうだった！それがよ、西の浜辺で行き倒れを拾ってな」

「行き倒れ？」

「息はしてるし死んじゃいねえが中々目覚まさないんだよ。で先生に一度診てもらおうと思ってきたんだが…今はうちで預かってるよ」

「そうかそうか、じゃあすぐ準備するからちょっとまっとくれ」

と、いそいそと往診鞄に道具を詰め始める。
まぁただの行き倒れなら私が手伝うことはなにもないだろう、と
「それじゃあ私はこれで…」と帰ろうとすると、

「あっセリレイネウスさんちょっとまってくれ」

と呼び止められた。

「丁度よかった、あんたにも一緒に来て見て欲しいんだ」

「？ただの行き倒れではないのですか？」

ただの行き倒れに私がついて行って見なければならない理由とは何だ？

…まさか知り合いだったりして。何て

「あんたに見てもらいたいのはー・・”顔”なんだ」

「……は？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまったのは仕方がないことだと思う。

訪問者二人目。１（後書き）

便屋＝郵便局とか佐〇急便的なところです。

訪問者二人目。２（前書き）

ディオンのターン。

訪問者二人目。2

「ん～・・」

青空の下、ぐぅっと背伸びをすると体のあちこちから音がした。
半刻近く屈んでいたせいか足の筋肉が強張っている。

（人間の脚って不思議だなぁ…）

強張った筋肉を揉み解すようにその両腿に手を添える。
今まで持ちえなかった新しい肢体、幼体の頃には脚と呼べるものもあったが今のコレとは比べようのないくらい別物だった。
水かきもなければ筋のつきかたも鱗もない、何もかもが違うー・・”歩く”という行為にも随分苦労したものだ、陸に上がってから1週間ほどは脚が大地を踏みしめる感覚に違和感を覚えてしょうがなかった。

でもそんなこと苦にもならない。

（だって、セリさんにまた会えた）

ふふ、と思わず笑みがこぼれる。
この感情をどう表現していいものか…今、言い表せないほどの喜びに胸がいっぱいで張り裂けてしまいそうだ。
何だかんだいって側にいることを許してくれる、そんな彼女の側にいれるだけでいい、それだけで幸せ。
それ以上を望まない、といえば嘘になってしまうけれど今はそれだけ、それだけで満たされる。

「ふふ」

顔が緩むのをとめられないまま途中だった作業を再開をしようと屈むー・・がすぐに顔を上げることとなった。

「おはよう、ディオンさん」

山道を登ってやってきたのは村のご婦人たちだ。

「皆さん、おはようございます」

「あら、朝から精が出るわねぇ。ミティア？」

一人が目敏くディオンの手元に視線をやる。

「えぇ、セリさんがミティアの漬物が食べたいといっていたのでその下準備に」

と応えればきゃあ、と一同から歓声があがった。

「やだもう、セリレイネウスさん愛されてるわねぇ」

「本当、うらやましい！こんなに尽くしてくれる旦那なんて滅多にいないわよぉ」

「うちの旦那にも見習って欲しいわ」

「爪の垢でも貰っておく？」

「無理よ～！あのボンクラに効くわけないじゃない！」

彼女たちの甲高い笑い声が辺りに響き渡った、と思えばピタリとそれがやみ一人がずいっと前に身を乗り出し聞いてくる。

「ー・・で、どう？あの本、役にたった？」

瞬間、二日前の夜のことが思い出される。あぁ、あの時は本当に凍えてしまうかと…

「……怒られました」

がっくりとうなだれて応えれば一同はそろって「あちゃー」という顔をして見せた。

「う～ん…セリレイネウスさんには合わなかったかしらね」

「すいません、折角皆さんにアドバイスを頂いたのに」

「いいのよ、そんなに気にしないで頂戴な！」

「そうよ！それにこれっぽっちのことであきらめちゃ駄目よ～！」

「そうそう！あともう一押し！」

村のご婦人方はこの恋路に実に協力的だ。

当初はディオンのその外見にほだされるものも多々いたものの、普段色気の「い」の字も出てこないミステリアスな村人のセリに降って湧いた男の影、そして彼の並々ならぬセリへの想いー・・邪険にされながらも献身的にセリに尽くすディオンのその姿に、近年の

恋愛小説ブームに乗りに乗りまくっていたご婦人たちの心に火をつけたのだ。

ご婦人たちのエールに胸に熱いものがこみ上げてきた。
ぐっと涙をかみ締め拳を握る。

「皆さん…ありがとうございます！私あきらめません！」

「その意気よ！」

「はい！」

…と家主の知らないところで知らないうちに妙な親交を深めていくディオンだった。

「あっ！そういえばディオンさん、セリレイネウスさんはいらっしゃる？」

「セリさんですか？一刻ぐらい前に村にお買い物にいかれましたけど…」

「あらやだ、入れ違い？」

「気付かなかったわねぇ」

じゃあ戻って探す？と顔を見合わせるご婦人たちに首を傾げる。

「急ぎの御用でしたか？」

「急ぎ、ではまだないと思うんだけどね。マリーネの出産を手伝

ってもらおうかと思って」

名前を呼ばれ、ご婦人たちの中でも一番小柄な女性が一歩前にでてくる。

その腹は大きく膨らみ、実に重そうだ。

「出産、ですか？」

「えぇ、そう」

マリーネは嬉しそうにその腹を撫でた。

「今月が産み月なんだけど、エマさんー・・あっエマさんはシュレイル先生の奥さんねー・・の調子が悪いみたいで」

「いざって時はセリレイネウスさんにお願いしようと思って皆で頼みに来たのよ」

「そうなんですかー・・そうか、生まれてくるんですね」

自然と腹の上を往復する手に目が留まる。

人魚（わたしたち）は卵で生まれてくるから、目の前の腹の中に胎児がいるということが信じられない。

それと同時に生命が生まれてくるということに対しての畏敬の念を強く感じる。

人魚の個体数は少ない、それは子供が多種族に比べて生まれにくい故だ。

だから一族では子供は比喩でもなく正真正銘の”宝”とされ大事に育てられている。

新しい子供が生まれればその海域の一族総出で祭りのように祝いあうし、時には海域を越えて祝いに行くこともある。

「触ってみる？」

じっと見つめすぎていたせいか、そう促された。

マリーネやほかのご婦人たちはディオンのその様子に笑みを向ける。

「いっいいんですか？」

そっと触れる。

布越しだが確かに伝わる小さな鼓動。

命の鼓動が聞こえる。

「セリレイネウスさんにとりあげてもらうとね、頭のいい子に育つっていう噂があるのよ」

「本当ですか！？」

さすがは私のセリさん！…と本人がいたら突っ込みと拳が飛んできそうなことを頭の中で思い浮かべ感動に浸るディオンはそっとその腹をなでた。

「早く、三人にお会いしたいですね」

「えぇ、そうー・・」

……

「……三人？」

「はい」

「えっと…マリーネとマリーネの旦那と子供…？」

「いえ、マリーネさんのお腹の子たちが三人です」

聞こえた鼓動は３つ。

とくんとくんと交互に小気味よくリズムを刻んでいくその音はとても心地い…

「三つ子ぉ！？」

「ちょっと！マリーネ落ち着いて！」

「だって！えっ！？どっどうしよう！嬉しいけどっ嬉しいけど、ええっ！？」

「ディオンさん、本当なの！？」

「えぇ、確かに３つ心音が聞こえましたから」

淡々と説明する傍らでマリーネを中心に年若いご婦人たちは慌てふためくばかりだ。

「わっ私、初産なのにっ！さっ三人も！？」

「とにかく落ち着きなさいよマリーネ！大丈夫よ、カバテさんのとこだって３年前に双子産んだじゃないさ」

「でもでもっあそこは3回目だったし！」

「駄目だってば！そんなに興奮して破水でもしたらどうすー・・・」

ー・・パンッ

小さく、何かがはじけた音。

「……破水したぁぁぁぁぁぁぁ！」

「「「「「えぇぇぇ！？」」」」」

…先ほどまでの和やかな空気は一体何処へやら。

訪問者二人目。3（前書き）

ちょい短め。

訪問者二人目。3

ついていかなければ良かった。
いやそもそも村に下りずに家でおとなしくしておけばよかったのか…あぁしかし、最終的には私のところへ持ち込まれいただろうと考えれば、早いか遅いかだけの違いかと思い至りこっそりと溜息を洩らした。

連れて行かれた先ー・・村長の自宅へとシュレイルと共に赴けば客間用のベッドに寝かしつけられ昏々と眠る一人の男の姿があった。
あれと比べれば少し濃い色の青銀の髪、足元まで伸びたそれはわずかにクセがついているのかウェーブがかっている。
色こそ違えど見覚えのある形の服は紺色で、その下にある引き締まった体躯がなければ男だとは一目ではわからない容貌は…見事なまでの左右対称。
今は開かないその瞳はきっとアクアマリンかそれに近い色の瞳をしているのだろう。

「ふむ」

脈をとっていたシュレイルが顔を上げる。

「問題はなさそうじゃな。気絶してるだけだろうて、すぐに目を覚ますさ」

「…ちっ」

どうせならこのまま目覚めないままでいれくれたほうが面倒くさ

くならないですみそうだったんだが。

「ん？どうかしたかい」

「いえ、お気になさらず」

おっと思わず舌打ちしてしまっていたか、失敬。

眉間に皺がよりそうになるのを堪えていると後ろで見守っていたゼバッシュが声をかけてくる。

「おう、それでどうだいセイレイネウスさん。やっぱこの兄ちゃん、おたくの旦」

「同居人です」

「まぁいいじゃねぇか、細かいとこは気になさんなってー・・で、やっぱディオンの兄ちゃんの血縁かなんかかい？」

これ以上厄介ごとが増えるのは御免だ、違います、と断言するべきだろう。

だが私は、

「そうかもしれませんね」

と応えることにした。

同族であることは間違いないだろう。

もしかしたら種族は一緒でも彼とは違う海域の人魚かもしれないー・・だがここいらの海で人魚が観測された記録はない。

ということはだ、彼のいた一族の人魚ないし身内である確率は高

いだろう。
そしてその人魚がわざわざ彼と同じように人の姿になって彼のいる陸に上がってきた…それはつまり、つまりだ。
（”お迎え”が来たと考えるべきだろうな）
よくよく考えればこの第二の訪問者は、あれとは違い私にとって不利益な存在ではないんじゃないだろうか。
やっと来たかー・・と思い至れば、先ほどとはうってかわって早いところ目覚めてくれないかという気が焦る。
そんな私の切実な願いが通じたのかそれから少しもしないうちに「うっ…」という掠れた声が聞こえた。
「おい、大丈夫か？」
「ここ…は…」
うっすらと開けられた瞳の色はアクアマリン…というよりも瑠璃に似た色をしていた。
辺りを確認しようとその目がせわしなく辺りを彷徨う。
「痛むところはないかね？気分は？」
「水を…」
「わかった」
シュレイルが枕元に用意してあった水差しを手に取ったので、寝

たきりのままで動かない男の頭を少し持ち上げた。
ごくりごくりと水を嚥下していく…慌てて飲んだせいか途中、咽たりもしていたがコップ3杯の水を飲み干したところで満足すると、男の目が周囲を探るように動いた。
そしてそれはセリの所でひた、と止まると男はくわっと目を見開いた。

「お前っ何故姫の匂いがー・・うわっ！」

（当たりか）

飛び掛りそうな勢いだったのでそのまま横によければ、案の定体勢を崩した男がベッドの上から転がり落ちたー・・頭から。

「〜・・」

「おいおい、無理はしちゃいかんぞ」

「やっぱ知り合いだったかー」

「のようですね。少し彼と話がしたいので席をはずしていただいても宜しいでしょうか？」

と、お願いすれば二人は何の疑いもなく部屋を出て行ってくれる。

「さて…おい、いつまでそうやっているつもりだ」

「〜〜〜・・っ、誰のせいだとっ」

おでこと鼻の頭が見事に真っ赤に染まっている。

「青銀の足元まであるまっすぐな髪、アクアマリンの瞳、お前と同じぐらい顔が無駄にいい男を知っているか？」

ガバッと男の体が跳ね上がった。

その目は不信に満ちている。

「お前何者だ…っ！？」

「まぁ落ち着け、お前の言う”姫”なら私の家にいる」

「なっ！？」

こりもせず飛び掛ろうとしたので今度は軽く脚で押し返してやる。

力が入らないのか男の体はいとも簡単にベッドへと倒れこんだ。

「一つ確認させてもらおう、お前はあれを迎えに来たのか？」

「…だとしたらどうする」

殺気に満ちた瞳がこちらにむけられるが…なに、魚類ごときに負ける私ではない。

「いや、なら歓迎するよ。私としても早いところアレを連れて行ってもらいたいからな」

「？」

思っていた言葉が返ってこずに拍子抜けしたような、だがまだ何か裏があるのではないかという顔で男はこちらを見てきた。

疑うのは悪いことではない、何事も素直に鵜呑みにするのは子供か、愚か者のすることだ。

「すぐにでも会わせやりたいものだが・・・まぁ少し休め。その様子じゃまだ歩くのもままならないだろう？」

「そんなことはー・・」

ないといいたいのだろうが、実際に体に力が入らないのか悔しそうにぐっと息を詰めた。

「半日ここでゆっくり寝ていれば家に連れて行ってやるよー・・それよりあいつをこっちに連れてきたほうが…」

「大変だセリレイネウスさん！」

ゼバッシュが部屋に転がり込んできた。

「どうかしましたか？」

「エヴァンの嫁が産気づいた！今セリレイネウスさんの家にいるらしい」

「家に？」

あぁそういえば頼みに来るとか言っていたな…しかし何もこんな時に、いやいやそんなことといっている暇はないか。

「それに何かよくわからんが三つ子だとかなんとか」

「三つ子！？」

「とっとにかく、先生は俺が担いでくからセリレイネウスさんもー・・」

「わかりました、急ぎましょう！」

本当に三つ子なら無事に生まれる確立も一人産むよりも非常に低くなるし、母体への影響もないとは言い切れない、最悪母子ともに危険な状況に陥ることもありえる。

急いで家に戻って諸々の薬剤や機材の準備をしなければ…

「おいっ」

部屋を飛び出ようとして、ぐいっと腕を引かれた。

…あ、忘れてた。

「悪いな今お前に構っている暇はない、寝ていろ」

「待て」

「あぁそうだ、あまり自分を”人魚”だとはいわないよう気をつけることだー・・以上」

じゃあな、とそのまま振り返ることなく私は全力疾走で自宅へと走った。

後に残された男といえば、手を伸ばしたままの格好でしばらく唖然とベッドの上で固まっていたという。

訪問者二人目。3（後書き）

このままだとセリとディオンの絡みは当分先になりそうな気がします…

生まれる命

初めてお産に立ち会った時のことだ。
その時はとても難産で、最初の陣痛が起きてから出産までに二日ほどかかった。

段々と間隔が短くなってくる陣痛に、汗を吹き出し、顔は青ざめ、その痛みに耐え切れないと涙を流す妊婦。
それを見た時、思ったものだー・・そんなに苦しい思いをしてまで果たして生む必要はあるのか？

場合によっては母子ともに命を落とすとも言う、まさに命をかけたその行いに甚だ疑問を感じえずには終えなかった。
「生」を生み出すはずのその行為は同時に「死」と隣り合わせにあるー・・それを経て得られるモノとは一体何なのだろう？それを経て生まれてきた「私たち」には一体どんな価値が存在するのだろうか。
脳裏にぐるぐると駆け回る疑問の嵐の中、その時は訪れた。

その時の感情をどう言い表せばいいのか。

血にまみれ、およそ人とは呼べない皺だらけの顔と体、到底、美しいとは思えないその光景が美しいと感じさせられたのは何故だろう。
それは自分の存在を世界に知らしめるように高らかな産声を上げ、泣き喚く赤ん坊の姿のせいだろうか。
それとも憔悴しきっても尚その腕を伸ばし、生まれたばかりの赤

ん坊を愛しげに抱き穏やかな笑みを向けた母親の顔を見たせいだろうか。

あぁ、これが”生む”ということ。

理屈など必要ない、ただその腕に抱きたかった、だから生んだー・・それだけ。

その時はただただその光景に感動したのと、無性に遠く離れた土地にいるはずであろうあの美しい母に会いたくなったことを深く覚えている。

「セ…レイ…」

「…あ」

自分を呼ぶ声にふと我に返る。

何をしているのか、こんな時に思い出に浸るなど…

一・・否、こんな時だから、か。

何度目かの苦痛を乗り越えたマリーネは体力の限界が来ているのか、顔は痛々しいほどに青ざめておりその喉から呼ぶ声は擦れていて聞き取りづらい。

涙を湛えた瞳が不安げに揺らめいて私を見上げてくる。

「セリ…イネウ、スさん…わ、たしの…赤ちゃん、は…？」

「大丈夫ですよ」

不安でたまらないとばかりに彷徨い上げられたその手を握る。
「もう少し、もう少しだけ頑張りましょう、マリーネさん」
…その手を必要としていたのは私のほうかもしれない。

＊

少しシュレイル先生と話があると言って、集まっていた村のご婦人たちに後を任せると二人で家の外へと出る。
そこにはマリーネの夫のエヴァンを筆頭に、村の男衆が薪を囲って酒を飲み交わしていた。
小さい村だ、男衆は何かと理由をつけてはこういった席を設けるのが好きらしいー・・まぁ今回はそれだけではないだろうが。
こういう時、男はただ待つしかない。初子ということもあってか皆エヴァンのことが心配なのだ。
「エヴァン、少し良いか？」
シュレイルが声をかければ男衆にからかわれていたエヴァンが席を抜け出して駆け足でこちらによってくる。
「先生、セリレイネウスさん」

酒を飲まされていたのか少し顔を赤くしていたエヴァンだったが、二人の様子にさっとその表情を改めた。

「…何か、あったんで？」

「エヴァン、腹にいた子供はやはり三つ子じゃったよ」

「本当ですか！？」

「ですが、少々問題が」

喜色にが混じる様子のエヴァンを遮り私は言葉を続ける。

「このままでは母子ともに危険な状態に陥ることは間違いないでしょう」

「そんなっ！？」

「魔術師でもおれば話は別じゃがな。自然分娩ではそれだけリスクが伴う」

王都（カマンサ・レール）などでは魔法の力で母子の力を補助し分娩を助ける、という方法も近年確立しつつある。

が、それは高等魔術を学んだ魔法師にしか請け負えない上に金銭面的なことを考えれば到底この片田舎の村では雇うことなど不可能。現状、貴族階級以上の家庭にしか許されていないといっても過言ではない。

シュレイルと共に何度もマリーネを診断した結果は非常に…残念

だというしかなかった。

腹の中には確かに三つ子が息づいて、外へ出るのを今か今かと待ちわびている。

だが、それは叶うことはないだろう。

多胎児は出生率が低いー・・例え生まれ出てきたとしても死産だったり、その後の発育状況というのはおよそ芳しくない。

多胎児を腹に抱えていたのだからこの十月、普通の妊婦よりも彼女の体への負担は酷かったはずだ。

それを持ち前の気丈さで耐えていたマリーネには称賛すべきものがあるが、だがそれももう限界に近い。

「どうにかならないんですか！？」

「エヴァンさん、ここで選べる選択肢は3つです。子をとるか、母体をとるかー・・両方ともあきらめるか」

「そんなっ」

「エヴァン、非情にも聞こえるだろうがな、耐えてくれ」

「子供をとるなら母体の腹を開いて直接取り出します。だが、母体の体力が持たないかもしれない」

努めて冷静に聞こえるように私は話す。

「母体を助けたいならこのまま薬で分娩を誘発させます。が、子供全員が無事に生まれてくるとは限らない」

このまま待てば彼女の体力が持たない。

「エヴァンさん、これはあくまで確立の問題です。だがこれだけは言える、そのどちらも選ばずにこのまま自然分娩を待ってもー・・確実にどちらか一方、もしくは両方の命がなくなる」

私だって助けてやりたい。生ませてやりたい、生まれてきて欲しい。

ー・・それでも世界はそんなに甘くはないということは知っている。

世界は時として残酷だ…

「エヴァン」

いつの間にか、項垂れるエヴァンの後ろには薪を囲んでいた男衆たちが集まっていた。

皆、沈痛な面持ちで彼を取り囲む。

彼の左隣にたった村長が顔の皺を更に深くして聞いてきた。

「先生、本当にそれしかないのかい？」

「あぁ…すまない」

「いや、違う、先生やセリレイネウスさんのせいじゃねぇよ…こればっかりは…」

シュレイルの謝罪をエヴァンは制した。

「少し…時間をくれ、考えさせて欲しい」

「わかりました」

きっと彼の中ではもう答えは決まっているに違いない。
だがそれを受け入れるまでの時間が欲しいのだろう。

そっとシュレイルを見やれば「ここはまかせておけ」と頷かれたので私もその場から少し離れる事にした。
家の裏庭の端に申し訳程度に建てられた薪小屋まで行くとその壁にもたれかかる。
張り詰めていた気を紛らわすように一息吐けばすぐ側に近づく一つの気配。

「…何だ？」

顔を向ければ案の定そこにたっていたのはディオンだった。

「セリさん…」

「どうしてそんな顔してる？」

ディオンの顔は今にも泣き出すのではないかというほどに歪められている。
彼もさっきの会話を聞いていたはずだー・・エヴァンの気持ちに感化されたかと思いきや、彼は意外なことを口にした。

「セリさんが悲しそうなので」

「私が？」

何故、と問いかけようとした言葉は続かなかった。

新たな闖入者が合ったのだー・・それも家のほうからではなく真裏の山の中から。

「ー・・姫！見つけた！」

村長の家に置いてきたはずのもう一人の人魚がそこにいた。

生まれる命（後書き）

作中の出産うんたらについては付け焼刃の知識ですのであしからず。

「珊瑚の裾の…」

山の木々の間から現れた男に隣で驚きを隠せないディオンの呟きが聞こえる。

身内かごく近い位置にいたものかー・・私の推測ははずれではなかったということとか。

…しかし人魚というものは総じて空気が読めない生き物らしい。

何処をどう通ってきたのかは知らないが体のあちこちに擦り傷や葉っぱやら何やらをつけている男は、ディオンの姿を見咎めるや否やその腕を掴み連れて行こうとした。

「帰るぞ、姫！」

「待ってください！何故貴方がここに」

「連れ戻しに来たに決まっているだろう！」

「嫌です！長に何を言われたかは知りませんが私は帰りません！」

帰る帰らないの押し問答を繰り返す二人。

まぁ、それはどうでもいいのだがもう少し静かにやってもらえないだろうか。

「私は私の意志でここに来たのです！もう幼体ではありません！放っておいてください！」

「こんな獣臭いところに置いていけるか！大体人間の何処がいいと―・・・」

「五月蝿い」

「ぎゃっ」「うっ」

ヒートアップすると共に大きくなる声量に歯止めをかける。
向こう脛を蹴られ蹲る二人。痛いだろうな、あぁ痛くなるよう蹴ったのだから。

「な、何を…」

「ひどいですセリさん、何で私まで…」

「五月蝿いといった。人が来る、少しおとなしくしていろ」

痛みに悶える二人を無視して振り返ればシュレイルに伴われてやってくるエヴァンの姿。
その顔は今にも倒れるのではないかというぐらい青褪めていているものの、瞳には確固たる決意が伴っていた。

「セリレイネウスさん」

「…決して自分を責める必要はありませんよ、エヴァンさん」

「はい…―・・妻を、マリーネを助けてください」

深々と頭を下げるエヴァン。
顔を見ることは出来ないがその体は耐えるように小刻みに震えている。

「わかりました、全力を尽くします」

「お願い、します」

子供が無事に生まれてくる可能性もある、希望を持てー・・とは言わない。

”希望”をもって挑んだとき、その後に訪れるのが必ずしも望む結果ではなかったときに訪れる”絶望”は計り知れない。
私はそんな無責任なことはいえない、いうほど愚かでもなければ賢くもないのだから。

「すぐに行きますので」

「わかったー・・さっエヴァン、行こう」

二人の姿が家の表へと去っていくのを見届け、私は放っておいた後ろを振り返った。

「と、いうわけだ。これから忙しくなる、話し合うのはいっこうに構わないが決して騒ぐな、いいな？」

余程向こう脛を蹴られたのが効いたのかディオンだけでなく、もう一人の人魚もおとなしく（というよりは渋々だったが）それに頷いた。

まぁ騒いだら騒いだでその時点で強制的に黙らせればいいだけの話だが…とりあえずはこの場は大丈夫だろうと結論付けると中に急いで戻ろうと踵を返すが、

「あの、セリさん」

俯き加減で何やら考えていた様子のディオンに呼び止められた。

「どうした？」

「私にも何かお手伝いさせてください」

「何を…」

顔を上げたディオンの顔は悲しげに歪められている。

何故そんな辛そうな顔をしているのか。

「役に立たないのはわかっています…何でもいいんです、お手伝いをさせてください」

「お前、」

「お願いですー・・邪魔にならないようにします！せめて、側にいさせてください」

「何を言っている姫っ！」

だが私が何か言うよりも前に、隣にいた男が口を挟んできた。

「馬鹿なことを言うんじゃない、帰るぞ！」

「嫌です！帰りたければ貴方一人で帰ってください」

「だからお前たち静かにしろと…」

何度言えば分かるのか。学習能力がないのかこいつらには…

「そうか！あんな穢れた臭いがする所の近くにいるからきっと当てられているんだな？わかった、場所を移してー・・」

「…穢れた？」

男の言葉には明らかに悪意がのせられている。

そして彼の眼がさしているのはー・・私の家。

鸚鵡返しに呟いた私を憐憫をこめて、いや、蔑みの目で見て笑った。

「人間如きにはわかるまい、この臭いー・・あそこからは獣の臭いと、血の臭い…おぞましい死臭がする。穢れの臭いだ、忌々しい穢れ」

目に入れるのも煩わしいとばかりにさっと視線をはずした男はディオンへと目を向ける。

「我々人魚は何よりも穢れを厭う、忘れたわけではないだろう？ただでさえ地上は愚かな”人間”という種族のせいで争いの絶えない穢れの蔓延る大地だというのに、こんな”穢れ”の側にいては危険だ、姫」

つまりは何か、私の家から”穢れ”がー・・生まれてくる子供たちと生死の境を彷徨いながらも頑張っているマリーネが”穢れ”ているというのか、この男は…

（ふざけるなっ！）

ふつふつと身の内に湧き上がってくるのは怒りだ。

確かに、男の言うことには一理ある。
穏やかな海の世界に比べれば、日々どこかで争いの耐えないこの大地は”穢れて”いるのだろうー・・そしてそれを生み出す原因となるのはいつも”人間（わたしたち）”だ。

だがそれとこれを一緒にするなんて…

握り固めていた拳に更に力が入る。
もう限界だー・・怒りの沸点に達したところで、

「さぁ、私と一緒にかえー・・っ」

男の左頬に拳がめり込み、長身がぐらりと後ろへと崩れていった。

「……あれ？」

残念ながら私の右手はまだ私の横にある。
なら、今こいつを殴ったのは…？

「ふざけるな！」

崩れた男の目の前で、怒りに身を震わせ立ち尽くしているのは

「ディオン？」

「ひ、姫…？」

殴られたほうはといえば、状況が今ひとつ理解できていないのかただただ呆然と彼を見上げるしかない様子だった。

「何が”穢れ”ですか！そんなわけがない！」

彼が怒ったところを見るのはこれで二度目。
だが以前とは違って、ここまで感情あらわにしているのをみるのは初めてだ。

「これが穢れだというのならー・・」

それは倒れる男も同じなのか…激昂する彼を前にして何も言えないでいる。

「私は”人魚”じゃなくていい」

「おっ、おい！？」

途端、彼は私の腕を掴みずんずんと家へと歩いていく。
先ほどまでふつふつと湧いていた怒りも急速にしぼんでいくー・・
いや、決してなくなったわけではないが突然の出来事ゆえに行き場をなくしたといったほうがいいだろうか。

「おい、ディオン」

「セリさん、私は死臭なんて感じません」

「ディオン？」

どうにも様子がおかしい。

裏手から家の中に入れば右往左往していた村の女たちがディオンの姿に目をむく。

「ちょっとディオンさん！男は先生以外立ち入り禁止だよ！」

近代では医者の力を必要とする出産も多くなってきているため医師が男の場合を除きではあるが、”出産”は昔から男の立ち入りを許さない女の”領域”だと決まっている。

「すみませんー・・ディオン、すぐに外に出ろ」

服を引っ張って連れ出そうとするが彼は頑として動こうとしなかった。

「セリさん」

「お前は何がしたい！」

小声で問い詰める。

「頼むから邪魔はしないでくれ、早くしなければ助かる命も助からない」

「セリさん、私は両方とも助けたい」

「…それは」

いわれなくてもわかっている。それを私が望んでいないとでも思っているのだろうか、この男は。

「出来るならそうしている」

無理だから。

出来ないから私はー・・

段々と苛立ちが募る。

「邪魔をするな、出て行け」

「いいえ、出て行きません」

「お前っ」

「ー・・皆さん、お願いがあります」

語尾が強くなる私を遮るようにディオンが声を張り上げた。

「外に出ていただけませんか？」

「なっ」

何を言っているんだこいつは。

村の女たちも何故？という表情を隠さない。

呆気にとられる私にディオンが耳元で小さく囁いてくる。

「私は助けたいー・・人魚だってバレなければいいでしょう？」

「何を…」

ディオンは先ほどまでとは打って変わって穏やかな表情をその顔に湛えながら、整いすぎたその顔でこういった。

「私は王都の魔術師（カマンサ・レール）です」

海の奇跡

突然の爆弾発言に戸惑う女衆を「詳しいことは後でお話しますのでセリさん以外は外へ出ていてください」と有無を言わせず皆を外へ追い出すと、ディオンがこちらを振り返った。

「…といことですので」

「何がだ！」

ガラにもなく混乱する私は彼の胸倉を掴み問い詰める。

「何を考えている！？」

「勿論、彼女たちを助けることを」

「―・・・っ！？」

至極真面目な顔で彼はそう言うのだ。

その目は冗談を言っているようには到底見えなかったー・・だから私はそれ以上言葉を重ねることができずに、息を詰まらせるしかなかった。

「セリさん、側にいて手伝っていただけますか？」

”希望”などという曖昧なものに縋るつもりは毛頭ない。

私が求めるのはいつも確実な”結果”にたどり着く手段だけ。

だけど、今はー・・・

「わかった」

…断じて彼の真摯な瞳に動かされてなどではない。
私らしくはないが、少しの”可能性”に賭けてみようと思っただけだ、それだけ。

部屋の扉に内側から鍵をかける。
外から部屋の中が覗き込めない様、閉められていたカーテンの上から更にあまっていたシーツをかぶせ、どこからも部屋の中を覗き込む隙間がないようにした。

寝台の上で眠るマリーネは今は落ち着いているようだ。
暫く目を覚ますことのないよう、用心のため体に害のない薬草で作った安眠作用のある香を枕元で焚きつめる。

「私が何かすることはあるか？」

ディオンが指示したことといえば部屋を外部から封じることと、一桶の水を用意して欲しい、とのこおだけ。
寝台の横で静かに立ち尽くすディオンに声をかければ「いいえ」と首を振られた。

「…私も外に出ていたほうがいいんじゃないか？」

これからディオンが何をしようとしているのか気にもなるし、同時に訝しんでもいるー・・が、彼が”魔術師”だと名乗ったということは何かしら”魔法”を使うということだ。
人魚を含む”幻想種(レジンヴァラ)”の使う”魔法(ちから)”は人間(私たち)が使う魔法(それ)とは根本的な性質が違うのだが…まぁ”人魚”の力を使って何かをするのには違いない。
魔法を使うときには集中力がものをいう、と聞いたことがあるからこれ以上私がここにいるのはかえって彼の妨げになるのではなかろうか。

「いえ、側にいてください」

横に立つ彼の右手が私の左手を握る。
こんなときに何をー・・と思いもしたが、彼の目はただ一心にマリーネの腹部へと注がれている。
その横顔は真剣そのもの。彼と出会ってから始めて目にする表情だ。

（…この短時間でこいつのいろんな顔を見ている気がする）

「はじめます」

手を繋いでいないほうの彼の左手がすっと前に伸ばされた。
その動きを目で追えば、途端その指先が青白く光はじめる。

『――――――

不快ではない…むしろ心地と感じるその音は、笛の音に近い。
部屋中が音に満ち満ちた。

『――――――――・・、――――・・、――――――――――――――――・・』

確かに耳に届いているはずの音は頭の後ろを突き抜けるように通っていく。
紡がれているのは言葉に違いないが、それが何なのかを理解することはできない。

『――――――――・・』

伸ばされていた手からこぼれる青白い光は、生き物のように動きその範囲を広げていっている。
そしてそれに呼応するかのように、足元に置いた水桶の水面が波立った。

「水が…」

桶に入っていた筈の水がくねくねとその体を伸ばし寝台に眠るマリーネを取り囲むように円を作ってゆく。
光と混ざりあい細い円を作った水の表面がキラキラと光を反射して輝く。

(何て美しい…)

部屋中が青に包まれている。
まるで…そう、まるで海の中にいるのではないか、と錯覚を起こす。

『――――・・、ソルシアータ　デマルーシェ　ラゴ　ヴェデンチェリニア』

いつの間にか、音とだけしか聞こえていなかった彼の声が”言葉”に変わったのに気がついた。

（これは…古語？）

遠い遠い、それこそ神話の時代といってもいいぐらい昔に使われていた古語。神殿では聖句とも呼ばれる言葉。

―・・ソルシアータ　デマルーシェ　ラゴ　ヴェデンチェリニア

海の鼓動よ　聞こえるか

ー・・ツェ　マドリグエ　ヴェ　デマルーシェ　オーサ　レマンテ

新たなる鼓動の心音を

古語はもっとも古き時代からこの大地に、この世界に息づく精霊（かれら）に話しかけるために必要なものだと聞く。

ー・・ヌージュディッシュ　コウレ　コンサンティールウィ　ボーテ

彼の命に祝福を　導きを

ぐるぐるぐるぐると円を描いていた水がその輝きを増し、速度を上げる。
時折、円からはじき出される水滴は落ちることなく宙を無数に漂い、夜空に浮かぶ星を思い浮かばせる。

ぎゅっ、と私の左手を握る力が強くなった。
あぁそうか、と隣に立つ彼を見上げる。

この幻想的な輝きの中でも陰ることなく、さも彼自身がこの神々しい術の一部といわんばかりの様子だというのにー・・・

（恐れているのか）

失敗してしまうことを。
そんな様子を微塵も感じさせない横顔なのに、彼の手は私に縋りついてくる。

魔法やそういった類にはあまり強くない私でもわかるー・・・彼は精霊（かれら）に愛されている。
慈愛に満ち足りているこの空間で失敗するはずもない。

…だというのに、彼は恐れているのだ。

『セリさん、私は両方とも助けたい』

その言葉に偽りはなかったのだろう。
ここまでの力を行使して失敗するはずなどない自信も彼の中にはあっただろう。

だがそれでも恐れは消えない。だってそれが

（命を救うということ）

ソレを知っているからこそ、彼は恐れる、縋ってくる。

ならばそれを受け止めてやろうと、支えてやろうとその手を強く握り返す。

『ー・・・ヌージュディッシュ　コウレ　コンサンティールウィボーテ』

一際目映い光が溢れ、視界が青白く塗りつぶされた。

海の奇跡（後書き）

古語は適当なのであまり突っ込まないでください（笑

清々しい朝と失敗

山の向こう側が白んでくる頃になっても、麓の村からは男衆の声が響いてくる。
あれからずっと飲み続けているに違いない。

「皆さん、お元気ですね」

音を立てないように扉を閉め居間へと入れば、少し眠たげな顔でディオンが窓辺に立っていた。
山に谺(こだま)して笑い声がここまで響いてくるのだからよっぽど騒ぎ明かしているのだろうー・・まるで春女神(ヴィシュオーネ)の祭り並だ。

「そうだな。寝てなかったのか？」

「はい」

「どうせ今夜も飲み明かすに違いないんだ、今のうちに寝ておいたほうがいい。こういう時はどうあっても一晩は帰してもらえない」

「それならセリさんも休んでください」

「私はいい」

「じゃ私も大丈夫です」

どんな理屈だ、と苦笑し椅子に腰を下ろす。

「お茶淹れますね」

「ん」

手にしていた羊皮紙にペンを走らせれば、すぐに湯気のたったお茶が置かれる。

「マリーネさんはどうですか？」

「実に順調だよ」

「よかった」

カップを手にとって口元に運ぶ手前で、ふと思い立ちそれを彼に向かって掲げて見せた。

「ありがとう」

何故お礼を言われたのかわかっていないのだろう、ディオンがきょとんとした顔でこちらを見下ろしている。

「何て顔してる、一番の功労者だろう」

「え？あ、あぁ！」

やっと何に対してお礼なのか合点がいったのか彼は頷くと同時に首を振った。

「でもセリさん、私は」

「”何もしてない”とか言ったらぶっ飛ばすぞ。お前は私に出来ないことをやってくれた」

「…私が”助けたい”と思った、ただそれだけです。お礼を言われるようなことではないですよ」

「例え気紛れや、一時の同情によって生まれたものであってもお前のその”思い”で救われた命がある。

私の感謝はそれに対する感謝だ、素直に受け取っておけばいいんだよ」

ほら、ともう一度カップを掲げて見せれば、ディオンもそれに習って自分のカップを傾けた。

「では、私も貴女に感謝を。セリさん、貴女がいてくれたから私は彼女たちを救うことができた、ありがとうございます」

互いのカップが音を立てて触れ合う。

少し冷たい朝の空気の中、燦々と太陽の日差しが入りこんでくるのに目を細めて私はカップのお茶を飲み干した。

「実に気持ちのいい朝だ」

「……」

「……」

と、一つの達成感を得て清々しい朝を満喫していたのは半刻ほど前。

母子のために一晩火をおこし続けていたせいか薪が随分と少なくなっていることに気付き、朝食をディオンにまかせて新しい薪をとりに家の裏手へむかったー・・のはいいのだが。

「……」

「……」

微動だにしないそれを目の前に、私も暫く動くことが出来なかった。

多分起きてはいるのだろう、少し焦点のあっていない目は若干濁っているようにも見える。

まさに放心状態といっていい様はいくら見目の整っている容姿でも気味が悪い。

さもあらばまるで蝋人形のようだ。

実を言うとこれに関しては少しばかりー・・いや、完全に忘れてました。

（さて、どうするか…と考えていても時間の無駄か）

そろっとその横を通り抜け新しい薪を何本か手に取るとそのまま踵をかえしー・・

「姫、何故なんだ…」

「…ちっ、気付いたか」

何故？そんなのこっちが聞きたい。

何故こいつの右手は私の服をがっしりと握っているのか誰か教えてくれ。

「おい、離せ」

ぐいっと体ごと後ろに仰け反ってみるが中々どうして外れない。

無駄に引っ張りすぎて服が破れるのなんて真っ平ごめんだ。

放心状態だった人魚がその死人のような青褪めた顔をこちらに向けてくる。

「何故姫はお前のような人間のところに留まる？」

「知るか、こっちがお願いしているわけじゃない」

「嘘だ！」

「誰がこんなことに嘘などつくものか、阿呆」

と、罵ってみるものの残念なことに人魚（こいつ）の耳には届いていないようだ。

悲壮な顔を更にゆがませ、一方的に嘆きは続く。

「第一人間などのために我らの力を行使するなどあってはならないことなのだ！何て愚かなことを…」

「そうかそうか。じゃあれが記念すべき第一号だ、おめでとう」

「”人魚じゃなくてもいい”だなんて！人間！やはりお前が何かしたに決まっているではないかー・・！！」

…あぁ、鬱陶しい。

「やかましい、朝から騒ぐな！」

「ぐっ」

生憎と両手がふさがっていたので、座り込んだままの人魚の脳天に踵を落としてやる。

絶妙な位置に頭があったおかげか実に綺麗に決まったので、少しすっきりした。

「妙な勘繰りはやめてもらおうか。私は何も強要などしていない」

…むしろ早々にお帰りいただきたいのが現状なのだが。

脳天に決まった強烈な痛みからか、目尻に涙をため唸りつつもそれでも尚、人魚はしつこく食い下がってきた。

「ならば何故姫はー・・！？」

「…何故何故と一々聞かないと分からないのか、お前は」

「な、なんだと！？」

ー・・さて、突然だが私はそう気が長いほうではない。
まともな対話が出来ないのであれば、大変遺憾ではあるが、実力行使という名の手段に打って出るしかないだろう、という結論に至った私は間違っているだろうか？
答えは否（ノー）だ。むしろそれ以外の答えはいらない。
そもそも人の話を聞こうとしない奴が悪いのだ。

「子供じゃあるまいし少しは自分の頭で考えてみろ」

げしっ

「〜・・っ！！」

ぐりっぐりっぐりっ

「いいから、黙って、聞け」

脳天に突き落としたままだった踵に力を込める。

「いいか？様々な観点から思考することによって脳は活性化され進化していくー・・幻想種（レジンヴァーラ）のお前たちだって、人間（わたしたち）だってそこは変わらず一緒だ。
ならできるはずだ、そうだろう？」

それとな、と二の句を告げる暇を与えないように私は言葉を続ける。

「”人間なんぞ”のために力を使うのは確かにお前たちにとっては矜持を傷つける行為かもしれない」

ふと、空気が揺れた。

いつの間にきたのやら…この一週間ですっかり馴染んでしまった後ろの気配に振り向くことなく、私は目の前の人魚への”説教”を続けた。

「だがな、生まれてくる”命”を救うために力を惜しまず使った彼に”愚か”などという言葉はふさわしくないと思うよ」

まぁ人魚（かれら）には人魚（かれら）の掟や決まりごとがあるのだろうからその点から見れば、もしかしたら今回のディオンの行為は咎められてもしようがないものに値するのかもしれないのだろうが。

「漸く落ち着いたところだ、この後どうするかはお前たちでしっかり話し合えばいい。まぁ円満に仲良く海に帰ってくれるのが一番いいんだが…だがもし彼が今回の事で咎めを受けるのであれば」

視界の隅に朝日を浴びてキラキラと光る青銀を捉えた。

「私は彼を海に返すつもりはないよ」

ここで振り返っていつも以上のテンションで騒がれたら疲れるな…と思いながらも振り返れば意外にも落ち着いた様子でー・・・というよりは少し驚いている感じのディオンが立っていた。

「いいんですか、セリさん…？」

「ほとぼりが冷めるまでだがな」

一生ー・・は少し考え物だが、このまま強制的に海に返して彼が罰でも受けでもしたら後味が悪すぎる。
それにあの料理の腕は惜しい…いやいや、別に胃袋から掌握されているわけでは断じてないぞ、うん、断じて違う。

「珊瑚の裾の、」

膝を追ったままの人魚に視線を合わせるように、ディオンもまた地に膝をつく。

「私は、帰りません」

「姫ー・・っ！」

「貴方に言った夕べの言葉に嘘偽りはありません、全て私の本心です。
最初は…セリさんの側にいられるだけでよかった。
でも、今の私にはこの村の”人間”たちも大切な人に思えてしょうがない。
まだほんの少ししか触れ合っていないけど私を受け入れてくれるこの村の人たちが私は好きです。
ここで、この陸で一生懸命に毎日を生きている”人間”だちが好きです。
ー・・だから、帰りません」

一言、一言に込められた彼の心の底からの思い。
それは私の胸にもしっかりと響いてくる。

そして海から来たもう一人の人魚の胸にもきっとー・・

「本気…なんだな」

「はい」

ディオンは笑みを湛えて立ち上がると今度は私の方へと向き直った。

「セリさん、炊事洗濯なんでもやります。だから、もう少しだけ一緒にいさせてください」

いつもの少し情けない彼とは違う顔つきで、お願いします、と頭を下げられては先ほどの手前もあってか頷くしかないだろう。

「……分かった…姫がそこまで言うなら…」

もう一人の人魚もどうやら納得したようだ。

まさに意気消沈という言葉が似合う風体だなー・・少し気の毒でもあるが。

まぁ何はともあれこれで一先ずは、万事解決と

「私も残るぞ！」

…ならなかった。

「却下だ！」

何ていったこの馬鹿人魚。

「ー・・な、何故貴様に却下されねばならない！」

先ほどまで私に足蹴にされていたのが効いているのか少しばかり怯えた様子で抗議の声が上がる。

「これ以上私の周りで面倒ごとを増やすな！」

激昂するセリの横で、ディオンが笑みを湛えたまま（目は笑っていなかったが）冷たい口調でそれに加勢する。

「珊瑚の裾の、セリさんが困ってるじゃないですか、さっさと帰ってください」

「ぐっ…いいやコレばっかりは姫の頼みでも聞けはしない！連れ帰れないなら側で見守るのが私の使命！！」

「そんな使命なんぞ捨ててしまえ、この馬鹿人魚」

「馬鹿人魚だと！？さっきから本当に無礼な人間だな！私には”珊瑚の裾の緑石の子”という立派な名があるんだぞ！」

うわ、面倒くさい。

と眉をしかめれば、珊瑚のなんちゃらは傲慢不遜な態度を取り戻してふふんと鼻で笑ってきた。

「この美しい響きが分からぬなど所詮野蛮な生き」

「じゃ、レガリア」

「なっ！？」

「そんな面倒くさい名前で一々呼べるか」

ちなみに”レガリア”は昔、母が飼っていた気性の荒いオス猫だ。あれは母以外には懐かなくて父も私もよく手を噛まれたものだった…と思い出に少し浸り現実に向ければ、

「ん？」

…どうにも辺りの空気がおかしい。

勝手に名前をつけられて怒っているのか口をパクパクさせ顔を紅潮させているレガリアはわかる、が、何故ディオンまでが慌てふためいているのだろう。

それに心なしかその顔は青褪めている。

「なっ！なっ…！」

「駄目！絶対駄目です！セリさん！」

「何でだ？大体お前らの名前が面倒くさいのがいけないんだー・・・他のも考えるのも面倒くさい、コレが嫌なら馬鹿人魚で通すぞ」

「そうじゃなくってですねー・・珊瑚の裾の！！いますぐその名前は忘れてください！いまのはナシ！！ナシです！！もう”馬鹿人魚”でいいじゃないですか！！」

……

「……ディオン、お前何か隠してないか」

「うぇっ！？」

悪さが見つかった子供のような反応を見せるディオンの顔を無言のままじっと凝視してやれば、彼の顔から尋常じゃないほどの汗が噴出し始めた。

「何を隠している？」

「か、隠してるなんてそんなあるわけが」

「ディオン」

「……すいません」

2オクターブほどさがった私の声色と射殺すような視線に耐えかねたのか早々にディオンが白旗を揚げた。

「その、あの、実は……セリさん、怒らないで聞いてくれますか？」

「怒るようなことなのか」

「いえっあのですねぇ！これは何ていうか私たちの一族の古いしきたりっていうか！その、あれです！人魚だけなんでセリさんたち人間の方々には多分きっと関係ないんですけどっ」

「多分？きっと？」

必死になって言い繕うとするディオンの言葉に眉間の皺がますます深まったところに、ぼそりと別の声が挟まってくる。

「…成体になった人魚に新しい名前を贈るのは求婚を意味する」

「……は？」

その後、しどろもどろになりながらも説明するディオンとぼそぼそと話すレガリアの話をまとめるとこうなった。

曰く、それまでの名前はあくまで仮の名に過ぎず、本質の真名ともいえる名前を持つのは成体になってからだということ。

曰く、”真名”は番（つがい）となる人魚から贈られるものであり（番は生まれたときから決められているらしい）、それは正式な求婚を表すとのこと。

曰く、一度”名”を贈られればそれはその人魚の真名として魂の本質に深く刻まれてしまうとのこと。

「つまり？」

「つまり、その、ですね…結果としてセリさんは二人の人魚に”求婚”をした形になっているというか…」

ごにょごにょと言葉尻を濁すディオン。

「あれで真名になってしまったというのか・・・？」

レガリアが赤面していたのは怒りからではなく、突然の”求婚”に驚いていたからで…

「本来の私の”番”である姫が既に貴様の”番”となっているのには驚いたが…ま、まぁいいだろう。

人間からというのは我らの歴史の中でも前例がないが、私も男だ。求婚を受けたからにはそれ相応の態度で望む事に」

「え、嫌ですよ、私は。セリさんの”番”は私だけで充分です」

「しかし、姫。言霊は絶対だ。それにこの人間の側にいれば私も安心して姫のことを見守っていられ」

鈍い音が二つ同時に鳴り響く。

倒れる長身の男たちー・・その前で怒りに震えている彼女の両の手には薪が二本。

足元にはその手に選ばれなかった残りの薪が散乱している。

「お前らまとめて海に帰れ！！」

朝の山にセリレイネウスの叫び声が響き渡った。

清々しい朝と失敗（後書き）

閉鎖的な人魚の世界だから成り立つ求婚の仕方ですね。
レガリアは猪突猛進型です。

閑話休題ー宴、その夜

セリさんの言うとおり、太陽が海の向こうに傾きかけた頃から村では本格的な宴が始まったようだ。

容態のだいぶ落ち着いた主役であるマリーネさんと子供たちを迎えに来た村の人々に引っ張られて（セリさんは渋々といった感じだった）麓へと降りていけば、村にある小さな広場を中心にいろんな家から運び出したと見える机や椅子がところ狭しと並べられていた。

昨夜からすでに出来上がった男衆が私たちを円の中へと容赦なく引っ張り込む。

「まぁまずは一杯！」

盃を手に握らされそこになみなみと酒が注がれる。

既に出来上がっているその手元は危なっかしく盃からは酒が溢れてしまっていた。

「さぁ！新しい村の一員の誕生に乾杯だ！！」

「「乾杯！」」

「んでもって先生方にも乾杯！」

何度目かの乾杯を繰り返した後、私たちの周りには次々と村人が集まりだしてくる。

「いやぁ、まさかあんたが王都の魔術師（カマンサ・レール）様だったなんてな！」

「目玉が飛び出るかと思ったぜ」

「しかしセリレイネウスさんも人が悪い、そうならそうと早く行ってくれればいいのになぁ」

「何でまたそんな凄い人がこんなとこいいるんだい？」

「馬鹿！野暮なこと聞くんじゃないよ。そこは…ねぇ？」

「セリレイネウスさん命だもんねぇ～」

男たちは私がついた嘘ー・・魔術師だということに興味を抱き、女たちは女たちでそっちの話に花を咲かせては勝手に盛り上がっている。

そっと隣に座るセリさんの顔を見やれば「勘弁してくれ」と顔が引きつっている。

彼女が訂正を入れる前に私は口を挟んだ。

「仕事が原因で少し体調を崩してしまいまして、魔術師としてはお休みを頂いていたんです」

あの後、セリさんに考えてもらった嘘の身の上話を語る。

「暫く自宅で療養していたのですが、たまたま王都にいらっしゃったセリさんのご友人にセリさんのつくる薬はよく効くと教えていただいて…どうせ静養するなら空気の綺麗なところでしたほうがいいと薦められたのでこちらに押しかけた次第なんです」

「あぁそういえばそんな話してたわよね、セリレイネウスさん」

「そうそう、あの時はてっきり不審者か山賊かと思ってたんだが」
「その節は皆さんにご迷惑をおかけしました。どうにも気持ちがはやってしまって…結果、セリさんと入れ違いになっちゃったんですよね」
昔からおっちょこちょいなんです、と言えば周囲からは好意的な笑いが漏れた。
「魔術師だということを明かさなかったのは、今の私ではあまり皆さんのお役に立てないと思ったので…すいませんでした、黙っていて」
と、頭を下げればいつの間にか輪の中に入ってきていたエヴァンが「とんでもない！」と声を上げた。
「あんたのおかげで俺は子供たちに会えたし、マリーネも無事だったんだ！本当に感謝している！」
既に多量の酒が入っているのかエヴァンは涙と鼻水を流しながら「ありがとう」を連呼した。
「セリレイネウスさんもありがとう！この人があんたの所に来たのは偶然かもしれないけど俺にとっては神様に感謝したいぐらいの偶然なんだ！さっセリレイネウスさんももっと飲んで飲んで！」
「いや、私はそんなに…」
「なに言ってるんだ！さぁさぁ！！」

あまり酒が進んでいないセリさんを見咎めたのか、次々に酒を勧めていく。
こういった席だからか強く断りきれない様子のセリさんは本当に渋々と盃を開けていく。

「しかし、そっかー。じゃあディオンさんがセリレイネウスさんの旦那だって噂は違たってことか」

「へ？そうなのか？俺がかかぁから聞いた話じゃ、セリレイネウスさんの昔の婚約者がディオンさんで王都からおっかけてきたって聞いてたぞ？」

「んん？俺の女房は山ん中で山賊に教われてた貴族のぼっちゃんがディオンさんでそれを颯爽と助けに入ったのがセリレイネウスさんでそこから二人の恋がうんたら～とかなんとか」

戸惑う男たちに女衆とディオンはくすくすと笑い声をたてる。

「残念ながら、まだ私の片思いなんですよ」

ちらりとセリさんを伺えば今の話は聞いてなかったようだ。途切れることなく注がれる酒を（自棄になったのか）もくもくと飲み干している。
今がチャンスだー・・と、私は彼女に気付かれないようにそっと声を潜め、周りに集まった村人にお願いをすることにした。

「今はセリさんに振り向いてもらえるよう目下努力中なんです。皆さん、応援していただけますか？」

小首をかしげにっこりと笑えば、周りを囲む女衆は勿論、男衆も

一同に顔を赤らめて頭を縦に振る。

「あっ、当たり前じゃねぇかディオンさん！俺たちは総出で応援すっぜ！」

「おう！それにずっと居ついててくれりゃこっちとしても願ったりだ！」

一気に場が応援ムードで盛り上がった。

よし、と私は机の下でこっそりと拳を握り締める。

”獲物を落とすにはまず周りから”

と、あの本にも書いてあった。

残念ながらあの本に出てくる登場人物（マリーシカさんたちのお奨めのキチクな征服王。そういえばキチクってなんだろう？）を真似る事はセリさんにも不評だったし、私としても抵抗があるのだがその”方法”を参考にするのは問題ないだろう。多分。

「何かあったのか？」

異様な盛り上がりを見せているこちらに気付いたのか、セリさんが声をかけてくるが私は笑顔で「なんでもないですよ」と答えた。

＊

飲んで、喋って、食べて、大声で歌を歌って、焚火を囲んで皆で手を取り合って踊って…

気が付けば宴に参加していた半分以上は家に帰ったようで、残りはそのまま広場で寝こけたりしている。

テーブルに突っ伏したものの、酒瓶を抱いて地面に身を横たえているもの。その中にはいつの間に来ていたのか珊瑚の…じゃなかった、レガリアの姿もあった。

村の人たちには彼は私を尋ねてきた兄弟だと思われているらしい、まぁそのほうが都合がいいので否定はしなかったが。

しかし一体どれだけ飲まされたのだろう、近づいて肩を揺するも微動だにせず寝息を立てている。

このままじゃ風邪をひいてしまう、せめてもう少し火に近いところに連れて行ったほうがいいのでは…

「……まぁいいか」

やめた。セリさんではないが、何か今はそんな気分じゃない。

彼は大事な幼馴染でもあるし、一応はつがいとなる予定だった相手だ。だけど、何故かどうにも今の彼に気を遣ってあげる余裕などない。

時折彼の新しい名前を呼ぶたびに頭の中に浮かぶのは今朝のやり取り、そしてそれと同時に胸のうちに湧き上がるのは…あぁ、まるで言葉じゃ言い現せない。

寝てるなら寝てるでそのまま寝続けていればいいのに、もう永遠に。

この気持ちはあの時と似ている気がする。そう、セリさんが私を

助けに来てくれたとき、あの時のあの気持ち。私の知らないセリさんを知っていたあの男への不快感、そして私の知らない顔を見せるセリさんへの僅かばかりの苛立ちー・・

きっとこれは俗に言う”嫉妬”というものに違いない。ドロドロしてて不快なほどに体中の体液が沸騰しそうなぐらい熱い感触が腹の底に燻る。

考えていくうちに、体の中で次第に膨れていくそれが凄く嫌になって自然とセリさんの姿を探していた。

灯りが少なくなった中でもすぐにその後ろ姿が目に入る。

彼女は酔いつぶれていないのか数刻前と変わらず凛とした姿勢で座っていた。

ふらりと足が動き、何も言わないままその横にそっと腰を下ろした。

ただそれだけで、すっと腹の底のものがおさまっていくのがわかる。

それにほっと息を洩らす。例えその気持ちが彼女を想う故のモノであっても、こんなドロドロしたものを抱えた状態で彼女の側にはいたくない。気付かれたくない。

「ディオン？」

「あっ」

知らず内に俯きかけていた私の顔を下から覗き込むようにセリさんの顔がある。

その距離が思いのほか近くて、違う意味で体中の体液が沸騰しそうになった。

「どうかした？」

「え、あっその」

「泣きそうな顔をしてる」

「そっそうでしょうか？」

そんな顔をしていたのか、と思わず両頬を手で抑えれば「そうだよ」とセリさんが笑った。

いつもよりも柔らかなその笑顔にどきまぎしながら何とか話を変えようと「そっそういえば、セリさんはお酒が強いんですね」と返す。

あれから結構な量を飲まされていたにも関わらずセリさんの顔色は全く変わっていない。

「昔から酔いつぶれたことはないかな」

と、いいながら杯を指先でくるりと弄り回す。

何となくその動きに目がいき暫くそれを見ていた。少しばかり二人の間に沈黙が流れるが、別段と気まずいわけでもなく、むしろ心地いいといえる沈黙だった。

「…とても、楽しい宴でしたね」

暫くその時間に浸っていたが、ぽつりと自分の口から出たのはそんなとりとめない言葉だった。

村の誰が何をしたとか、誰々のこんな話を聞いたとか…宴中の様々な事を思い返してはぽつりぽつりと語っていく。隣に座るセリさ

んはそんな私の言葉に静かに頷いたり「そう」とか軽く相槌を打って静かに聴いていた。

「そういえば、マリーネさんからお子さんたちの名前を考えてくれって頼まれちゃいました…どうしましょう？」

「嫌なの？」

「いえ、そういうわけでは…でも」

名付け親になってくれといわれているのだ。

嫌なわけがない、むしろ光栄だとも思う。だけど私は人魚で、人魚が名前を贈るのはー・・

「…あぁ、そうか」

私が何に逡巡しているのか気付いたようだ。

「別に構うことないだろう？それは人魚（おまえたち）の世界での掟で、ここは人の土地。誓約に縛られていると思っているから駄目なのよ」

ひた、とセリさんの人差し指が私を指差した。

「ここにいるのは”人魚”のディオン？それとも私の家に居候している”魔術師”のディオン？」

その言葉にはっとなる。

今の私は、私は…

「…セリさんの家に居候している魔術師です」

私の答えに満足したのかセリさんは何度目かの笑みをこぼす。

「そう、じゃ別に何も問題ないわ。ようは気の持ちよう、祝福のつもりで名前を贈ればいいのよ」

それに、とセリさんが続けた。

「既に貴方には私が真名を贈った。貴方と私は”つがい”なんでしょう？」

「！！」

耳がおかしくなったのかと思った。いいや耳だけじゃない、目もかもしれない。

にこりと笑うセリさん。

そう、ニタリ、でもニヤリでもなければ”にこり”とやわらかく笑っている。そう、そうなのだ！思えばさっきから向けられる笑みはどれもこれだった。

セリさんの下へ押しかけてから今日までこういった話を少しでも出せば決まって目にするのは怒った顔か、眉間に皺がよった顔、もしくは凍てつくまでの無表情。そして耳にするのは罵詈雑言か「さっさと海に帰れ」の言葉、極めつけは鳩尾に入る拳か足蹴りだった筈。

それが、今、私の目の前のセリさんは、セリさんは…あぁっ！！

「セっセリさん…！？」

「ん？何？」

「何かおかしなものでも食べたんじゃっー・・はっ！？それともやっぱり酔ってらっしゃる！？はたまたこれは夢！？私が酔ってる！？」

喜ぶべきところなんだろうが頭が現状についていかない。

「何おかしなことといってるの、私は酔ってないわよ」

「うぇっ！？すっすいません！！でもー・・あーっ！そういえば口調！口調が変です！いつものセリさんと違う！でも、えっ！？どうしよう！？これ、喜んでいいの！？」

ますます混乱する頭に何とか収集をつけようとするが…如何せんなんともならない。

どうしたらいいんだろう、どうすれば、どうー・・

「…セリさんは私の”つがい”ですよね？」

すいません、夢でも何でもいいー・・とりあえず目下喜びを最優先させることにしました。

「まぁ半分事故のようなものだけど、そうなるんでしょう？」

「はい！！」

「じゃ、しょうがないじゃない。あぁでもレガリアのこともいれるとー・・」

「むしろあれこそ事故です！私たちは一夫一妻制です！人間もそ

うでしょう！？」

「えぇ、そうね」

…ちなみに人魚（わたしたち）の社会には特にそういった縛りはないー・・が内緒だ。

「”つがい”だからすぐに”夫婦”ってわけでもないけど…まぁ貴方には既に真名があるのだからあまりそういう意味合いで言霊にとらわれる可能性は低いっていう話よ」

「…あ、あぁそうですよね」

口調が多少変わっても雰囲気がいつもより倍増しでやわらかくてもセリさんはセリさんでした。実に理知的なお話、そうでした名付け親の話をしてたんですよね、はは。

浮かれすぎた自分をしかりつけてやりたくなる。

でもー・・

（でも、それって私と”つがい”でいてくれることは許容してくれたってことですよね？）

ほんの少し、その変化に期待してもいいんでしょうか？

「…セリさん、セリさんも一緒に考えてくれますか？名前」

「いいわよ」

「セリさん」

「ん？」

「大好きです」

そっとその体を抱きしめる。
返事はなかったけど拒否はされなかった。

いまはそれで充分。

腕の中の暖かさを間近で感じられればそれだけで、私は幸せだ。

閑話休題ー宴、その夜（後書き）

その後セリさんがぴくりともしなかったのは寝ちゃってたから。
次の日の朝には、ばりばり二日酔いで気分最悪のセリさんがいらっしゃいました。

実はお酒に弱くって、飲みすぎると途中からの記憶がなくなるそうで（「だからああいう席は嫌なんだ」ｂｙセリさん）

勿論、昨夜のことは綺麗さっぱり忘れ……うぅっ…

閑話休題ーある執事の回想録。

私がラディフォール家にお仕えしはじめて早５０年。
そのご子息方のお世話を任せられて３５年がたちました。

あんなに小さかったご子息方も今では立派な紳士として王都や社交界でご活躍なされて、皆様の幼少のころよりすぐ側で見守り続けていた私としては感慨深いものがございます。

ご長男のヴァンス様は次期当主としてご主人様とともに王都にて数々のご政務に励まれておりますし、ご次男のファリウス様は騎士団に所属しておられますが日ごろの功績が称えられ、つい先日副騎士団長へと就任なされました。
そのためか最近ではますますお勤めにお力をいれられるようになり…私としてはそろそろご婚約者様のメアリ様との御祝言をあげていただきたいのが本音なのですが、それももう少しお預けとなってしまいそうです。

そしてご三男のクィル様。
お二人の兄上方と同じで優秀な方ではあるのですが、兄上方とは違い家を継ぐという立場におられないためか、昔から少々奔放なところもある方でございます。
しかしそれもクィル様の美点ではございましょう、手のかかる子ほど愛しいとはよく言ったものですな。

兄上様方と同じように哲学（インシティット・ムドゥルスティイルソニア）する英知の学院をご卒業された後、騎士見習いとして騎士団へ所属しておられた時期もございましたが今は名立たる収集家（コレクター）として各地を精力的に回られておられます。何でも「世界の美しきものたちが僕との邂逅を心待ちにしているんだ！」

そうで。

そんなご子息方の成長を目に焼きつけ旦那様にお仕えしてきた私も気づけば７０を数える老いぼれでございます、もう年も年ですし執事としての仕事は３年ほど前に全て息子に譲り、ほぼ隠居同然で本邸にお仕えしておりました。

そんな折、クィル様が１年半の船旅を経てこちらへ戻ってこられると知らせを受けたのでございました。

旦那様にお願い申し上げ、急ぎクエフ領の港町ヴィスオラへとお迎えに上がりましたところ、クィル様はお見送りしたときと変わらぬ笑顔で私めを労ってくださいました。

しばらくこのヴィスオラにご滞在なされるということでしたので私もラディフォール家の別邸にてそのままクィル様のお世話をさせていただくことになったのでございます。

さて、クィル様がヴィスオラに滞在をなさってから３週間ほどたった頃のことでございます。

馴染みの服飾店へ出かけられたはずのクィル様が思わぬお客人を連れ帰ってきたのは昼をとうに過ぎた頃合でございました。

そのお客人は大変、お美しい方でございました。目を閉じられていてもその身から漂う気品、色気というのでございましょうか。旦那様のお供で様々な社交場に出向いていた私でも殿方でこれほどお美しい方は見たことがございません。

クィル様の収集家（コレクター）としての情熱はすさまじく…まぁ一種の悪癖といいますか、美しいものに出会うと気持ちが昂ぶってしまわれるのか少々羽目をはずされることがございます。

ただ、一部の悪評高い収集家（コレクター）たちとは違って非人道的なことには一切手を出されないことだけが私にとって安堵の種と申しますか。

今回のようについうっかり人を連れ帰ってこられることもございますが、しばらく歓談すれば満足なさって「帰りたい」と願うものには相応のお礼を持たせて帰されます。

ただ美しいとはいっても男性のお客人は始めてのことでしたし、どうやら少しばかり強引に連れて来られてしまったようでしたので（この点に関してはクィル様も反省なされておりました）その方の手足を拘束させていただくことにしました。

大変申し訳ないとは思うのですがラディフォール家の方々の御身をお守りするのが執事（わたくし）の役目でございますので。

クィル様がそのお客人とコレクションルームでご歓談されている頃、私はお二人のために紅茶を用意しておりました。

焼きたての茶菓子と一緒に盆を持って2階の部屋へ向かう途中のことでございます、背後の玄関から大きな物音がしたのは。

何事かと階段の途中で振り返れば一人の女性がこちらへ向かってくるではありませんか。

近づいてくることにはっきりと見えてきたその方の顔を、私は不躾ながらも凝視してしまいました。

「ティティール様」

記憶にあるティティール様の色彩とはまったく違っておりましたが、そのお顔を忘れたことはございません。ティティール様も私のことを覚えていてくださったのか一瞬驚いたようなお顔をされましたがすぐに来たときと同じ憮然とした表情で尋ねてこられました。

「連れが来ていると思うのだが？」

「2階の左奥の部屋でございます」

とお答えすればティティール様は足早に階段を駆け上がっていかれました。

その後ろ姿に無駄だと知りながらも私は声をかけずに入られなかったのでございます。

「ティティール様、出来れば歩行可能な程度で済ましていただければ幸いでございます」

私の願いを聞き届けていただけたのかは定かではありませんが、数々の収集品の中に埋もれてしまっていたクィル様のお怪我といえば、顔にくっきりと残った足跡とお腹にまん丸と出来た青あざ程度で済んだようです。

あの頃に比べれば随分とマシな怪我だといえるでしょう。

それよりもお連れの方に抱き上げられて出て行かれたティティール様のほうが心配だと感じてしまう私は不忠義ものでしょうか。

どうにもお顔の色が悪かったような…なんとも声をお掛けすることの出来る雰囲気ではございませんでした。後日、改めてお詫びをしなくてはいけませんね。

「あぁ痛い…でもこれも愛の試練だと思わないかい、レイン？」

「クィル様、馬鹿な事を仰っていないで早くお飲みください」

ティティール様との邂逅から一週間。
ヴィスオラの別邸の一室では未だ痛む腹をさすりながらうっとりとした表情を見せるクィル様ではございますが、苦い薬湯を飲むのを渋ってティティール様へと思いを馳せていることを私は見逃しません。
口元にグラスを持っていけば観念なさったのか、顔をしかめながらも渋々とそれを口に含んでいただけました。

「馬鹿なこととはなんだい、ティティに対する僕のこの思いは本物だよ！」

「存じておりますよ。さ、クィル様次はこちらを」

「ぐっ…まだあるのかい？」

私の差し出した別の薬にクィル様の眉間のしわは増える一方でございます。

「お元気そうでございましたね」

私がそう呟けば、クィル様の手が止まりその目が窓の外へと向けられました。
遠い日、どこか別の場所を懐かしむようにその目が細められます。

「…あぁ、そうだね」

過去に思いを馳せているうちにそのお顔が段々と悲しげになっていくものですから、私は話題を変えなければと先ほど届けられていた手紙をお渡しすることにしました。

「クィル様、王都(カマンサ・レール)からお手紙が届いております」

「おや、誰からだい？」

”思い出”から戻ってきたクィル様はいつもの飄々とした笑みを顔に貼り付けると手紙を手になされました。

ですが薄墨色の封筒を開け中に入った便箋の文字を追っていくうちにクィル様の表情がなくなっていきます。

いつになく真剣なそのお顔に、普段からそうであればきっとティティール様にも”変人”扱いされずにすむだろに、と不謹慎ながらも思ってしまったのであります。

読み終えた手紙から目を離したクィル様は何事か思案するようにしばらく考え込んでおられましたが、ため息をひとつつかれると寝台を降りられました。

「出掛けてくるよ、馬車の準備をしてくれるかい？」

「はい、畏まりました」

着替えのために枕もとのベルを鳴らして控えていた侍女たちを呼び出してから私は馬車の手配をするために部屋を後にしました。去り際にちらりと見えたクィル様のお顔がいまいち晴れやかではないのが気がかりではありますが…

世間様からは奇人変人扱いされておりますクィル様ですが、願わくば彼にこれ以上の心労が増えないことを祈るばかりでございます。

閑話休題ーある執事の回想録。（後書き）

設定話。

ヴィレル・セド・ヴァンス・ラディフォール／長男
ペリグド・セド・ファリウス・ラディフォール／次男
ヴィレル・セド・クィル・ラディフォール／三男

長男と三男は正妻の子で、次男は第二夫人の子供なので最初の姓が違います。

旧友、現る

「やぁ、相も変わらず辛気臭い顔をしているなぁ君は」

開口一番いわれたのはそんな言葉。

「何だい何だい、この私がわざわざこんな片田舎までやってきたというんだからもっと嬉しそうな顔をしれくれてもいいじゃないか」

「…何処から指摘すればいいのかわからんが、とりあえず玄関から入って来い」

開け放たれた窓の枠に足をかけて入ってこようとするそれの頭をぐいっとおし返せば「いいじゃないか、ケチくさい」と唇を突き出し顔を顰めた。

しょうがないなぁ、と渋々な様子で窓から離れたそれの様子に私は深く深くため息をつくと部屋を出る。

「あれ？セリさん、お昼はまだですよ？」

昼飯が出来上がるまで部屋から出ないぞ、と宣言していた私の言葉を覚えていたディオンが私の姿に首をかしげる。

「客だ」

「お客さんですか？」

「あぁ、茶を入れてくれ」

「…何だ、誰か来たのか？」

ディオンとそんなやりとりをしていれば、居間の揺り椅子で（どうやら彼のお気に入りらしい）ウトウトとしていたレガリアがむくりと立ち上がり玄関へと足を進めた。

彼も彼で”押しかけている”という自覚はあるらしくこと、ここへ来てから一週間何かすることはないかと模索していたようだが家事全般はディオンがやってしまっているし、私の研究を手伝うにも知識がほどほど足りない。

じゃあさっさと海に戻れよ、とは思わないでもないが…まぁしかし私も鬼ではない。働く意欲があるのに何もすることがないのではあまりにも可哀想だと、薪割りと暖炉の火を熾（おこ）すのと、客の応対は彼に任せることにした。

だから”客”という単語に素早く反応して転寝から起き上がった彼の与えられた仕事に対する義務欲には賞賛するものがあった…が、しまった。感心している内についうっかり止めるタイミングが遅くなってしまった。

扉の前には立つなよ、と声をかける前に彼の手はドアノブに掛けられ木扉がわずかばかりに軋む音を立て外側に開かれる、前にー・・

「はははははっ！空前絶後っ！！誰が呼んだか満を持して王都一（カマンサ・レール）の美少女登・場！愛に生きて、じゃなかった会いに来てあげたぞセリ君！熱烈な歓迎ありがとう！！君が出迎えてくれるなんて珍しいじゃないか！ん？何だかこの前よりも感触が違う気が…君、だいぶ筋肉質になったんじゃないか？」

言っていることが相変わらず訳がわからない。

「マギナ、私はこっちだ」

「んん？」

勢いよく開かれた扉、そこから飛びつく…とは随分可愛らしい表現だ、どちらかといえば腹に突進してきたといっていいレガリアは床に背中を打ちつけ「ぐっ」と呻いている。

その腹の上、細腕のどこにそんな力があるのか絞め殺さんばかりの勢いでぎゅうぎゅうと抱きついていた彼女は、私の言葉に我にかえると「おや」と上半身を起こし、改めて自分の下敷きになっている青年の姿を視認した。

「何だ、人違いか。私とセリ君の輝かしい再会の抱擁を邪魔するとはいい度胸をしているじゃないか、いくら私が美少女だからといって待ち伏せするのはいかがなもんだと思うよ、んん？よく観れば美形じゃないか、君、その顔じゃなきゃただの性犯罪者として訴えられてもおかしくはないぞ。

しかし何だい、私に跨られて苦悶の表情を浮かべるとは何とも許しがたいね、私はそんなに重いかい？失礼な、美少女に向かって実に失礼だよ君、紳士として如何なものかね？いいやそもそも男としてこの状況は実においしいだろう、もっと喜んでもいいはずだが……ところで誰だい、君は？」

「それはこっちの台詞だ！」

レガリアの上に跨っている訪問者は彼の言葉にふふん、とその胸を張って声高に名乗った。

「私かい？私はマギナ。マギナ・ユグラ・テト・メリアッシュ。王都（カマンサ・レール）が誇る美少女の中の美少女！神の造りたもうた奇跡！金の妖精、幻想精錬師（ファーフュドピレ）のマギナとはこの私のことだよ！」

…勿論、跨ったままだったが。

「何だい、感動しすぎて声も出ないかい？しかし私が名乗ったのだから君も名乗るべきだと思うのだが…それとも私の魅力がたりないかい？こんな美少女を上に跨らせておいて君は何も言わないつもりかい？」

すすすっとその細い指がレガリアの胸を撫でていく。

いつの間にかドレスから白い太ももがのぞき、小さな顔が近づけば金の長髪がさらりとレガリアの顔に落ちた。

…美少女と美青年で絵にはなるのだが、傍からみれば少女のほうが襲い掛かっているようにしか見えない、というか現にそうなのだから何とも危ない絵柄だ。レガリアは美少女に迫られて…というよりはそういった状況に慣れていないのか顔を青ざめさせている。

「悪ふざけもそこまでにしてやってくれ、マギナ。彼はレガリアだ、そろそろやめないとお前が捕まるぞ」

「おやおや、見た目と違って以外に初心なんだねこの色男君は。中々にいいギャップじゃないか」

くすくすと楽しそうに笑うと少女はやっと立ち上がり、改めて私に向き合うとぎゅっと抱きついてきた。

「やぁセリ、一ヶ月ぶりぐらいかい？」

「本当に何しにきたんだ、お前は」

「寂しいことを言うなよ。私は君が足りなくて会いにきたんだからー・・ところで」

と、私の胸に顔をうずめていたマギナが上目遣いで尋ねてくる。

「さっきから私のことを射殺さんばかりの目で見ているそっちの美形は誰だい？」

…あぁ、疲れる。

旧友、現る（後書き）

またまたアクの強いキャラが出てきましたがとりあえずここで一旦きります。

旧友、現る2

鬱蒼とした山の中。どうしてこんなことになったのかと考えるも、どうあってもこの状況に至るのではないかと思い当たりそして項垂れる。
堂々巡りの考えを何度か繰り返すものの、残念なことに現状は変わることもない。

どうしてこんなことになったのか。

無駄だろうが、声高にそう尋ねたい。だが決してこの場にいるものの中でその問いに正しく答えられるものは誰一人としていないのだろう。

場所は鬱蒼とした山の中、のほんの少し開けた場所。
そこにいるのは私たちとそれを取り囲む幾十人もの男たち。
その輪の中心、私の前では二人の男が睨み合っている。片方は最近生活の一部と化してしまった居候、もう一人は屈強な体躯の大男。

「…帰りたい」

何度目かの溜息とともにこぼれるこれまた何度目かの言葉。すでにその声は疲れはてている。
本当に、本当に無駄だということは重々承知しているが、それでもまだ心のどこかで今までの経緯を振り返ればどこかに”こうはならなかった”出来事があったのではないかと思いを馳せる。
あわよくば回想に浸っている間に現状が少しでも進展していたらいいな、とか実は夢でした！的な展開になっていればいい、と微塵の期待を寄せて私は思考の海に逃げた。
現実逃避した

＊

胸元までまっすぐに流れる金の髪、人形のように白い肌にはくりっとした緑の瞳、紅を差してもいないのに頬と唇は桃色に染まっている。

華奢な体は成熟する前の少女特有の独特の色気が匂いたち、フリルがふんだんにあしらわれた白のドレスワンピースは一見してその少女を可憐、かつ清楚にみせていた。

が、しかし、出されたお茶を飲み干した少女の口から漏れるのは到底その容姿に似つかわしくない含み笑い。それはだんだん大きくなっていき、やがて”馬鹿笑い”に近いものになっていく。

「なるほどなるほど！厄介ごとに好かれる体質も相変わらずってことかい？実に面白いね」

「何処がだ、そんなに面白いなら変わってくれ」

少女に相対してセリレイネウスの眉間の皺は深まる一方だ。

「いやいや、こういうのは傍観者であるから面白いんだよー・・あぁディオン君、もう一杯いただけるかい？」

彼女が空になったカップを掲げ催促すればいそいそとディオンが

それにお茶を注いだ。

「うん、美味いな。いい”嫁”じゃないか、セリ」

「ありがとうございます！」

「誰が嫁だ。ディオン、お前も顔を赤らめるな！」

「すいません、つい嬉しくて」

「つい、じゃない」

そんな二人のやりとりにマギナの顔がにやにやと綻ぶ。

「ふふっいいなぁいいなぁ、楽しそうでうらやましいよ。それに彼らは”人魚”なんだろう？あぁますますいいなぁ。幻想精錬師（ファーヒュドピレ）の血が騒ぐよ」

「だからいつでも代わってやる」

「そんなぁー！捨てないでくださいセリさー・・ぐっ」

「だから一々引っ付くな！泣くな！」

「おやおや、二人の恋路を引き裂くほど私は野暮じゃないよ。…しかし、うん、そうだな。今までの経過を聞きうる限り、君！」

何かを結論付けたらしいマギナの指先が、少し距離をとって座っていたレガリアに向けられた。

突然指を突きつけられたレガリアの体がびくりと反応する（どう

やら最初の邂逅が若干トラウマになったみたいだ）

「なっ、何だ…？」

「君はどっからどう見たってお邪魔虫だ。いやお邪魔人魚だ」

「何？」

「だってそうだろう？セリに並々ならぬ愛情を捧ぐ彼ならまだしも、君はたまたまセリに”真名”をつけられてしまっただけであって、そこに人魚の掟としての”義務感”からセリの”求婚”を受け入れた、と言っているんだよ？いや、確かにこの広い世の中ではそこから始まる”恋”もあるはずだろうね、だけど考えてご覧よ、君は二人の幸せを邪魔したいのかい？愛し合う二人の仲を裂きたいのかい？」

まてまて、私は何処から突っ込めばいい。

そもそも愛し合ってはいないだろうが！と言いたかったが、うまくいけば厄介ごとが一つ減る、と思い至りぐっと言葉を飲み込んだ。

…しかしよくもぺらぺらと言葉が出てくるものだと感心せざる終えない。

「レガリア、古の掟も確かに大事だ。だが、時にはそれを破ることも必要なんだよ。それにここは地上、大地の加護が支配する地、海の掟を無理に持ち出す必要はない」

「だが真名は絶対だ！言霊によって誓約がなされた今、私は人魚の掟にしたがって」

「そんなもの幻想精錬師（ファーヒュドビレ）の私にかかればどうにでも誤魔化ー・・

いや、最善の方向へ直すことが可能さ」

「そんなことが…？」

「あぁ、私の力は王都（カマンサ・レール）でも群を抜いているからね」

…きっと彼女のことだ、力でねじ伏せて無理やり押し通すに違いない。

聖女のような微笑を浮かべてマギナは言った。

「だから安心して君、私のものになればいいじゃないか」

「…ちょっとまて、何故そうなる」

流れに流されそうだったレガリアがここで我を取り戻したようだ。

「おぉっと、そのままうなずいてしまえばいいものを。案外鋭いのだね、君」

「貴様、私を侮辱するかっ」

「ははっ！いいね、血気盛んでますます私好みだ。セリ、本当にもって帰ってもいいかい？」

「何処へでも連れて行け」

「君も幸せになるんですよ、レガリア」

「姫！セリレイネウス！」

私とディオンに見送られそうになったレガリアは抗議の声を上げ立ち上がろうとするが、残念ながら彼女がそれを許さない。がしっとその首が華奢な細腕にロックされる。

「よし、決めた！私は君が欲しい！だから親睦を深めようじゃないか！ってことで諸君、出掛けるぞ」

「ちょっとまて、マギナ。そもそもお前は何しに来たんだ」

ますます暴走に歯止めが止まらないマギナを呼び止めれば、今にもレガリアの息の根を止めかねない勢いで外へ駆け出しそうだった彼女がぴたりと動きを止めた。

「そうだった。いやでもね、実は今から親睦を深めに行くところが本来の目的地でもあるんだよ、セリ」

「どういうことだ？」

言っている意味がわからず首をかしげて問えば、美少女顔が台無しなほど不敵な笑みで彼女はふふん、と笑う。

「君、落鋼石（らっこうせき）に興味はないかい？」

旧友、現る２（後書き）

短くてすいません、んでもってまだ続きます。

旧友、現る3

落鋼石（ラッコウセキ）。

その名は世間一般にはあまり知れ渡ってはいない。

何故ならば数々の輝かしい宝石と違い、ただ一見すればそこらの岩石となんら変わりのない色形をしているからだ。だからか、知識のないものがそれを手にしたとしても見向きもしないで捨ててしまうだろう。

だが、それは一部の限られた者にとっては喉から手が出るほど欲しい、と言わす価値を持つ石の名前でもある。

主に製鉄原料となる鉱石である鉄鉱石（テッコウセキ）などを採掘する鉱山などで採れるというが、その頻度は極端に少ない。正に”万に一つ”といっていい確率でしか採掘できないのだ。

色合いはくすんだ灰色で、子供の握りこぶし程度の大きさのモノが多い。ただのクズ石と似たり寄ったりのそれを落鋼石だと判別するには、長年”石”を見続けてきた玄人の目か、もしくは力のある魔術師の手を借りなければいけない。

落鋼石の特徴はまずその硬度にある。

職人が時間を掛けて精鉄した鋼よりも硬く、強い。だが、武器にするには実に扱いにくいためか”鋼以上の鋼だが、鋼に成り代われない”という意味合いを込めてこの名前がつけられたという。

そしてもうひとつの特徴、これが何よりも”一部の限られた者”

に重宝される所以でもある。

鋼よりも硬い落鋼石の中には純度の高い”地脈”の結晶があるのだ。

地脈とは主に地下水の通路などを指すときに用いられる言葉ではあるが、この場合はもっと別の意味合いを持つー・・この世界に生きる全ての命が放つ力は大地を巡り巡っており、その流れが”地脈”を作っているという。魔術師や幻想種（レジンヴァラ）が使役する魔法の力とは少し違った、強大な力の流れ。

それが何らかの偶然が重なり一箇所に滞留してしまったことによりできるのが落鋼石の中の結晶なのだ。

いわば”命”の結晶であるそれは、どんなに優れた魔具にも劣らないほどの価値がある。

魔術師は勿論、普通の人間だって所持しているだけで潜在能力以上のものを引き出すことが可能だ。

そして何よりー・・生態錬術師（エルヒミーク）である私にとって、生涯のうち一度は手にして研究してみたいもの断トツ一位の代物でもある。

その名前を聞くだけでそわそわするし、それが「興味がある？」などと聞かれでもしたならば「あるに決まっている！」と即答する。

勿論、続いて「欲しくない？」と問われれば「欲しい」と答えるし、「じゃあ、とりに行こうか」といわれれば「行く！」と答え…

「…るわけがないだろう」

いや、本当は「行く」の「い」の字が半分まで出掛かったのだがぐっとそれを無理やりに飲み込んだのだ。危ない危ない。

「おや、我慢は良くないよ。溜め込むのは感心しないな、自らの欲求に正直になろうじゃないか」

マギナが再度催促してくる。が、にやにやと笑っているその顔が胡散臭くてしょうがない。

「近所に散歩しに行くわけじゃないんだぞ、そんな軽いノリで手に入るものならとっくに手にしている」

大体このあたりに鉱山はないし、落鋼石が採掘できる鉱山も限られていて、体外そういうところは国に管理されている。

ちなみにここから一番近い鉱山でも王都（カマンサ・レール）のさらに向こう側、ゆうに片道一ヶ月はかかる場所だ。

それに例え奇跡的に採掘の許可が下りたとしても掘り当てれるかどうかは運次第。残念ながら私にはそこまでの忍耐はないし、確率の低い奇跡に縋るほどの賭けはしない。

「何を企んでいる？隠してないでさっさと話せ」

「企むとは人聞きの悪い。乙女は秘密の一つや二つもってこそ輝くというものだよ」

「…私とそう対して年も違わぬくせに何が乙女だ、外見詐欺娘」

私の言葉になにやら外野二人がざわついたが（何かしら言おうとしたレガリアの口をディオンがばり、と手で押さえつけていた）一睨みして黙らせる。

聞き取れはしなかったが失礼な発言をした気がするので後で一発

殴ることは決定済みだ。

「誉め言葉として受け取っておくよ。ふふっいいね、君に嫉妬されるのも実に心地いい」

「変態か」

「何とでも言ってくれたまえ。さて、そうだな…出来れば現地に着くまで内緒にしていたほうがわくわくどきどき感があって実に楽しそうだと思っての配慮だったんだが」

「そんな配慮はいらん」

「えぇっ！何でだい？ピクニックみたいで楽しそうじゃな…あぁごめんごめん、わかった。話すからそう射殺するような目で見るのはやめてくれないかな？」

無言で先を促せば「やれやれ、いい加減その堅物さを直して欲しいものだね」と肩をすくめながらマギナは改めて元いた席に腰を落ち着けた。

「実は、ここ最近王都（カマンサ・レール）へ出入りする商隊が盗賊に襲われる回数が増えていてね」

「こないだの道中では何もなかったように感じたけど？」

門での検閲も手軽に済んでいた記憶がある。

「こちらの方面では被害報告は少ないからね、今もっとも被害を受けているのは北側さ」

「騎士団は何をやっている。無駄な血税を使って訓練しているんじゃないのか」

「そう思う気持ちもわからないでもないけどね、ただ、どうにも盗賊(彼ら)たちはひどく鼻が効く上に、頭もまわるようで彼らも手を焼いているといのが現状なのさ。

まぁ幸いなことに今回問題となっている盗賊は”盗み”はするが”殺し”はしない主義らしい。怪我人は出ているが死者はいない、その上襲われる商隊のほとんどが”いかがわしい”商売に手を出しているともっぱら噂の輩ばかりでね、ゴシップ記事なんかはこぞって彼らを”義賊”とまで書き出す始末さ」

「大方、上も目をつけてた輩ばかりなんだろう？都の膿を取り除けて清々しているか…はたまた自分たちの手柄にならずにやきもきしているか。耄碌爺たちの考えるのはそんなことばかりだ」

「困ったものだね」

他人事のように肩をすくめるマギナは「さて」とそこでいったん言葉をきった。

「君が王都(カマンサ・レール)を立った直後にも一つ商隊が襲われてね、まぁいつものとおりに積荷を奪われていったわけだが、どうやらその中に闇市で売りさばこうとしていた落鋼石(ラッコウセキ)があったみたいでね」

「…ほぉ？」

「これは私の情報網から仕入れた話なんだが、盗賊(彼ら)たちが現時点で逗留先としているのがここから西に５つほど山を越えたところに

あるとわかったらしい。そしてちょうど今日から４日後にそこに騎士団の捕り物が入る予定なんだよ」

きらりとマギナの目が光った。それはもう悪戯を仕掛ける子供のような無邪気な瞳で、ただし腹の中はドス黒いほどに淀みきっているが、というのを付け足すのを忘れないでおこう。

「散々煮え湯を飲まされてきた騎士団だ、相当躍起になってしまっているみたいでね。奪われた荷が没収されて彼らが捕まってしまう前に是非とも噂の義賊を目にしたいと思い立ってね、私の可愛い相棒の足を持ってすればここからなら一晩でつく距離なんだが…いかんせんか弱い女の身だ、私一人では心持たない。是非とも同行者を募りたいのだがいかがかな？」

「よし行こう」

差し出されたマギナの小さな手をぎゅっと握った。

すぐ後ろでディオンの驚いた声が上がる。

「即答ですか！？」

「私も少し興味があるからな、その盗賊に」

にまりと口角が上がる、きっとマギナにも負けない黒い笑みが浮かんでいることだろう。

「すぐに支度を一・・・あぁ、お前らは別に留守番でもいいが、どうする？」

聞けば「行きます！」とディオンが応え、レガリアも（まだマギ

ナを警戒していたが）頷いた。

「そんな危ないところにセリさんを行かせるわけがないじゃないですか！…ところでセリさん」

「何だ？」

「今のお話を聞いてると…騎士団の方が来る前に盗賊の方から落鋼石（ラッコウセキ）を手に入れようってことです、よね？」

「む、それは確か人の言葉で”ねこばば”するという行為に近」

「やかましい」

レガリアの後頭部に一発かまして黙らせる。全く、人聞きの悪い。蹲り悶える彼のことはほうっておいて私はディオンに向き直ると優しく諭した。

「いいか、ディオン。私たちはあくまで興味本位で盗賊を見に行くだけだ。まぁ仮に彼らに見つかってしまって、ついうっかり反撃してしまったとしてもそれは正当防衛だし、その騒ぎの間についうっかり彼らの盗んだ品物の一つや二つ、私たちの荷物に紛れ込んでしまってもそれは全て偶然にすぎないんだよ。…な？」

「は、はい！」

「結構。じゃあ支度をしよう」

その横で、蹲るレガリアの横に座り込んだマギナが「何だ、しっかり調教済みじゃないか。いいねぇ」と、にまにまして呟いていた

が聞かなかったことにしようと思う。

旧友、現る３（後書き）

話が、進まない…。

山に行こう！1

事が決まれば行動あるのみ。早速、支度を整え、西の山を目指すべく家を出た私たちは今、マギナの相棒である彼女の背中に乗せられ、山を翔る。

「我が最愛なる友にして力強き相棒、翼竜種（クローリョ）のセイムレーニの足をもってすればこんな山道など屁でもない！美しかろう！素晴らしいだろう！」

風をきるように走るセイムレーニの頭の上で、その身に風をうけながら自分の相棒を絶賛するマギナは子供のようにはしゃいでいる。

「はい！すごいです！すごいです！翼竜種（クローリョ）の方にお会いするのは初めてなのですが、話に聞いていたとおり美しい走りをされー・・だっ！！」

「馬鹿、あまりしゃべると下を噛むぞといったろう」

身内以外の幻想種（レジンヴァラ）を目にするのは稀なのか、セイムレーニが姿を見せた時からマギナに負けじ劣らずの興奮ぶりではしゃいでいたディオンの耳には、残念ながら私の再三の警告は届いていなかたらしい。

「ひっ、ひたいですセリしゃん」

「はぁ？額？…あぁ、痛い、か。自業自得だ」

幻想種の一種族、翼翔る者とも呼ばれる翼竜種（クローリョ）。

大きさは小さな民家ほどあり、灰黒色に輝く鱗をまとった皮膚と、神代の頃にこの広い大空を飛び回っていた竜（ドラコン）を彷彿とさせる見た目だ。

だがその体を覆う立派な羽は空を翔ることにはあまり適していない。

せいぜいが小さな山一つ越えれる程度の高度が限界だ。あまつさえその背に大人を４人も乗せているいまは飛ぶこともままならないだろう。

だが空を自由に飛び回れない分、彼らはその巨体に見合わず極めて高い俊敏性をその身に宿した。

木々が生い茂る山の中をものともせず駆けるその速さは駿馬以上。風を切る、とはまさにこういうことをいうのだろう。

そしてそれだけの速さを出しながらも私たちが振り落とされないのはセイムレーニが、主とその友人を気遣って空気の圧でもって作った防御壁の加護のおかげか。

風をうけ疾走感を味わってはいるが、実際受けているはずの風圧よりも幾分か柔らかく感じられているのもその加護の一つだろう、息苦しくないのはいいことだ。

…ただ一つ欠点を挙げるとすれば、その乗り心地は乗合馬車以下だ、ということだろうか。

前を見やれば、セイムレーニの首根っこに捕まり、今にも吐きそうな青白い顔のレガリアの姿。

「ははっ顔色が悪いぞレガリア君！楽しいだろう！」

「そんなわけが――・・・！…うっ」

「気の強そうな君の顔もいいが、今にも倒れそうなその顔もいいね！安心したまえ、看病はこの美少女手ずからしてあげようじゃないか！」

何やら両手をワキワキさせながら楽しそうに語るその様はどこからどうみても変質し――・・まぁ彼女に関してはあれがデフォルトか。

その言動に身の危険を感じたレガリアは少しでもマギナから離れようとしたみたいだが…残念ながらその場に蹲るしかない。

それを見たマギナが動かないはずがない。嬉々としてレガリアの側へと近寄ると（不安定なセイムレーニの上でよくもあんなに軽々と動けるものだ）「喜べ！膝を貸してあげよう！」と（無理矢理）彼の頭を拘束、じゃなかった膝にのせた。

どうやら”親睦”を深めるのも忘れてはいなかったらしい。

…それはもう見事なまでの一方的な”親睦”ではあったが。

本格的にこの変人美少女の標的とされてしまった彼に同情をしないわけではないが、まぁ、なんというか…ご愁傷さま。

「いいなぁ…」

だから隣でぼそりと呟かれたその言葉はスルーさせていただきたい。

私は今、彼（レガリア）に心の片隅でこっそり「頑張れよ！」と応援していて手一杯なんだ。終始、聞かない、隣を見ない、を貫いた。

おかげで目的地に着くまでずっと無言の訴えを背中に受け続ける羽目になったわけで…無駄に疲れた…くそ。

＊

そして山々を駈けること一晩。
途中、休息を2度ほどとりはしたが、マギナの言葉通り一晩で目的の場所へとたどり着くことができた。

コーディル村も山々に囲まれたド田舎ではあるが、ここは更に山深い。
普段から人が寄り付くことはないのだろう、まさに”鬱蒼（うっそう）に生い茂る”という表現が適切な山の中、目に付く道と言えば獣道しかない。

ここから先は目立つからと、セイムレーニを置いて4人は獣道を進んだ。

「…なるほどな、隠れるにはうってつけの場所だ」

「セリさん？」

「よく見ろ、微かにだが人が通った痕跡がある」

隠されてはいるがよくよく獣道に目を凝らせば、到底、獣では届かない高さの枝が不自然に折れてしまっている。
折れた枝に手を添わせ状態を見る。

「まだ新しいな」

「ふむ、これなら案外と見つけるのは容易かもしれないね。騎士団が来る前に片付きそうだ」

「マギナ、忘れるなよ。あくまで穏便に、だ」

「ふふ、わかっているよ」

その言葉に、どうだか、と私は目を細める。

彼女の場合、ことごとくその見た目と中身は比例しない。学院時代からそうだったが彼女は実に好戦的で、ある意味ではとてもいい性格をしている。

まぁ、その破天荒とも呼べる性格に好感が持っているからこそこうして友人を続けているわけだが、時としてその破天荒な性格は予想以上の被害を周囲にもたらすことがある。

「やりすぎて騎士団に目を付けられるのは絶対嫌だからな」

「大丈夫だって、信用しておくれよ――・・んん～？」

先頭を嬉々として進んでいたマギナが足を止める。

「おや、困ったね。道がわかれているよ」

その言葉に視線を先にやれば獣道は二つに別れてしまっている。

「まぁそう楽にはたどり着かせてくれない、か。どうする？」

「ここはやっぱりセオリー通りに二手に別れるっていうのが妥当じゃないかな？はい、セリ」

「？なんだ？」

渡されたのは小さな青い石。同じものをマギナも手にしていた。

「魔石だよ。この山ぐらいの距離だったら互いがどこにいるかわかるから、目標が見つかったら教えておくれよ。何、軽く念じればいいだけさ――・・さぁ！レガリア君！登山デートとしゃれこもうじゃないか！」

「ちょっ！？まて！何故私が貴様についていかなくてはならんっ！大体昨日からいい気になるんじゃ――・・ぐっ！！」

「ははは！照れ隠しも可愛いね！」

自分よりも遥かに小柄な少女に襟首をつかまれ引きずられていく青年の姿の何と滑稽で哀れなことか…

「○△□×――・・！！」

声にならない声を上げて助けを求めるように伸ばされたその手もむなしく、ずいずいと引きずられてあっという間に二人の姿は獣道の奥へと消えていってしまった。

「…何というか、逞しい方ですね」

「…帰ったらあいつの好きなものでも食べさせてやろうか」

「えぇ、そうですね」

私たちは深く深く憐憫のこもった口調で、二人の消えた獣道をしばらく眺めていた。

山に行こう！1（後書き）

ちなみに最初考えていたサブタイは「狩りに行こう！」でした。

山に行こう！（前書き）

セリ視点とディオン視点。

山に行こう！

さすが人里離れた山奥というべきか、進むにつれどんどんと道は険しくなっていく。
なるべく音をたてないように草木をかき分けながら獣道すらなくなりつつある山を進む。

「大丈夫か？」

「は、はい」

かけられた声に顔を上げれば、少し離れた場所にセリさんが立ち止まってこちらを見ていた。
しまった、また距離が開いてしまった。

人化して暫く経つ、最初の頃よりもこの体にも慣れてきたつもりだったが、ここまで荒れている山の中を進むのはまだ私の足には負担がかかるらしい。
さすがに転びはしないものの、枝や木の根に足をとられなんどもその体をよろめかせてしまう。
結果、セリさんの足を大きく引っ張ってしまっているのが現状だ。

セリさんと離れたくなくてついてきたのは私だ。

足でまといにだけはなりたくない、そう思って何とか追いつこうと躍起になって足を動かすが、山はどこまでも私に意地悪だ。
茂みに隠れた木の根に足をひっかけるのはもう何度目のことだろうか、思うように動いてくれない体に少し情けなくなる。と、前か

らセリさんの近づく気配がした。
再び顔を上げれば、先に進んでいたはずのセリさんがすぐ目の前までやってきていた。
「セリさん？」
その眉間には皺がより、どうみても機嫌が悪そうだ。
「遅い」
あぁ、やっぱり怒ってる。
「…はい、すいません」
何とも返す言葉もない。項垂れ謝るしかない私にさらにセリさんの言葉が降ってくる。
「お前のペースに合わせていたら日が暮れてしまう」
このままセリさんの足を引っ張るようならば、いっそのことここに置いていってもらおうか、とも考える――・・あぁ、でもそんなの嫌だ、セリさんと離れるのだけは嫌だ、嫌われるのは嫌だ、捨てられるのは嫌だー・・すぐに沸き立つそんな我侭な自分の思いに嫌気が差す。
どうすればいい？どうすればこれ以上セリさんが不快にならずにすむ…いや、やっぱり置いていってもらおう。それしかない、と口を開こうとするが心臓がきゅうっと締め付けられて、声が中々でない。
何て自分だけに都合のいいからだなんだ、と悪態を吐きたくなり

思わず両手に力が入る。
と、痛いぐらいに握り締めたその片手に触れる柔らかい感触。
「野宿はゴメンだからな」
次いで耳に届いたその言葉に「え、」と声をあげる間もなく、そのまま引っ張られるように体が前へ進む。
あれ？これってもしかしてセリさんと手を繋いでる！？やったー！！…じゃなくって、あれ？
「あの、セリさん」
「何だ？」
「置いてかないんですか？」
「はぁ！？」
呆れた顔で振り向いたセリさんに、本当に心底呆れた顔で「馬鹿」と怒られた。
「置いてく訳がないだろう、…迷われても見ろ、捜すほうが手間じゃないか」
私の手を握ったまま、セリさんは茂みをかき分け先へ進む。
進むセリさんの歩幅は変わらないが、その歩みは遅くなっている気がした。
それにすぐ目の前のセリさんがいてくれるからか、さっきまでと

はうってかわって凄く進みやすいし、その足元を見て真似すれば、躓くこともなく悠々と進むことができる。

掴まれていたままの手を握りやすいように少し動かしてもセリさんは何も言わなかった。

それから暫くは会話らしき会話はなかったが、繋がった手の温度と、顔は見えないけど少しだけ赤くなった彼女の耳を見て、私の心(なか)はポカポカと温まっていく。

この手を絶対に離したくない、そう願ってやまなかった。

＊

後ろを見やれば先程よりも少し離れた位置にディオンがいた。

声をかければ返事は返ってくるものの、だいぶ山道に悪戦苦闘しているようだ。

人化してそれなりにその体にも慣れてきたとはいえ、ここまで荒れている山の中を進むのは彼に大きな負担をかけていると見える。

転びはしないが、枝や木の根に足をとられなんどもその体をよろめかせている。

それでも私に遅れないよう必死についてくるその様は、さながら迷子になりかける幼子のようだ。

仕方がない、と私は歩みを止めると来た道を少し戻った。

戻ってきた私に、何やら考えこんでいたらしいディオンが顔を上げた。

「セリさん？」

「遅い」

「…はい、すいません」

「お前のペースに合わせていたら日が暮れてしまう」

そういって項垂れる彼の片手をとるとくるりと背を向けて再び歩き始める。

「野宿はゴメンだからな」

背を向ける直前、彼の目は大きく見開かれていた。

私の行動が予想外だったらしい。戸惑う声が「置いていかないんですか？」と問いかけてきたのでとりあえず「馬鹿」と返しておいた。

なるほど、さっきから沈んだ顔で考え事をしているとは思っていたが、置いて行かれると思っていたのか。

…本当に馬鹿だな、こいつは。

「置いてくわけないだろう、」

と口に出してから、はっと言葉につまる。…その続きを何というつもりだったのか、私は。

咄嗟に「迷われても見ろ、捜すほうが手間じゃないか」と口にすれば、「はい」と嬉しそうな声が後ろから聞こえてきた。

何で嬉しそうなんだ！とか思ったけれども声には出さずにぐっとこらえた。

…どうにも、最近調子が狂ってしょうがない。

ふと、今頃同じように山道を進んでいるであろう旧友が昔投げかけてきた言葉が思い出される。

『君は一度でも自分の領域（テリトリー）に他人を受け入れると、とことん甘くなるよね。何というか、お人好しすぎて見ているこっちが不安になるよ』

そんなことはない、と返せば『その上、無自覚だから余計タチが悪いね、君は』と呆れた声で笑う友との昔懐かしいその会話。

それを何故だか今、この瞬間に思い出して―・・あぁ、そうか私は彼（ディオン）を受け入れつつあるのか、と納得してしまった。

…ここでポイントなのは”受け入れている”ではなく”受け入れつつ”であるということ。

断じて完了系ではない！無駄な足掻きと思われるかもしれないが、あくまで現在進行系であるということを理解して欲しい。

『もう少しだけ一緒にいさせて下さい』

その言葉と、力を使った彼への”感謝”の気持ちとして、私はディオンを受け入れつつあるんだ。

だから握り返された掌の温度が嫌ではなく、むしろ”落ち着く”と感じてしまうのはきっとそのせい。

＊

暗転する視界。
どうなったのかと頭の片隅で冷静に状況を把握しようとする自分がいる。
足が滑って、傾いて。咄嗟に握っていた手を振り払った。
そうこうしている間にも浮遊感が全身を包んだ。
あぁ、足が地面についていない、そうか、私は今、落ちている。……
最後に見えたのはこちらに伸ばされた大きな掌と、泣きそうな顔の彼と、私を呼ぶ大きな声。
人魚のくせして、捨てられた犬みたいな顔をするんじゃない。そんな私の声は届かない。
そして私は落ちていく。
伸ばされた彼の手は私には届かない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4530m/

人魚「姫」と私

2011年10月1日12時39分発行